

イメージするのは常に最高の調理だ

すららん (ぷ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々な主題に則って何作かを書いていこうと思っています。何作品か書いてから統合するタイトルに変えますが、予定は未定なので今のタイトルはこのままです。

今回の主題は料理！

ああ、鍋を片付けるのはいいがー別に、おじやを作ってしまったも構わんのだろう？

→基本的にこんな感じの内容です

目次

ルート1

第一話 迷い続けた旅路の果てに | 1

第二話 護るべきモノ | 23

第三話 それぞれの理由 | 43

VSセイバー くあなたが私のシェフだったのですね | 66

第四話 愛する家族 | 106

最終話 あの日の空を思う | 149

ルート2

前編 君の願う幸福すら知らず | 169

番外編

※クリスマス特別編※ | 178

もしヘラ くもしもイリヤがヘラクレスをセイバークラスで喚び

出すという暴挙に出たら | 185

ルート1

第一話 迷い続けた旅路の果てに

『しょうがないから、俺が代わりになってやるよ』

ああ……自分は夢を見ているのだと、士郎はぼんやりとした意識の中で気付いた。

月の綺麗な夜、今は居ない養父と幼い“自分達”が最後の語り合いをしたあの日。

誓いの日。

忘れた事は一日だって無かったが、こうして夢で見ると改めて決意を固める事が出来る。

正義の味方になりたかった養父の、切嗣の夢を受け継ぐ事を決めた当時の思いを反芻する。

(ああ……忘れるものか、俺は絶対に正義の味方……)

『ああ、安心したー』

(ーにはならない)

そう、約束したのだ。

正義の味方にはならないと、誰かを助けたつもりの人間にはならないと。誰かを幸せに出来る人間になるのだと。

その為に衛宮切嗣という男が作り上げたモノを知っている、目指したカタチを、その理念を知っている。

その姿に憧れた。

だからこそ衛宮士郎はならなければならない。

(俺は絶対に、料理人になってみせるから)

F a t e / c o o k i n g s t o r y

第一話 迷い続けた旅路の果てに

それは本当に偶然の出来事だった。

いや、運命だった。

アインツベルンから娘のイリヤを取り戻しに向かい、その領地に踏み入る事も叶わず失意の帰郷の最中の出来事だ。

故障した密航船が最寄りの町へと寄港し、その近くに嘗て正義の味方として活動した紛争地域の1つがある事を思い出した。

今やその紛争は終わり復興に向かっていているらしい事を耳にした切嗣は、何の気なしに近隣の村へ向かう事を決めた。

いや、或いは確認の為だったのかもしれない。

(よく覚えている………)

殺した総数は124人。

両陣営の主導者、扇動者、協力者、これらの中から時勢や影響を鑑みて出来る限り最小限の犠牲で済ませた。そのつもりだった。

今ではまるで自信が無い。

聖杯という奇跡に縋って、恒久的世界平和の実現まで後一步の所にまで迫りながら、その方法を提示する事の出来なかった自分――殺す事しか考えられない自分の在り方に絶望した。

その聖杯は殺傷する形でしか願いを叶えられない不完全な物だったが、それは関係ない。衛宮切嗣の方法では世界平和は訪れないと、ハッキリ見せ付けられた。

そんな事に気付く為に、何年もの歳月と数多の命を犠牲にしてしまった。

「やはり、そうか……」

確かに紛争は終わった。

だが、もはや復興の為に立ち上がる力を彼らは失っていた。それは資源であったり、職であったり、土地であったり、労働力だった。

そう、あまりにも――人が死に過ぎた。

明日の食事どころか、今日の食事にも事欠く状態。

何日も飲まず食わずで過ごす者達は一様にやせ細り、或いは不自然に身体の一部が膨れていた。

復興を手伝う為と各国から派遣された者達は、自国の糧を増やす為

に勝手に工場を建設し、その恩恵を住人は殆ど得られない。

マスメディアはその立派な工場を「復興の象徴」などと囃し立てている。

着る物にも不足し不衛生なこの場所では体調管理など望める筈も無い。汚物すらそこら中に放置されており、病気を患い苦しむ者達で溢れ、死体すら散見している。

「……………」

それらの惨状を備に観察しながら、切嗣は歩き続けた。見知った光景に足を止め、屈み込む。

爆撃を受けたのだろう、見るも無惨に焼き焦げた跡には僅かに金属片が覗いていた。

思い出す。

武器の製造工場となっていたこの場所を襲撃した切嗣は、そこに居た人間の中で5人だけを選び殺害し、それ以外を魔術で誘導し逃がして爆破した。

「僕のしてきた事はー」

元傭兵を含む5人は銃火器の知識や仕入れる為の伝があつた。この工場が潰されても彼らさえ生きていたら、紛争はまだ続いていただろう。

だから殺した。

そして武器弾薬の補充を満足に出来なくなった彼らは、これが決定打となり継戦能力を著しく失いそれから間もなくして紛争は終わった。

そこまでしか知らなかった。

ああ、結果的に見れば切嗣が行った活動は確かに犠牲を減らす事に成功していたのだろう。

それを知らない敵国が、独自に掴んだ兵器工場の情報を元にその周辺に爆撃を繰り返し数百人に及ぶ無関係な人間を巻き込んで被害を出したとしても。

武器弾薬を失った彼らは、それでも諦めず単身爆弾を持ち特攻を繰り返し人命を減らし続けたとしても。

やがて若い男達を中心に活動していた彼らは、その大半を失い為す術も無く蹂躪され女は犯され子どもは野垂れ死に、一方的な勝者と無惨な敗者という形で紛争が終わったのだとしても。

「――何の意味も、無かった」

数だけを見て、人間を見ていなかった。

自分がやらなければあと十年は紛争が続き犠牲者は増え続けたと、そう確信して――しかし目の前の光景を見ても尚、そう主張する事に意味があるだろうか。

100の内99を救い、残った1の犠牲が君達の家族や友人なのだと声高に言えるものか。

正義の味方として活動した。

少なくともその気だった嘗ての自分の行動は只の殺人であり、救った人間など誰一人として居なかった事が改めて分かった。

「っ」

軽い衝撃を受けて倒れる。

手に抱えていた食料の入った袋を年端もいかない少年が奪い、路地裏へと走っていく姿が見えた。

盗られた事に対して思う事は無かった。

特に身なりを整えていた訳ではないが、外国人である自分が彼らよりもあらゆる意味で恵まれているのは確かだ。

そんな相手が特に警戒する事なく呑気に俯いているのだ、殺して財布や何から何まで奪わず、ただ食料だけを奪われた事に疑問を覚えたぐらいだ。

「いや、殺す力すら無いのか……」

全盛期の半分の力もなく隠居の身とはいえ切嗣は常人では無い。殺意があれば無意識にでも反応していただろう。

そうならなかったと言う事はつまり、殺意が無かったのだ。

こんな場所でもナイフぐらいは調達出来る筈だ、銃も有るかもしれない。それすら持つ事が出来ない程に力が無いのだ。

改めて先程の少年を思い出す。

フラフラと逃げて行く姿、その手や足はこれまで見てきた人間と同

様に痩せ細っていた。

納得し立ち上がり、ふと……その少年が向かった場所に歩き出していた。

理由は判然としない、それでも何か得体のしれない衝動に突き動かされ切嗣は早足で歩き続けた。

この判断が死を待っただけだった彼の人生にとって、最後のターニングポイントとなった。

「居た……」

入り組んだ構造では無いし、そもそも建造物の殆どは倒壊している。少年を見付けるのに苦労はしなかった。そこは小さな小屋で、中には複数人の少年達が身を寄せ合っている。

その中央で1つの弁当を分け合っていた。港町で適当に買った弁当だ、中身が何だったかすら覚えていないし、大した量があるわけでも無かった。

それでも少年達は嬉しそうに、美味しそうに食べていた。

(あ……)

罪がそこに存在した。

少年達に罪は無い、それは確かだ。

ただ明確に、此処に居る人間の中で衛宮切嗣の罪だけが確実に存在していた。

ただ機械的に命を天秤に掛け、殺してきた結果が目の前にある。

彼らの親は紛争に関わっていたのかもしれないし、関わっていないかもしれない。紛争が続いていれば彼らもまた当事者になっていたかもしれない。

そんな、もしもの話など関係ない。

どんな理由や経緯が有ったとしても、今こうして生きる事にすら困窮している彼らを生み出した原因の1つは紛れも無く己自身なのだ。

衛宮切嗣という正義の味方気取りの殺人者が、彼らの現状を作り上げたのだ。

救うべき者達だ。

本当に正義の味方ならば、彼らこそを救わなければならない。というのに、他ならぬ己が彼らをこんな場所で、こんな風に生きるしか出来ないようにしてしまっていた。

「っ……いーくそー！」

思わず声を張り上げ、少年らが一斉に此方を向いた。その瞳に浮かんでいる表情は様々で、切嗣の顔に気付いた1人の少年などは恐怖に満ちた眼差しで見つめていた。

「あ……いや、僕は……」

その眼差しに気圧された。

少年が何事かを呟き必死に頭を下げる、周囲の少年らもそれに習い恐怖に満ちた眼差しで切嗣を見つめ何かを喋っていた。

その内容は切嗣には聴こえなかった。

言葉が分からない訳ではない、掠れる様な声だったからではない。必死に謝罪を訴えている事など、誰でも分かる。

そんな事が理解出来ない程に今、切嗣は衝撃に身を震わせていた。駆け出した。

逃げる様にその場から、全力で、誰も居ない場所に向かって力の限り走り続けた。

「ハア……ハア……っ！ うー！」

体力の限界まで走り石に躓いて転倒する。

咄嗟に受け身を取る事も出来ず、顔面から勢い良く地面に叩きつけられ無数の擦り傷が出来た。

その痛みを感じない、ゆつくりと深呼吸をしながら仰向けに姿勢を変えると空は薄暗くなり始めていた。

まだ昼過ぎだったにも関わらず、こんな時間になるまで自失して走り続けていたのだ。己の行動を冷静に振り返り、溜め息を吐く。

誰かに恨まれても仕方が無い人生だった、聖杯の内で妻のカタチをしたモノにすらそんな目で見られた事もある。何度も何度も、そんな目をしてきた相手を殺してきたのだ。

だから大丈夫な筈だった。

「あ……ああ、うああ………っ！」

先程の眼差しを思い出し、込み上げてきた嗚咽を抑えられなかった。

まるで耐えられない。

慣れていた筈の、先程よりも恐ろしく、殺意にまみれた視線すら浴びた事があるのに全く耐えられなかった。

己の内に今も存在する呪いすらも、比較にならない程の絶望感。

『ケリイはさ……どんな大人になりたいの？』

脳裏に少女の声が蘇る。

大切だった少女、誓いを話せなかった少女、殺してやれなかった少女。

あの頃は誰かに言うのが気恥ずかしくて言えなかった。正義の味方になりたい”という夢を、今の自分は全く別の理由で言えない。

言える訳がない。

どうしてこうなってしまったのだろうか。

正義の味方など夢物語だと理解し、それでも犠牲にしてきた者達を無駄にしない為に出来る限りの手を尽くした。

それだけは信じていた。

今では、その思いすら揺らいでしまいそうだった。

「僕は……」

もはや切嗣は正義の味方を諦めている。

それでも、さっきの光景を見て何もしない人間など正義の味方がどうこうなど無関係に、最低を通り越して人間でならない。

だから行動する。

魔術師殺しではなく、正義の味方でもなく、衛宮切嗣として初めて彼らの為に何かをしたいと強く思った。強く願った。

人間が出来る事など高が知れている、この村を救う事などどう考えでも出来ない。

あの少年達を救う事もだ。

「いや、違う」

誰かを救うという考え方自体が烏滸がましい。何様のつもりだろ

うか、こんな調子だから人命を軽く見てしまうのだ。

起き上がり、彼らに何が必要かを考える。

食料は当然として服も必要だろう、しつかりした住居に彼らを護る存在が必要だ。

まだまだ必要だが、これ以上を考えても意味がない。それは己の限界を越えている。

今の切嗣にとって優先順位は既に決まっている。

士郎と、イリヤ。

この2人の為だけに生きている。それを変えるつもりは毛頭ない。

(僕の命が尽きる迄に必ず……イリヤを迎えに行ってみせる。ただ、今回は――)

食料と衣服を買い揃える事に決めた。

彼らの生活を考えれば一時凌ぎにしかならないのは明白だ。保存食を多目に買うつもりだが、育ち盛りの年頃の彼らが我慢し節制するなど考えられない。

成長してしまえばサイズが合わなくなり、いずれ着れなくなるだろう。

使い終わってしまえば、それ迄だ。

何度も通うつもりは無い、これ一度きりだ。その後の彼らが飢えて死んだとしても、その前に周囲の人間達から食料や衣服を奪われたとしても。

自分は何もしない。

誰かに聞かせれば無責任だと言われるだろう。

身勝手な自己満足だと。

偽善者だと。

その通りだ。

それで構わなかった。

小難しい理屈など知った事ではない。ただの思いつきだ、気の迷いの一種だ、だから行動するのだ。

「取り敢えず買えるだけ買って……ああ、そう言えば近くに居たな」

この村の近くの都市に、表向きは名士の魔術師が居る事を思い出し

た。そいつの金を使う。資産の半分ほどなら直ぐにでも動かせるだろう。

命を奪わず・奪わせず、代わりに資金提供をしると自己強制証明で縛っているので構う必要は無い。これに関しては全く良心が痛まない。当然だ、そもそも魔術師に人権などありはしない。

元は武器購入の資金調達先の1つだった。それを今回は人助けに……いや、自己満足の為に使う。

思う所が無い訳ではない。それでも誰かの命を奪う事に使うよりは、ずっとマシな使い道に思えた。

翌日。

大きなコンテナを詰んだトレーラーが20台ほど小さな村へと走り出した。

先頭のトレーラーの助手席に切嗣は居た。凡そ10年ぶりの再会となる魔術師は、切嗣の顔を見た瞬間に全てを諦め歓迎の言葉を心から口にした。

しかし切嗣、これをスルー。要件だけを掻い摘んで伝える。

言われるがままに己の資産の四分の三に及ぶ金額を使い、大量の食料や衣服、簡易的な TENT や救急箱等々を仕入れる為の根回しに馬車の如く働かされた魔術師は、それでも笑っていた。笑うしかなかった。

定期的に人を送りだす事にも賛同する。こんな事、切嗣に殺され家系が断絶する事に比べれば安すぎる出費だった。

思いがけない程に肥大化していた資産のお陰で、当初予定していたよりも上等な支援を彼らに出来ると分かった切嗣だったが、その顔に喜びは浮かんでいなかった。

当初よりもマシだが、その程度だ。

あくまでも少年達の為に動いた切嗣にとって、それ以外の者にも恩恵を受けられる状況は、少年達の生存率を上げる為に過ぎない。

定期的な人材の派遣も、良くて数ヶ月に1度程度だろう。

一時凌ぎにはなっても、それ以上にはならない。

復興を考えるなら何よりも安定した環境が必要だ。端的に言ってしまうと、金を稼がせる事が。

野菜を育てるなり、物を作るなり……何でも良い。経済活動を出来る様に支える事が必要だ。

その点から見れば、今回のこれは余りにも下作だ。

与えられるだけでは、何も力にはならない。

搾取するだけの「自称復興支援」よりもマシだが、大した差は無い。

(だから何だ……)

そんな事は分かっているのだ。

人を殺す事しか知らない男には、これ以上は手に余る。何でもかんでもしようと手を伸ばすから、大事なモノを見落としてきた。

もう間違わない。

さっさと配給を済ませ、日本に帰る。

そしてイリヤを迎えに行く算段を練り直す。

拡声器を使い村の中を歩き回った。

中央の広場に行けば食料と衣服が貰えると、少ないながらも住居を用意したと。動けない者が居れば手伝うと、それらの言葉を繰り返して歩き回った。

最初は疑っていた者、興味を惹かれた者、病を抱え動けず困っていた者、様々な者達で広場は埋め尽くされていった。

その中には先日、切嗣の弁当を奪った少年達も含まれていた。

切嗣が率先して食料を食べ、毒が入っていない事を見せる。身体が汚れている者は綺麗に洗い流し、新しい服を着せる。

連れてきた医者に診察を任せ、テントや簡易トイレの設置に汗を流し、清掃業者に指示を出して、放置されたままの死体を茶毘に付す。

半日掛かりでそれらを終え、トレーラーの陰で身を休めた。流石にキツかった、心身共に使い果たした。

「終わった……か」

煙草を持ち出してきたが、吸う気にもなれない。

やりたい事は出来た。後はこの場の責任者として全員の所在を確

認し終えてから港に向かうだけ。

それでお終い。

もう彼らに関わる事は無い、思い出す事もそんなに無いだろう。

それでいい。自己満足の行いを誇る気は無い、後悔する事も無い。

誰に話す事もなく記憶の奥に仕舞われ、死ぬ時の走馬灯で思い返す事の一つになるだろう。

「あの……」

そうなる筈だった。

声を掛けられた事に少しの間を置いて気付き、ゆつくりと首を傾ける。

見覚えのある少年だった。

それもそうだ、こうして今日此処に来ようと思つた直接の理由。弁当を盗られ、追い掛け、勝手に絶望して、逃げ出した相手だ。

「……」

「あ、その……」

上手く声が出なかった。

声を掛けられた以上は何かしら話す為にそうしたのだ、それは分かる。しかし何を話せば良いのか、そもそも何故話してきたのか。

様々な思いが脳裏に過ぎつては消えていく。

そうして惚けたような顔を晒していた切嗣に、全く想像だにしていなかった言葉が聴こえてきた。

「ありがとうー」

簡潔な一言だった。

だからこそ雄弁に、その言葉には少年のありつただけの思いが込められていた。

朗らかに笑い、そそくさと走り去って行った少年の背中を切嗣は見続けた。何を言われたのかを理解できない、いや言葉の意味自体は理解している。

気付けば涙が流れていた。

ありがとう、たった5文字に込められた思いが、切嗣の心を激しく揺さぶった。

少年は自分達の現状を、恐らく理解していない。していればお礼など言う筈が無いからだ。

そうだ、理解していないからこそそのお礼の言葉は、何一つとして打算の無い想いは、だからこそこんなにも――心をうつ。

「……………んな」

それは今までの人生で感じた事の無い気持ちだった。

正義の味方として多数の為に少数を殺してきた時には感じる事の無かった、何処までも自己満足でしかない行いの果てに、ただ一言……「ありがとう」と言われ、泣いてしまった。

嬉しかったのだ。

どんなに自己満足からの行いだとしても、その場凌ぎの方策でしかないとしても……その言葉に報われた気がした。

「……………こんな、簡単な……………事……………だったのか……………っ！」

ああ、間違いでは無かった。

正義の味方になろうと思った事は間違いではなかった、ただ衛宮切嗣の方法だけが間違っていたのだ。

誰かを助けるヒーローに憧れた、なら助ければ良かったのだ。誰かを殺す必要は無い。

下作と蔑んだこの、どうしようもない自己満足にすら劣る行為しかしてこなかった事に気付いた。

気付けた。

立ち上がる。

今まで感じた事が無いほどの力が全身に漲っている。これは錯覚だ、気分が高揚しているから感じている偽りの全能感。殺人機械としての切嗣なら、そう断じただろう。

しかし違う。きつと違う。

これが、この衝動が、愚かしきこそが大切だったのだ。小難しい事を考える必要など無い。

「そうだ、僕はまだ……………なにもしていなかった」

今更また正義の味方を目指す気は無い。

士郎とイリヤの為に生きる誓いに何ら変わりはない。

ただ、少しだけ。ほんの少しだけ自分にやれる事をやっていくのだ。

先ず最初に何をしようかと考えて、腹が空いている事に気付く。腹が減っては戦が出来ぬ、昔の様に無理をしてまで身体を動かす必要は無いだろう。

助手席の扉を開けて、そこに放置されているファストフードの袋を掴む。

温いコーヒーと冷めたバーガーを咀嚼しながら、ふと思い付いた。

これでいい、これを始めよう。

適当な思い付きだが、だからこそ良かった。

「衛宮バーガー……語呂が悪いな、まあ名前なんて何でもいいか」

やる事は決まった。

もうこの国に、この場所に来る事は無い。残された時間は、そう多くは無いのだから。

エミヤグループ。

全世界にチエーン展開している『ファストフード・エミヤ』を初めとして、多数の飲食店や病院・介護施設などを傘下に収めている複合組織の総称。

創設者である故・衛宮切嗣氏の理念により利益のほぼ全てを戦争災害などの救援金に充てているにも関わらず、現会長・藤村雷画の卓越した手腕と多数の出資者の存在により急成長した大企業である。

今や日本国内は元より諸外国に於いても学生が就職したい企業の十肢に入る程の人気企業だ。

それはこの冬木市は穂群原学園でも例外では無く、寧ろ他のどの学校の生徒よりも熱意に溢れていると言っても過言では無かった。

「なあ衛宮！ お前の力でどうにか採用されないかなあ？」

「ちよつと！ 自分だけズルいわ。ねえ衛宮くん、私も紹介して欲しいな！」

「俺も！ 俺も紹介してくれないか、頼む面接だけでもいいからさー！」
それも当然である。

何故ならこの穂群原学園には、エミヤグループ次期後継者と噂されている衛宮士郎が通っているのだから。

まだ3年生になる前にも関わらず学友達は、熱心に士郎へ自己アピールをしていた。

半ば以上が縁故採用を仄めかしているが、これは軽い冗談の類だ。そんな志の低い人間など早々居はしない。

多分。きつと。

「ハア……みんな知ってるだろ？ 俺は経営に関わってなんかなくてさ。頼むならまだ藤村先生に頼んだ方がいいって」

「タイガーに頼んでも意味ねーって、だってクビになったんだろ？」

「藤村先生を秘書にしようって命知らずよねー」

「つか教師になれた事自体、俺はまだ疑ってるぜ」

「ほおーう。それはー、どーいう事なのかなーん？」

「だってタイガーって頭良さそうに見え……って！ た、タイガー!?!」
理解したか？

これが、虎の尾を踏み付けるという事だ。

「誰がタイガーじゃアア!! シャラー……ッ!!」

恒例となったタイガー弄りで話は有耶無耶になり、今日も慌ただしく1日が終わった。

時間は放課後、部活や受験に汗を流す青春の時間だ。

実の所、士郎がエミヤグループの後継者である事は確かな事実である。と言うよりも、未成年の士郎から保護者代わりである雷画が経営権を委託されている形なのだ。

本人的には成人した後に正式な形で雷画へと経営権を譲渡するつもりであるが、そうはさせない為に周りを固められている事には気付

いていない。

切嗣が思い付きで始めた小さな店は、よほど時代の流れに合ったのだろう。

あれよあれよと業績を伸ばし、直ぐに本人の与り知らぬレベルにまで膨れ上がった。

大まかな方針を決め、後は任せ切りにされた部下達を尻目に株や投資に適当に手を出すと、何故か利益を出し続けた。

入念な下調べも無く店を乱立するも、例外無く利益を上げ続ける。金は金を呼び、更なる金を生み出す。

その後も、彼の生来の運からは考えられない程の幸運に恵まれ続け今や衛宮家は冬木市最大の資産を持つ迄に至った。

そしてそれは、彼にとつて最良の結果を齎した。

「藤ねえ、今日も来るんだろ。何かリクエストあるか？」

「うーん……そうねえ、何でもいいわよおー」

「そういうの困るんだけどな」

「じゃあ……イリヤちゃんの好きな物にしてあげなさいよ。私はく士郎の料理なら何でも大好物なんだからあ♪」

潤沢な資金にモノを言わせ、切嗣にはもはや見付ける事の叶わないアインツベルン城が存在する。『であろう山岳地帯』を爆撃した。

幾ら千年の歴史を誇る魔術師の大家と云えど、専門は錬金術だ。戦闘には向かないし、異空間や別次元に城を構えている訳では無い。

確かに地球上に存在するのだ、ならば風潰しに探せばいい。その方法が些か過激だったが切嗣にとつて知った事では無い、魔術師に人権は無い……それも、己の妻や娘をあんな『出来損ないの聖杯』の為に使おうとした外道など生かしておく価値も無い。

現代の兵器・特にその単純な火力に於いて科学は既に魔術を越えている。

容赦など微塵も無い爆撃は連日に及び、やがて隠されているアインツベルンの本拠地にも降り注いだ。

目算通り結界を維持する機能を失った城に突入し、これまた目算通り結界を維持する為に全力を尽くし疲弊したユーブスタクハイトを

抹殺。

千年の妄執は呆気なく終焉を迎えた。

持ち出せるだけの秘奥とイリヤを無事に回収し、完全にアインツベルン城をこの世から抹消。

勿論、ミサイルぶっぱである。

その後、アインツベルンの秘奥や巨額の金と引き換えにイリヤの身体を何とか出来る眼鏡の似合う魔術師に交渉・了承を貰い、聖杯の機能を抑え普通の人間として生きて行けるように調整。

それから、切嗣が死ぬまでの僅か半年程しか家族3人で過ごす事は叶わなかった。

それでも夢に破れた男が手にするには余りある幸福の中で死んでいった。

「そうだな……そうするよ。んじゃ」

「はいはい。それから士郎、たまにで良いから道場に顔を出しときなさいよー?」

「ああ、分かっているさ。美綴にも今日さん言われたからな」

「それなら宜しい。桜ちゃんに、今日は早く終わるから一緒に帰ろうねーって伝えといて!」

じゃね! シュバツ!

陽気な挨拶と共に小走りで職員室へ向かう大河を見送り、言われた通り道場へと向かう。

道中でも同級生や、まだ進路の決まっていない3年生に泣き付かれ苦笑しながら丁寧に断りを入れる。

昔はこんな事は無かったが、大河がうっかりエミヤグループと士郎の関係性をバラしてからは毎日こんな調子だ。うっかりする人間が間違ってるんじゃないか、と何故か思ったりした。

赤い少女がクシヤミをしたとか、してないとか。

名目上は弓道部に所属している士郎であるが、彼は学友達と違い何年も前から明確な目標に向けて日々鍛練を積み重ねている。

弓道を始めた事はその鍛練の一環でしか無い。

部長である美綴が熱心に引き留めていなかったら、ある生徒との諍

いの際に辞めていただろう。

今では幽霊部員に近いが、それでも彼の射は誰が見ても群を抜いている。請われて1度や2度射るだけだが、それだけで充分な指導となる。

流石にそれだけでは申し訳ないので参加した日は居残って掃除をする事になっていた。

が、今日はする訳にもいかない事情があった。

「来たぞー美綴」

「おう！ ちゃんと来たな衛宮。さあ、射っていけ」

「ハハ……いや、今日は遠慮するよ」

挨拶もそこそこに射る事を強要する美綴に苦笑しながら丁寧に断りを告げる。

入口の近くに居た部員達は見慣れた光景に口を出す事はなく、しかし士郎の射が見れない事を残念に思ったりした。

「今日はずって事は、明日は良いって事か？ そうだな、うん仕方ない。今日は勘弁してやろう」

「なんでや……」

「ほら、何時までもそこに立ってるんじゃない。間桐に挨拶していくんだろ？ 早く上がんな、それとも呼んでこようか？」

よく分からない理屈だが、彼女の中では言質を取った事になったらしい。本気で嫌がる事をあまり無理強いはさせないタイプだが、こうなると話は別だ。

明日もし捕まってしまったら帰る時間が遅くなってしまうだろう、イリヤから「最近」暗くなる前に帰るように言い含められているのに困った話だ。

それはそれとて、何もしない人間が道場に上がる訳にもいかない。申し訳ないが呼び出して貰う事に決めた。

僅かに間を置き、ひよつこりと顔を出した後輩に手を振る。美綴が耳打ちして、真っ赤な顔になりながらワタワタと手を振り、その内の一つが鋭い一撃として顎に当たった。

あれは痛い、沈黙した美綴を尻目にまだ若干顔を赤らめながら近寄ってきた後輩の意外な実力に士郎は感心してしまった。

「お、お待たせしました、先輩！」

「い、いや、待ってないぞ桜。急に呼び出して悪かったな。藤ねえがさ、帰りは一緒に行こうって言ってた。悪いけど迎えに行行ってやってくれるか？」

「ふふ……はい、分かりました」

士郎の中で大河という女性は、いざという時に頼りになるといった感じだ。逆に言えば、いざという時以外はどうしようもないと思っっているという事でもある。

その考えが通じたのだろう、桜は少しだけ笑ってしまった。

とても先ほど美綴を一撃で倒した相手とは思えない程のたおやかさだ。

「ーじゃあ、俺は買い物に寄ってから帰るよ」

「はい。お気を付けて」

特にとりとめのない会話を二・三し、別れた後は誰にも見付からないうよう校舎を出る。

校外に出れば流石に士郎の顔や正体を知る者は少なくなる。それでも慣れ親しんだ商店街の人達にはバレてしまうが、そういう人達は派手に騒いだりはしない。

藤村組の者が護衛として周囲を固めており、マスコミなどには気を使わなくて良いのが幸いか。

夕飯は鍋に決めた。

先週の大食い番組で見たちゃんこ鍋に異常なまでの食いつきを見せていた姿を思い出し、これなら気に入って貰えるだろうと考えたからだ。

日本に来たばかりの外人ではあるまいに、未だに日本特有の食べ物や文化に並々ならぬ興味を示す小さな「姉」を思いつつ、手早く買い物を買わせていった。

「おかえりシロウ！ わ、何これ今日は凄い量ね。

一つ袋を持ったげるわ。なに遠慮してるのよ？ お姉ちゃんの言う事は素直に聞きなさい！」

遠慮していると強引に袋を取られた。

実年齢は兎も角として見た目は幼い少女の為に、お姉さんぶりたい子どもにしか見えない姉。初めて来た頃よりも少しは成長している筈だが、それでも士郎とイリヤを見て姉弟と思う者は居ないだろう。

されど的確に一番重い袋を見つけ出す手腕は流石といった所か、フンスと鼻息を荒くして台所へと持って行く背中は確かにお姉さんらしさが垣間見えた。

「隠しといて正解だったな」

玄関の外に置いていた一番重たい荷物を抱え直し、今頃は団子を見付けてつまみ食いしているだろうイリヤの元へ急ぐ。

居間には大量のマンガやDVDが散乱していた、以前からの物や届いたばかりの未開封品に特典などで足の踏み場も無い。テレビには最近ドはまり中のプリズマだかりリカルだかマジカだか士郎には分からないが、魔法少女アニメが流れている。

基本的に学校に通っていない彼女は日がな1日ここうしたサブカルを堪能している。

散らかしてもキッチンと直すので、来客時以外はあまり強く注意する気にはならない。

「しりょー、なにひてるの？」

……らあー、あにそれ！」

案の定お団子を口に含みながら顔を出したイリヤは、士郎が隠していた大きな荷物を目敏く見付けて少しだけ不満そうな声を出した。

ゴメンゴメンと軽く謝りながら、急いで生ものを冷蔵庫へと仕舞う。ぶちぶちと不満を垂れ流すイリヤには、美味しい夕飯を作る事で謝罪とするしか無いだろう。

少なくとも、今夜の献立を聴いてキャツホウしてる彼女の脳に長く不満が残るとは思えなかった。

軽く下拵えを終えて「مامィざあーんっ!!」と泣き叫ぶ声の聞こえる居間を素通りし、大根を持って庭へと向かう。

これから鍛練を始める。

本当は千切りにしたい所だが、夕飯の事を考えるとそんな細切れには出来ない。仕方がないだろう。

目標は1分以内。

「……投影開始」

イメージするのは幅広の大剣。

縦2メートル・横20センチにも及ぶ長さで5センチもの厚さ、その重量と頑丈さで敵を鎧ごと叩き潰す為に生まれたその大剣を――改竄する。

柄を排除、∩の様に折り曲げ地面に突き立てまな板として代用する。……構成に問題あり、長時間の維持は不可能。補強。

大根をその上に置き解析する。

全体を読み取りながら包丁を投影――成功、使い慣れた感触は台所にある本物と変わらない。

ここまで30秒、少し急がなければならない。

包丁を破棄、刃のみ10振りを待機状態で維持。大根を持ち上げ大剣を破棄、籠を投影してその上に放り投げる。

「……っ！ 射出、開始」

次々と空中から生まれ多角的に大根を切り抜ける、その瞬間に破棄して再装填。3度ほど繰り返し。

無事に籠の中に落ちた大根を検分する、面取り以外は及第点。待機しておいた刃を破棄、包丁を高速投影――失敗。これでは使い物にならない。

やはり連続投影には難あり。所要時間は1分5秒、要修行だ。

「はあ……くそっ、まだまだだ」

再度包丁を丁寧な投影して面取りをする、細かな作業にはどうしてもミスが目立つ。

こうした細々とした鍛錬がどんな形で将来の役に立つかわからない。だから少しでも暇が出来れば続けている。

切嗣から託された夢の為にどんな場所でも、例え手が使えなくとも何時もの様に調理を行えなければ話しにならない。

特に被災地では。

『日本で暮らす事に不自由はまず無い。けどね士郎、世界には今日を生きる事にも苦勞している人達が大勢いる。住む所や食べる物さえ満足には手に入らないんだ』

イメージする。

箸、皿、茶碗に汁椀、フォーク、ナイフ、スプーン……ありとあらゆる食器を想像し創造する。

ここからは速さは必要ない、中身の無い出来損ないを造ってはならない。集中する。

『食器もそうだ。手掴みで食事を行うと病気に罹る危険性が高い。だからね士郎、君のその才能はとても役に立つんだ』

何年も続けていれば流石に分かる、これは衛宮士郎の魔術の本分では無い。剣を造る事……いや、その根本にある“もの”こそが本分だ。

分かっている。

だからこそ意味がある。やってみせる。

魔術使いではなく正義の味方でもなく料理人として衛宮士郎はコレを成さなければならぬ。

「全投影……開始！」

設計図を固定し魔力の続く限り連続で創り出す、ナイフやフォークなどは魔力の消費が軽いが、鍋やフライパンになると消費量が跳ね上がる。

魔力が足りない、ならば補えばいい。

閉じている回路を無理やり叩き起す、これで13本目。激痛と引き換えに精度が増す、滞っていた魔力の流れが正常になっていくのを感じる。

これならイケる。

暫く黙々と造り続けた。

合計150を超えた辺りで不意に背中に手が触れた事に気付く。

ああ、ならこれで終わりだ。

まだまだイケる気がするが、彼女が判断したのならこれが今の限界

なのだろう。また倒れる訳にはいかない、あんな泣き顔をさせてはならない。

「ありがとう、イリヤ」

「ううん、いいわ。続きは夜になさい。もう直ぐタイガ達が帰って来るそうよ、早く準備しないとね」

気付かない間に日が暮れ始めている。

身体の調子は悪くない、無理やり開いた回路が痛むが調理をするのに些かの問題は無い。

いや、一つだけあった。

「しまった、大根……ああ、やっちゃった」

「あーあ、土が付いちやってる。どうする、捨てちゃう?」

「ん……いや、モノ自体は良いからそこまでは必要ないさ。丁寧に殺菌して煮物にでもしとく」

「そ、ならいいわ。ねえねえシロウ！ 早く作りましょうよ、私もお手伝いするんだから!」

よほど楽しみなのだろう、身振り手振りで興奮を表すイリヤの姿に苦笑しながら投影を破棄する。

造ったら必ずその場で消せ、何度も言い含められた事だ。こればかりは未だに何故か分からないが、多分ジャマになるからだろう。

その間もイリヤは急かすように騒ぎ続けている、小刻みにジャンプしたりする姿はやはり見た目通り子どもらしい。

絶対に口には出せない事を考えながら、はてさてご飯は何合炊けばいいやら……と、鍋とのバランスや虎の餓え具合に頭を悩ませるのであった。

第二話 護るべきモノ

無数のホムンクルスの死骸。

輪になるように折り重なるその死骸達の中央で、切嗣はコンテナダーにゆったりと銃弾を詰め直し床で血塗れになって倒れている老人へと向けた。

既に粗方の魔力は使い果たし、更に魔術回路も半分以上が機能していない老人には最早この銃弾を防ぐ事は叶わないだろう。

それでも全く油断出来ないところが、流星は千年続く一族の長といった所か。

「……ユーブスタクハイト。貴方にもう一度会ったら、どうしても訊きたい事があつた。答えて貰えるか？」

手負いの獣を前にして悠長に喋る事の愚かさを知らない切嗣ではない。それを理解していても尚、訊かねばならない事があつた。

確かめなければならぬ事が。

「……フンツ……裏切り者、風情が……今さら……何を訊きたいと……」

「貴方は聖杯が、その中身が……最初からあんなものだと知っていたのか？」

「……？ ……く、くく」

質問に答えるでもなく老人はくつくつと笑い出した。まるで、そんな事を訊かれるとは想像もしていなかったと言わんばかりに壊れたように笑った。

その笑い声は、そこら中にある骸や城の残骸、肌を刺す寒波よりも尚寒々しきを感じさせる。

「当然であろう……知っていたとも……くは！ アレこそが我らの悲願を叶えるのだ、知らぬ道理があろうものか」

「……知っていないながら、それでも僕にアレを取れと言ったのか？」

「そうだと、裏切り者よ……貴様の所為でせっかく降臨しかけた聖杯が吹き飛んだ……ふは……全く愚かしい事よ……貴様を選んだ事も……託すしか無かった我らも……くはひはひは！ ゲフツ！

「ゲフツ！」

もう充分だ。

理解していたつもりだった。

魔術師の行動や思考を熟知しているからこそ、ソレを逆手に取る事で今まで何人もの魔術師を殺してきた。

それがどうだ、正にユーブスタクハイトの言う通りだ。笑うしかない。

愚かしい、衛宮切嗣は魔術師の事をまるで理解など出来ていなかった。これが魔術師、こんなものが魔術師。

「ありがとうー」

だから感謝を。

一発の銃弾は正確に老人の頭部を粉碎した。

千年の妄執の終焉。

「ー魔術師でいてくれて、ありがとう」

魔術師は人間ではない、その言葉の真の意味を理解した。目を伏せ今日までの生涯を振り返る。

大勢の人間を殺してきた、大人、子ども、女、老人、母代わりの師、妻さえも。

分け隔てなく殺し続けてきた。

罪深い、もはや何をして償えない罪を衛宮切嗣は背負っている。

それでも魔術師を殺してきた事だけは間違いでは無かった。

アインツベルンが聖杯を手にして何を行う気だったのか切嗣は知らないし興味もない。その「何か」の為に、汚染された聖杯を躊躇なく使用するという蛮行。

願いの為なら世界が滅んでも構わないという歪んだ精神構造。

それが魔術師。

「アイリの敵討ち……なんて言う気は無い。僕にお前達を責める資格は無いしな。

アイリを殺したのは僕だ、僕が彼女を殺した。僕の罪だ。お前達魔術師なんかにーその罪はくれてやらない」

この世で最も愚かしい男が世界平和という誇大妄想の為に殺した

のがアイリスフィールだ。
心から愛していた妻だ。

衛宮切嗣の罪。

断じて、聖杯になる為に死んだのでは無い。

アインツベルンという魔術師一族の妄執の為に死んだのでは無いのだ。

それだけは譲れない。

「……」

踵を返す。

短くない時を過ごした場所だが感慨はなかった、大事なものは此処には無い。おざなりに爆薬を配置しながら回収できるだけのモノを纏めて外に出る。

後は特にする事も無い、この日の為に秘密裏に雇った傭兵達は金さえ渡せばキツチリ仕事をこなすプロばかりだ。魔術に造詣はなくても、彼らに渡した武装と内部に仕掛けた爆薬の連鎖は確実にアインツベルンの存在をこの世から抹消するだろう。

そんな事よりも切嗣にとって、これからの方がよほど重大な案件だった。

「やあ、お疲れ。後は手はず通りに頼む」

「ハッ！」

「……もう、起きたかい？」

声を掛けられた男は黙って頭を振る。

一際嚴重な警備下に置かれている装甲車の中で眠りに就いている小さなお姫様と語り合うのは今暫く先になるだろう。

それならそれで構わなかった、これから先はする事が山程ある。感動の再会とはいかなかったが現実はこの様な物だろう。

「帰ったら家族を紹介するよ、イリヤ。キミはお姉ちゃんになるんだ。士郎っていう名の子でねー」

ぐっすりと眠る娘に語り掛けながら、衛宮切嗣はアインツベルンの本拠地を後にした。

その生涯を終える約一年前の出来事。

第二話 護るべきモノ

「行つてらっしゃいシロウ、今日も早く帰るのよ。大事な話があるわ。いいわね?」

「分かつてるさいリヤ。それじゃ行つてきます、戸締り任せた」
「ん、任されたわ!」

学校に向かった可愛い弟を見送り、姿が見えなくなると張り込み警護をしている藤村組若手（20代独身、非公式イリヤFC会員N.O.0047）の男に手を振つてからしつかり施錠して居間に戻る。

男は悶えた。

一時停止していたアニメを再生し乱雑に幾つものスナック菓子を開封し冷蔵庫からジュースを取り出す。少しだけ苛立たしげに着席してガリガリと菓子を食べ始める、こうしてヤケ食いでいないと取り乱しそうだった。

尤も、普段も似たような食生活をしているのだが。

（サイアク……! シロウに令呪が現れるなんて思わなかった!）

今朝の事だ。

士郎が手に傷を負ったと聞き、珍しい事もあるものだとの気なしにソレを見た。咄嗟に声を抑えられたのは奇跡だ。

なるべく話を逸らすように誘導し、包帯を巻かせて送り出したは良い物の知識のある者には見抜かれてしまうだろう。この土地の管理者である遠坂は勿論のこと、間桐には「確実」に伝わっている。

2度と聖杯戦争が行われないように切嗣が施した仕掛けは間に合わなかった。前回から僅か10年での再開に「聖杯としての機能を抑制した」イリヤは直前まで気付く事が出来なかった。

生前の切嗣が話していた第四次聖杯戦争の顛末を思い起こす、結局士郎には伝えられないままだった悲劇の内容を。

おぞましい聖杯の正体を。

(こうなったらリンに事情を話して協力して貰うしか無いわね。魔術師とは思えないぐらい甘いし、金を出せばチョロいわ)

管理者としての遠坂は衛宮よりも上位だが、資産という点で文字通り天地ほどの差が存在する。

大聖杯の現状を見せるだけでも充分に協力を仰げるだろうが、そこから辺を匂わせれば万が一の事態も無いだろう。

その程度には今代の遠坂である遠坂凜という魔術師を信用し、同時に舐めていた。

そもそも、令呪さえ現れなければ聖杯戦争は無視しても問題無かった。何故なら「失敗する」と理解しているのだから。

聖杯の器を製造するアインツベルンは人知れず滅び、残された最後の聖杯の器たるイリヤは既にその機能を失って久しい。小聖杯なくては儀式は完成しない。

聖杯起動のエネルギーである英霊の魂は、敗北した瞬間に座へと戻るだろう。

間違っても「穴」が生まれる事は無い。

(問題は終わってからね……あのマキリが黙って大聖杯を解体する事に同意するとは思えないし)

間桐の……いや、間桐臓硯ただ1人の執念はアインツベルンと互角、或いは凌駕している。

聖杯の調整程度なら協力する事も吝かでないだろうが、解体や破壊などは論外だろう。邪魔をしてくるのは目に見えている。

一応は切嗣の「切り札」を継承しているが、どこまで通じるか分からない。魔術師としてのスペックなら兎も角、実力で勝負をしようと考えてるのは無謀だ。

まあ妨害されても聖杯を破壊するだけなら幾らでも手はある、アインツベルンを滅ぼした信頼と実績の現代兵器による蹂躪などその最たるモノだ。

この策の欠点を挙げるとするなら……冬木が滅んでしまう事だろうか。

流星にそれはいただけない。

(……ダメね。こういうの日本の諺で何て言うのだったかしら……取らぬ……取らぬ鼠の誅伐……だったつけ?)

それは某アーチボルトさん専用の諺です。

正確には取らぬ狸の皮算用である、無事に聖杯戦争が終わると決まった訳では無いこの段階で戦後処理を考えるのは管理者である遠坂だけで充分だ。

取り敢えずの方針は決まった。

遠坂に打診して、適当に言いくるめて……或いは金で釣って聖杯戦争を早期に終わらせる約定を結ばせる。後の事は後で考えればいい。

「ふわあ……」

あくびをこぼし、だらりと仰向けになる。

もそもぞとポジションを調整し完璧な寝心地を見つけ出して頬杖をつく。これからバリバリとポテチを摘みジュースを飲みながら昨日届いたばかりのプリズマな魔法少女アニメを観賞する事に精を出すのだ。

働かなくても生きていける一部の人間にのみ許された贅沢を満喫しながら、士郎が学校から帰るのを気長に待つ事にした。

無いとは思うが、学校で何かあれば遠坂はその力を以て衛宮士郎を守護する。

そういう条件で契約してあるので心配はしていない。あれ程に不参加を決め込んだ聖杯戦争に於ける令呪の発言で、何かしら文句を言われるだろうが……それはそれだ。

金で済むなら安い話である。

「……ん」

尿意を感じ、眠気まなこを擦りながらトイレへ向かい用をたす。

ボーツとした頭でフラフラと歩きながら、ふと外を見ると太陽はもう上つていなかった。どうやら寝落ちしてしまったらしい。

妙に小腹が空いている、作り置きのお昼食を食べ損ねた事を思い出した。

「はふ……シーローウー、起こしてよねー」

帰ったのなら声を掛けて起して欲しいのに、何時も起こしてくれない。

幸せそうに寝てる所を起こすのは悪い気がする、とは士郎の談。本人が許可しているにも関わらずコレだ、思いやりも良いが行き過ぎた思いやりは迷惑である。そういう所が、可愛いのだが。

「シロウー？」

居間には見当たらなかったので部屋に向かう、いない。ならば土蔵かと伺うもない、道場にも姿は見えずよくよく思い出せば部屋の中に鞆やら着替えなどが置いていなかった。

もしかしたらまだ帰るには早い時間なのかと時計を見るも、とつくに帰っていないければおかしい時間だ。

「……おかしい」

夜の帳は既に降りている、それなのにまだ士郎は帰って来ていない。胸騒ぎがする。

嫌な予感が止まらない、当たって欲しくない時にばかり働くこの感覚……こんな時は何時だつてロクな事が無かった。

母が死んだ時。

父が死んだ夜。

弟が死に掛けたあの日。

大切モノが失われていく悪寒。

「ツ……い・シロウ!!」

心当たりは無いが、まずは学校へと向かう。

外に停めてあるベンツ（改造済）に乗り込み一気にアクセルを踏み込む。

それを呆然と見送った藤村組の男が慌てて後を追った。

法定速度をぶつちぎりつつも、人影に注意しながら爆走を続ける車内で考える。

気の所為なら良い、つい遅くなったと言うだけでも、道端で友人と呑気に話をしても万々歳だ。

そうはならないだろうと半ば確信しながら、白銀のベンツが夜の街を駆ける。

逃げる。

逃げなくてはならない。

恥も外聞も無い、脇目も振らず我武者羅に走り続け少しでも離れなければ。躊躇したり気を抜けばそれだけで終わってしまう。

「はあ……はあっ……っ!!」

校庭に居た赤い男と青い男。

現実とは思えないその光景、赤い槍と双剣で殺し合いをしていた男達。

(人間じゃない、アレは……理解を超えた何かだ)

放課後イリヤの忠告に従い急いで下駄箱まで向かった士郎であったが、そこで待ち構えて居た美綴に捕まってしまった。赤いあくまと友人になる程の女に、か弱い男では逃げられないのだ。

一射ほどだけ済ませ放課後になるまで生徒会長の一成と備品の修理に精を出し、全員が帰ってから1人道場の掃除を始めた。

美綴は勿論、士郎だけを残す気は無かったが女の子は暗くなる前に帰るべきだと義父譲りの紳士的精神を發揮した士郎に言いくるめられ帰らされた。

心中でイリヤに遅くなる事に謝罪をしながら、手は一切抜かず丁寧に掃除を終えた。

帰ろうと身支度を終えたその時、聴こえてきた金属音。その音の正体がどうしても気になり、校庭で殺し合いをしている男達と……誰かもう1人を見付けた。

息をするのも忘れる程に見入ってしまい、膨れ上がった殺気に無意識に身体が後ずさり木の枝を踏み折ってしまった。

気付かれた。

それから何分経っただろうか、1分だろうか、5分だろうか……も

しかしたらまだ10秒も経っていないかも知れない。

息が乱れ足がもつれる、今更ながらに校舎の中へ逃げてしまったのは悪手だったと気付いた。

三階まで一気に駆け上がり、ひたすら奥へ奥へと脇目も振らず逃げていたものだから出入口からかなり遠ざかってしまった。

「はあ……来ない、のか」

窓が見えたから近付いた、さつき行われていたのが夢であれば良いのと思つて校庭を見下ろし――

「よう、よく逃げたじゃねーか」

――窓をブチ破り青い男が現れた。

「は――!?」

目の前の男は容易く追い掛けてきていた、階下から跳躍力だけで三階まで登つて来たのだ。

何てデタラメな身体能力か。

「そらっ」

赤い槍が振るわれる、そう認識し咄嗟に身体が動き――まるで間に合わず脇腹に当たった。校庭で見せていた速度から見れば話にならない様な遅さと力、それなのに簡単に吹き飛ばされた。

防ぐ事は出来ない、速すぎる、強すぎる。

ただの人間には到底この超常の存在に抗う事など出来るはずがない。

「――っは――」

壁に叩き付けられる、その衝撃だけで肺から直接酸素を搾り取られると錯覚する。上手く呼吸が出来ない、腹部に違和感がある。

痛みは何故か感じない、いや感じている余裕が無い。

闘いの素人の士郎でも理解できる。

今の一撃は此方の出方を見る為のものだ、牽制のつもりの一撃……それでこの威力だ。

間違っていた。

ひたすら背を向けて逃げていた先程までの行為は、目の前の男が全力で殺しに来なかつたから成り立っていただけ。

どうして気付かなかった、一瞬でも目を離してはならなかったのだ。

離してしまえば――

「悪いな坊主、死んでくれや」

――死ぬ。

そう、死ぬのだ。

こんな所で衛宮士郎は死んでしまう。何も出来ないまま、目の前の男に殺されてしまう。

当然だ、蟻が人間に挑むようなもの――いや、それよりも無謀だ。死ぬ。

切嗣から受け継いだ夢を叶えられずに、イリヤを残して死んでしまふのだ。

あの少女にまた、涙を流させてしまう。

(――ふざけるな)

一瞬、目の前の光景が消え過去の光景が幾つも映し出されては消えていった。

『さ、2人とも初めましての挨拶だ。僕達はこれから、3人で家族になるんだ』

『……イリヤスフィールよ、イリヤで良いわ。し、しろ、シロウ?』

『うん……よろしく、イリヤ』

初めて会った頃は、お互い邪険にする事は無かったが積極的に歩み寄る事はしなかった。

切嗣という存在を挟んで一緒に暮らしているだけの存在。誰よりも近い他人。

どこまでも家族ごっこでしか無かった。

そんな2人の関係性が変わったのは、その間を取り持っていた切嗣の死だった。

切嗣に縋って泣きじゃくるイリヤ、それをただ見ている幼い自分。

暫くそうしていて、不意に涙と鼻水で歪んだ顔で振り向いたイリヤから告げられた言葉。

『シロウは――』

それを聞いて、気付けば強く抱き締めていた。

何故そうしたのか、その時は漠然としていて分からなかった。

後から冷静に考えてやつと気付いた。

それは、とても単純な事だった。

士郎にとって切嗣が家族であるように、イリヤにとって切嗣が家族であるように。

士郎にとつてのイリヤもまた――

(そうだ……俺は死なない、死ねないッ！)

切嗣から受け継いだ夢、誰かを幸せにする事の出来る料理人になるという誓い。その為に先ずしなければならぬ事。

そう、切嗣は最初から教えてくれていた。

何度も何度も教えてくれていた。

気付かなかったのは士郎の責任で、気付かせてくれたのはイリヤのお陰だった。

切嗣が生きている時に気が付けば良かった、聞かせてあげればよかった。

「死んで……たまるかアア！」

此処で衛宮士郎が死ねばイリヤにまた失わせる事になる、泣かせてしまう。

それは出来ない。

許せない。

何故なら衛宮士郎にとつてイリヤは「大切な家族」なのだから。

(投影――開始――)

赤い槍は既に目の前に迫っている。

強化した服程度では防ぐ事など出来はしない、避ける事などこの怪我では叶わない。

ならば――防ぐ事の出来る物を造り出せば良い。

激鉄が落ちる。

魔術回路へ魔力を流す、イメージするのは先ほど見た双剣。最初に

ショートし始めた回路を無視して双剣の設計図を構築する。
想像する、創造する。

そうだ、出来る筈だ。

難しい筈はない。

不可能な事でもない。

もとよりこの身は、ただそれだけに特化した魔術回路……！

「つらああああ!!」

ガキーン!

甲高い音と共に赤い槍は弾かれ「双剣」は砕け散った。

酷い出来だった、今まで投影した中でも下から数えた方が早い程の
失敗作。

満足に打ち合う事も出来ず呆気なく破綻し……それだけで充分
だった。

僅かに浮かんだ男の驚愕、有り得ないモノを見た時に感じる思考の
空白。虚。

本来ならばこんな事は起こり得なかった。男にとって士郎が敵は
おろか獲物にすら足りなかったから起こり得たまさかの事態。

窮鼠が猫を噛むよりも有り得ない事態に生まれた一瞬の、それでも
一瞬でしかない隙。

(こ、こ、だ……！)

その隙に右足へ魔力を流し込み跳躍する。

勢い良く窓ガラスをブチ破り空中へと飛び出した。強化失敗、折れ
ている……知った事ではない、あのままでは殺されていた。

下を見る……高い、高すぎる。

このままでは落下して死ぬ、良くても更に他の骨が骨折して動けな
くなる。

ならば、動けるようにすればいい。

「同調、開始！」

肉体を魔力で強化するのは、柔らかな風船の入れ物に角張った石を
幾つも詰め込むようなモノだ。

上手く入れなければ形は歪み、多くても歪み、遂には破裂してしま
う。

ああ、なら簡単な事だった。

風船に入れるから耐えられず、歪み、壊れるのだ。

ならば、剣にすれば良い。

剣で作った入れ物に石を幾ら入れたとしても、壊れる道理など存在
しない。

そうだ、身体が剣で出来ていれば良い。

ギシギシギシギシ……。

士郎の肉体、その内部で金属が擦れるような音がした。脇腹の傷や
足の中を見ている者が居れば気付いただろう……いくつもの剣が折
り重なって生えていく事に。

「ツハア!! いつ、……」

今までに無い会心の強化の手応えのお陰で、無様に地面に叩き付け
られた身体を何とか保護してくれた。

即座に双剣を投影し直し後ろを振り向き身構える。

蹲っている暇は無い、まだ何一つ状況は好転していない。

しかし、追い討ちを掛けてくると思っていた男は士郎に追い縋って
はいなかった。

それもその筈、運よく攻撃を躲かせただけの存在よりも、己の首に
届き得る力を持った相手に意識を向けるのが自然の道理だ。

「チィッ！ もう追い付いたかアーチャー！」

士郎が出来な双剣で赤い槍を吹き飛ばした瞬間、その男もまた一
瞬の隙を突いて斬り掛かっていた。

肩への傷、深くは無いが決して浅くも無い。

「マスターの命令でね、アレを貴様に殺させる訳にはいかないのだよ
ランサー」

先程まで青い男——ランサーと闘っていた赤い男——アーチャー
が争い始めた。

何度か切り結び、一方的に大きく間合いを広げたランサーは溜め息
を吐き諦めの意思を見せる。

「ケツ！ 戻って来い、だとき。つーワケだ小僧！ 命拾いしたなオイ」

「逃がすと思うのかね？」

「ああ、見逃してやるって言ってんだよアーチャー。お前とあの小僧の命預けておいてやる。次はその命、必ず貰い受ける」

去っていくランサーとその姿を油断なく見送るアーチャーの背中、完全に姿が見えなくなった所で士郎は構えを下げ膝から地面に崩れ落ちた。

生きている。

それを認識しー完全に緊張が解ける。

脳が焼けるような痛みを今更ながら感じる、全身に広がっているこの痛みと脱力感に抗えず気絶してしまいそうになる。

が、既のところで堪えた。

「イリ……や、心配……してる、か、な……」

早く帰るといふ約束を破ったばかりにこんな目に合ってしまった。

死んでいないだけマシだが、こんな状態を見られたら何て言われるか分かったものではない。

結局は泣かせてしまう。

投影したままの双剣を杖代わりに立とうとするが、足元が覚束無い。

足が折れていた事を思い出し殊更ゆっくり、ゆっくりと立ち上がりー赤い少女が目の前に居た。

「衛宮くん……」

「……遠……さ……か？」

見間違いでは無かった。

アーチャーとランサーの戦闘、その傍らに見た事のある少女が居た気がして。

そしてそれは、見間違いではなく遠坂凜という同級生の少女にしてーこの地の管理者だった。

「はあ。一般生徒が襲われてると思ったから助けたのに、まさか衛宮

くんだったなんてね」

高潔な意思を感じさせる瞳を持つ、イリヤ曰く「最も魔術師らしくない完璧な魔術師」の少女。

そうと知らなければ士郎は全く気付かなかっただろう。優等生を演じる少女の猫を。

切嗣が存命の頃に初めて会ってから今日まで、特別な交流は無かったが知らない仲では無い少女が目の前に居る。

あんな殺し合いの場に、居た。

「何で……遠坂、こん……な……ところに」

「……アナタではなくお姉さんの方だとばかり思っていたけど、そう。そう言う事ね……でも何でアーチャーの……サーヴァント……」

「……？　おい、遠坂……？」

考え込むと周りの声が耳に入らない悪癖を持つ少女――凛はブツツと、士郎を無視してひたすら思考に没頭し続ける。

その間も震えながら何とか立ち上がった士郎は、手にしていた双剣を思い出し急いで破棄した。

あれ程切嗣に「他人には見せるな」と言われていたのをすっかり忘れてしまっていた。

「……ん。オッケー、いいわ。それで衛宮くん？　参加者であるアナタに言うのも何だけど、今回の事は貸しにしておいてあげるわ」

「貸し……って？」

「ああ、誤解しないでよね。安心なさい、手を抜く必要は無いわ。戦争コレはコレ、貸しは貸しで別問題だし。

うん、衛宮に貸しを作るって事は私にとって損ではないもの。ふふ、ふふふふ」

にっこりと微笑む凛の顔はとても可愛らしい筈なのだが……猫の奥に潜むあくまを知っている士郎にとっては、先ほどのランサーという男よりもある種の恐怖を感じさせる。

「いいのかね、追わなくて」

何時の間にか傍らにアーチャーと呼ばれた男が居た、咄嗟に身構えようとして――尻餅を着いた。

そんな士郎の姿を見て凜はより一層の笑顔を見せる。そのまま口を開こうとしたその時、甲高い音が迫って来ているのをこの場の誰もが耳にした。

誰よりも早く、その音の正体に気付いた士郎が校門の方を振り返ると「シロウー……!!」 ベンツが空中を飛んでいた。

「な……?」

「凜、下がれ!」

「ちよ、待ちなさいーキャツ!」

放物線を描くように閉鎖されている門を飛び越えて着地したベンツは、そのまま流れるように慣性ドリフトをしながら士郎達の元に迫って来た。

妙に渋い劇画調な顔をしながらハンドルを巧海に……いや巧みに操り、動けないで呆然としていた士郎の直前でピタリと停止した。

「ジロヴウー……!」

「イリ、ヤ……あああつ?!」

扉を開け勢い良く飛び出してきたイリヤに抱き着かれ、それを優しく受け止めようとした士郎の全身に激痛が駆け巡り痺れた。

あまりの激痛に身を悶える士郎に気付く事も無く、グイグイと締め付けるイリヤの抱擁は一切弱まること無く血で汚れていたシャツの上に涙の跡を残した。

「バカ! あれ程早く帰りなさいって、言ったじゃない!」

「……ゴメン」

「バカ、バカ……うううううう!!」

バシバシと胸を叩かれとても痛い……体では無く心が痛む。されるがままにイリヤからの愛情表現を受けながら、頭を優しく撫でる。生きていて良かった。

こうして生きているから、イリヤを慰める事が出来る。あの日のように。

「……ゴホン。ゴホン、あーごほんっ」

わざとらしい、本当にわざとらしく咳き込む声が響く。

いつそ清々しい迄にわざとらしいその咳き込む声は、感動の再会を

始めて2人だけの世界を作り出していた士郎とイリヤが気付くには少し弱かった。

ビキビキ。

まるで血管が何本か切れたような変な音がした。

「あー……いいかしら、そこのお2人?! ねえ、聞いてるの………ちよつと! 何か言いなさいよね衛宮姉弟!!」

ガーっ! と叫び出した凜の声に、士郎の胸の中で顔を埋めていたイリヤは渋々と言った感じで立ち上がり凜へと顔を向け恭しく挨拶をした。

その表情は、先程までの家族を思う暖かさは微塵も感じさせない。笑みを浮かべてはいるものの冷たい魔術師然とした顔だった。

まあ、泣いていた所為で頬が赤いので雰囲気は台無しだったが。

「ーあら、居たのリン?」

「ええ居ましたわ衛宮さん」

「そう、居ただけみたいね。使えないわ、この土地の管理者は庇護者を満足に護れないようね?」

「……お言葉ですが、私と私のサーヴァントが居なければ衛宮くんは死んでいましたわ。貸し1つ、という事ではありませんか?」

「は……? 本気で言っているのかしらリン、貸しならコチラの方が遥かに多いわ。そちらへの貸しは、何時になったら返してくれるのかしら?」

「……………」

「……………」

「はあ………」

互いに笑みを浮かべながらニコやかに話しているのに、周囲の温度が下がった様な気さえる。

そんな2人を士郎は、少しだけボヤツとした頭で眺めていた。抱き締めながらさり気なく施された治療魔術と魔術回路への干渉で全身の痛みは気にならないレベルにまで収まった。

相変わらずの実力に感心するばかりだ。

「……………」

「…………？」

凜とイリヤ、互いに冷静に振る舞っていたのは最初だけで今や激しい舌戦へと変貌した。話し合いを土郎以外に眺めている男が居た。

アーチャーと呼ばれた男、殺し合いをしていた片割れ。あの双剣——干将・莫耶——の持ち主。

最初は気付かなかったが、この男を見ていると妙な感じがする事に気付く。

(遠坂の話だと……俺を助けてくれた、んだよな?)

それは別に「イヤな感覚」では無かったが、まるで何処かで出会った事がある様な……知らない筈なのに知っている、そんな妙な感覚。知人のような他人の様な。

そう、誰かに似ているのだ。

まだ上手く動かない足を引き摺りながら、アーチャーの傍へと歩いた。

アーチャーは2人をずっと眺めていて気付かない、いや気付いていて反応していないのか。土郎には判断が付かなかった。

「なあ、あんた——アーチャー、でいいんだよな？」

「…………ああ」

土郎の方を一切向く事なく、返事と溜め息とも判然としない反応。ムツとする——事もなく、土郎は深々と頭を下げた。

「ありがとう、アーチャー。あんたのお陰で助かった」

「……………」

その言葉がよほど意外だったのか。

弾かれるように土郎の方を振り返ったアーチャーの顔に浮かんだのは、見間違いでなければ——失望。

それは土郎に対しての感情ではなく、己の内へと向けられた感情。

そんな風に見えた。

「——気にするな。凜はああ言ったが、お前が生き残ったのはお前自身の方だ。私は間に合っていないかった」

「…………？」 そう、か。それでもだ、ありがとう。イリヤを悲しませずに

済んだ」

「イリヤ……か」

それつきり目と口を瞑ったアーチャーの体からは、何処か他人を拒絶するような雰囲気が出た。

間違いない、と思える。

他人の機微をこんなにも明確に確信できるのは初めての経験だった。

「シロウ！」

何時の間にか話が着いていたようだ、難しい顔をした凜と少し勝ち誇ったような顔のイリヤ。

勝敗は明らかだった。

と思ったものの、どうやら少し様子が違った。

ブツブツと、またしても考え込む凜。その顔に浮かぶ表情は複雑過ぎて読み取れない。

その点イリヤの感情は明確だ、小走りで士郎に近付き思いつきり抱き着く。

やはり、まだ少し痛い。

「シロウ、突然だけどリンを家に招待したわ。帰ったら何か作りなさい、いいわね？ 答えは聞いてないわ！」

「……なんでや？」

綻ぶような笑みで、イリヤは決定事項を通達した。

第三話 それぞれの理由

聖杯戦争。

ここ冬木で行われるソレは、奇跡の盃である聖杯を賭けて7つのクラスのサーヴァントを用い7人の魔術師が鎬を削り戦い最後の一組になるまで行われるバトルロイヤルである。

が、あくまでこれは表向きの話だ。

イリヤを慌てて追い掛けて来た護衛と、イリヤ本人から連絡を受けて駆け付けてきた計5台の黒塗りの車から幾人もの男達がゾロゾロと降りて士郎達の周りに整列する。

特に、凜とアーチャーを警戒し取り囲むような配置に並ぶと深々と頭を下げた。

その中でも一際上背があり、静かな佇まいながら誰よりも鮮烈な存在感を持った男がギラついた殺気を押し隠しもせず声を発した。

「オス！ 遅れまして申し訳ありません姐さん、坊ちゃん。その血は、大丈夫ですか？」

「ええ、心配ないわ。それと、その2人は私の客人よ。失礼の無いようにね」

「オス！ お前ら礼をしろ！」

それまで殺気立った目で凜とアーチャーを見張っていた男達だったが、その合図で一糸乱れぬ礼を2人に向ける。

如何にも「そつち系」のお兄さん方のような見た目ではあるが、彼らは列記としたエミヤグループ本社の正社員である。

まあ尤も、本社に就職する前は藤村組に居た事のある者達で構成されたメンバーばかりなのだが。

魔術師として気構えも一流の凜とはいえ、まだ少女とも言える彼女がこういった独特の雰囲気の中で少しばかり萎縮してしまうのは仕方がない事だ。

隣で我関せずな姿勢を貫いているアーチャーの胆力が異常なだけである。

「ちよつと派手にやつちやつたからね、私達の居たって『証拠』を消しておきなさい」

「オスー」

男からの指示でトランクから様々な道具を手に校内へ行く者、救急箱を持って土郎の手当てにあたる者、ベントツを校外に出してグラウンドの整備を始める者。

様々に別れて行動を開始した彼らに後を任せ、イリヤはベントツへと凜を誘った。

これから凜を連れて衛宮邸に戻り、話し合いの詰めをする事で2人は同意している。

魔術師の家と言うのは、その魔術師が最大の能力を發揮できる『工房』である事が一般的だ。

普通ならそんな場所に入る事はしない。

そんな事をするのは確かな自信に裏打ちされた一流の魔術師か、自分の実力を過信したバカである。

では凜はどうかと言うと、彼女の実力は間違いなく一流である。資質も含めれば超一流と言っても過言では無い。

それでも彼女は魔術師としてイリヤには『及ばない』。

「これでシロウを助けてくれた借りは『1つ』返したわよ、リン」

「……ええ、確かに受け取りましたわ衛宮さん」

それでも衛宮邸に向かう事を決めた。

未だ召喚を果たしていない衛宮と違いサーヴァントを召喚しているという事や、凜の魔術師としてのプライドとか、小さな理由は沢山ある。

しかし決定的な理由は、貸し『3つ』である。

その内の1つとして証拠隠滅の協力、本来ならば監督役の所属する教会に任せておけば良いのだが……凜は監督役の『ある神父』に対して借りを作りたくないのだ。

衛宮グループの母体である藤村組は冬木に於いて絶対的な影響力を持っている、彼らならば『ある程度』の証拠隠滅などお手の物だ。

「さ、時は金なりよ。何かに掴まってなさい、飛ばすわ」

一台の車が先導しようとして前に出る——瞬時に急加速したベンツが、強烈なタイヤ痕を地面に残してあつという間に抜き去った。

嘩然とする事もなく、運転手は困り顔をしながら必死にベンツを追い掛け始めたが……恐らく追いつけはしない。

……ところで諸君らは、自分の目の前に車が走る事を許せない。走り屋”という人種をご存知だろうか？

「ちよちよちよつと！ 幾ら何でも速すぎるわよつと！」

凜の叫びを、しかしイリヤは少しも聴いちゃいなかった。

魔術によって極限まで音を抑えてあるので近所迷惑にはならない（魔術師には聴こえる、寧ろ煩い）のをいい事に、イリヤは街中を走り回るのが好きだった。

彼女は走り屋の中でも特に夕子の悪い、都心部系スピード狂というヤツである。

「安心なさいリン、この冬木は全て余す事なく私の庭よ。ほら、目を瞑ってたつて走れるんだから」

「う、ギャー！」

「はしたないわよリン、淑女が出す声では無いわ」

軽快に制限速度を無視しながら走るベンツの中でイリヤは後部座席（狭い）に座っている凜に向かって心底から呆れた声を出した。

アーチャーは霊体化して凜の傍に控えている、内心実体化してなくて良かったと胸を撫で下ろしていた事は誰も知らない。

凜の絶叫は仕方ない。

本当に目を瞑りながら走る姿を見れば、誰だって絶叫したくなるものだ。

実際は魔術によって助手席に居る士郎の視界を借りているので見えている。

尤も、他人の視覚越しに運転するのは高い技術を要求されるので良い子は絶対に真似をしてはいけない。

「心配症ね凜は、安心なさい交通ルールはちゃんと守ってるわ」

イリヤにとって交通ルールの認識は

“事故さえ起こさなければ何をしても良い”

と言う大雑把なもの。

これは別に自動車学校で毎回受講する度に年齢確認をされた事に対する憤りによる社会への反感――は全く含まれていない。

素である。

或いは遺伝か。

青信号は全力で進め、黄信号は気を付けて進め、赤信号は注意深く進め。

時速百キロまでは「徐行運転」と言ってはばからないイリヤの運転技術は実際大したもののだが、致命的に人を選ぶ運転であった。

「いやああああ!!」

「あまり大声を出さないでよね、シロウの傷に響くでしょう?」

「ど、どどう、考えてももも、こ、この揺れの方が! 身体に悪い……っ! でしょうがっ!!」

凜の正論を、しかし士郎は苦笑しながら振り返り穏やかな顔を見せた。

「いや、俺は慣れたよ遠坂」

その表情には諦観が含まれていた。

凜は否応なしに悟った。

あ、ダメだコレ。

「う、ふぎやああああ!!」

凜の絶叫は、しかしイリヤによる遮音の魔術によってかき消され車外に届く事は無かった。

ガクンガクンと激しく振動しながらフルスピードで駆けていく白銀のベンツは、ものの十分も掛からず衛宮邸へと辿り着いた。

もともと整備性の良くないこのベンツでは、明日にでもオーバーホールが必要だろう。

久しぶりに全力で飛ばした事に対して恍惚の笑みを浮かべながら士郎を連れて家の中に入っていくイリヤの背中を、化け物を見るような目で凜は見つめていた。

あのランサーから感じた殺気と同レベルで命の危機を感じるとは

……凜は己の身体が震える事を抑えられなかった。

「うう……吐きそう」

「凄まじいものだったな」

実体化したアーチャーに背中を優しく撫でられながら凜は込み上げてくる吐き気を抑える為に魔術刻印へと魔力を流す。

こんな事に使われるとは先祖も思わなかっただろうが、魔術刻印が無ければ吐いていたかもしれない凜は先祖への感謝の念でいっぱいだった。

感謝……圧倒的感謝……ッ！

（ありがとうございますございますお父様、ありがとうございますございます遠坂のご先祖様……ッ!!）

そうしながら今も考え続けているのは、この聖杯戦争の裏事情。

こんな風に車酔いをする切っ掛けになったイリヤとの話し合いの内容。

先代の遠坂である時臣が10年前の聖杯戦争中に死亡した事によって、凜は遠坂に代々受け継がれてきた情報の殆どを散逸した。

故に聖杯に関する事など一定周期で現れる程度の認識で興味も無かった。

それを取る事こそ遠坂に生まれた魔術師として義務と思っただが、個人的に欲しい物ではなかった。

取った後は使い道が思い付くまで放置しようと思っていた程に。

そんな中でイリヤから伝えられた情報は寝耳に水な内容だった。

大聖杯の異常。小聖杯の不在。

ハイそうですか、と簡単に割り切ったり納得する事の出来ない問題だ。

確たる証拠も無い。

「……アーチャー、どう思う？」

「私が決める事では無いだろう。」

——ああ、そんな顔をするな。そうだな、少なくとも嘘について彼女達が得をする内容で無かったのは確かだ。

それに、疑わしいなら確かめれば良いだけだろう?」
そうなのだ。

確かにイリヤから伝えられた情報の真偽は大聖杯を直接確かめれば済む話だ。

この冬木の地を預かる管理者としては、万が一にも大聖杯が「異常を来たしている」のなら見過ごす訳にはいかない。

真実なら対処し、偽りならば……それはそれで良い、聖杯戦争を勝ち抜く為に「前回優勝者」の衛宮が計略を尽くしたというだけの話。それでも多分、真実なのだろうという予感はある。

「おーい、遠坂」

玄関から士郎の呼び掛けが聴こえた。

まだ若干の気持ち悪さは残っているが、何時までもこうしている訳にはいかない。

先ほどは無様な姿を見せてしまった、遠坂の魔術師としては最低な醜態だ。

遠坂たるもの、どんな時でも余裕を持って優雅でなくてはならないというのに。

感謝したばかりの先祖に申し訳ない。

一つ咳払いをして気を引き締め直した。

「ごめんなさい、衛宮くん。今入るわ」

「ああ、体調はもういいのか?」

「ええ、ご心配なく。私よりも衛宮くんの方がよっぽど重症に見えるわよ?」

士郎の着ている制服にはベツタリと血の跡と斬り傷が残っている。買い替えは必須だろう。

エミヤグループの資産をもってすれば端金だが、小遣い制であり根が小市民な士郎にとって頭の痛い出費なのは確かだ。

「ああ、悪い。直ぐに着替えてくる、けどその前に……どうしても訊いておかなきゃいけない事がある」

「？ 何かしら、話の内容によるわね」

常でない真剣さをもつて自分を見つめてくる土郎の視線、凜の心臓は無意識に高鳴った。

「な、何よ」

調子が狂う。

こういった風に誰かにじっと見られる事はあまり慣れていないのでどうしても居心地の悪さを感じてしまう。

男子に告白された時でもこんなに自分を真剣に見つめてくる人は皆無だった。

まるで魅了の魔眼でも掛けられたように錯覚する。

破れた腹部から見える意外にも鍛えられた肉体が視界に入り、何故だか知らないが気恥ずかしくて仕方ない。

(なによ、早く言いなさいよね！)

自覚のない感情に心が揺れる、先ほど改めて誓った遠坂の家訓を早々に守れなくなった事にも気付かず凜も土郎を見つめ続けた。

「遠坂、お前達……何かアレルギーはあるか？」

「……は？？」

第三話 理由

比較的無事だったズボンに洗剤を付けて軽く揉み洗いし、血が染み付き繊維がボロボロな上着とシャツを泣く泣くゴミ袋に放り入れてから軽くシャワーを浴びる。

イリヤの魔術で体調は随分とマシになっているが、触るとまだ痛む。

魔術回路を精査すると酷く傷んではいるが、使用する事に問題は無い程度だ。

生きるか死ぬかの瀬戸際だったとはいえ無茶をしたものだ、イリヤには本当に感謝しかない。

出来るなら感謝だけしておきたかったものだ。

「作るって言ってもな……」

ぞんざいに体を拭き終え新しい服に手を通す、治して貰った代わりにとんだ難題を頂いてしまった。

遠坂凜と言う、学内では知らぬ者の居ない有名人を持って成さなくてはならないのだ。

アーチャーも誘ったのだが辞退された。

もう夜も更けているので胃に重たい物は作るべきではないだろうし、凝った物を作るには時間が足りない。

体調も完璧ではない。

まあ……それは良いのだ。

関係無い。

料理人としては未熟なこの身なれど、食べる事を望む者達が待つているならば衛宮士郎に「作れない」という選択肢は最初から無い。

幸いにも凜に食物アレルギーは無かった。

良い事だ。

士郎の調理技術ならば料理のレシピをアレルギーに配慮して組み替える事は容易い事だが、今ストックしてある食材や調味料はアレルギーに配慮していないのでどうしても選択肢が狭まってしまう。

辛い麻婆豆腐だけは絶対に無理という情報も得られた。

基本的にどうしようも無いアレルギーなら兎も角として好き嫌いは直すべきだと思っている士郎であるが、未だかつてアレ程に人が料理を拒絶する姿は見た事が無かった。

普通の麻婆豆腐は食べれるらしいので、単純に尖った味付けが苦手なのだろう。

そう言った味の好みに配慮する事も料理人には求められる要素の一つだ。

そう、問題は「何を出す」べきか。

美味しい料理と一口に言っても好みは十人十色、同じ物を食べても感想は人それぞれだ。

どうせ食べて貰うなら満足して欲しい。

さあイメージしろ、冷蔵庫の中身を、調味料を、レシピを。
その中で最善の選択をする。

(俺の料理で、遠坂に満足して貰えるように)
何品も出す事は避けるべきだろう。

話し合いはいつ終わるか分からないので邪魔にならず片手で摘めるような簡単な一品ものが良いだろうか。

ならば……サンドイッチ。

暖かいスープとサラダを付けるのも悪くない。

「……………ふう」

こうして身内以外に料理を振舞う時は決まって、士郎は過去の誓いを反芻する。

今でこそ全世界にチエーン展開して地方色豊かなメニューを揃えているファストフード・エミヤだが、その始まりは小さな個人経営店でありレシピを作成したのは何を隠そう幼き頃の士郎である。

早い、安い、多いを三大モットーとして売り出したハンバーガー(美味いと言わないのがミソ)は他店の倍以上のサイズで有りながら値段は半額近くと、人々の心を掴んだ。

切嗣が成功を掴んでいく道程の一助となったハンバーガーであるが、その理由はハンバーガーが特別美味しかったから……ではない。

切嗣にとつて身近な料理が出来る人間が士郎だっただけであり、当時の士郎が作り出したレシピも基本に忠実な普遍的なものだ。

よほど下手な事をしなければ、誰のレシピでも結果は変わらなかったのだ。

当時は何とも思わなかった士郎であるが、料理人になる夢を継いだ今となっては……恥ずべき事に思えた。

1代でエミヤグループを作り上げ、沢山の人間を笑顔にするという実例を目の前で見せ続けてくれた切嗣と違い……未だ士郎は何も成してはいない。

姉貴分の大河も株式投資でエミヤグループ躍進の一助となり、雷画はその経営を受け継ぎ地盤を強固にして更に発展させている。

イリヤも普段こそ家でゴロゴロしているが、全株式の30%以上を

所有している大株主で所得のほぼ全てを社会福祉活動費に充てている。

次期後継者として名ばかり有名な士郎と違い、周囲の人間は確かな成果を残している。

どうしようもなく、情けない。

料理する事しか取り得のない身でありながら、料理人としてのスタート地点にすら立てていない原状。

「……うし、やるか」

だからと言って腐る訳にはいかない。

切嗣も生前よく言っていた事だ、自分に出来る事を精一杯やってから周りを見るのだと。

『大事なものほど近すぎて見えなくなる事があるんだ、僕はそれに気付く事が遅れてしまった。

士郎は、間違えちゃいけないよ』

そう、今大切な事はお客様を満足させる事だ。

そのために持てる力の全てを注ぎ、ここに結実させる。

最低限のものは昨日買い揃えてある、無駄に凝ったり隠し味を加える必要は無い。

大事なのは素材それぞれの特性を活かすこと、調和させる事だ。

無論、シンプルである程、味の誤魔化しは効かない。

試される、料理人として磨いてきた腕を。

衛宮士郎だけの調理法を。

「その前に茶かな」

お客様は紅茶を御所望である。

がさごそと戸棚の中から来客用の茶葉を探しながら、お茶請けの菓子は何を出すべきか悩んだ。

「……美味しい」

短期間でこんなにも美味しい紅茶を “2度も” 味わえると凜は思っていなかった。

素直に感心すると共に、何とも稀有な体験をしている現状に少しだけ困惑する。

英霊である己のサーヴァントが何故かめちやくちや紅茶を美味しく淹れられる事と、あの「エミヤグループの次期後継者直々に茶を振舞われる事。

どちらも一般人には縁のない事だろう。

果たしてどちらの方が貴重な体験なのだろうか……そんな魔術師らしくない無駄な考え。

「……うわ」

茶菓子を一口食べ理解する。

材料に高級品が満遍なく使われている。

しかし決して材料の質が良いだけの三級品ではなく、味や食感は控えめでありながら丁寧な仕事に裏打ちされた一級品に仕上がっている。

主張し過ぎる事ない控えめな甘さが疲れた体に染み渡り癒してくれているようだ。妙に可愛らしい飾りが製作者の人となりを感じさせる。

(手造りでコレって、プロ顔負けじゃない……ん?)

2度目の紅茶を口にして、組み合わせの妙に気付く。

片方だけでも充分に一級品なのに、食べ合わせが抜群なのだ。

まるでこの組み合わせの為だけに作られた菓子のように錯覚する。

しかしそれは無いだろう、この菓子ー和菓子は本来は抹茶など渋めの緑茶と組み合わせて食べる事を想定して作るからだ。

緑茶と紅茶。

この2つの違いは、端的に言ってしまうえば同じ茶葉の加工法の違いではない。

蒸すか乾燥させるか、それだけの僅かな初期工程の違いで風味がまるで違ってくる。

とはいえ紅茶には洋菓子しか合わないと言う訳ではなく、どんなものも食べ合わせ次第だ。

それを僅かな時間で見切った、或いは最初から想定して用意してい

た手腕が恐ろしい。

色々好みを訊かれたついでに冗談混じりで頼んだ紅茶でこのレベルだ、凜の中に存在する料理人としてのプライドが否応なしに刺激される。

得意な中華料理ではそんじよそこらの人間に負ける気は無いが、紅茶の淹れ方や菓子の製作技術に関しては白旗をあげざるを得ない。

少し癪だ、帰ったらアーチャーから詳しく習おうと胸に誓う。

「気に入って貰えたみたいだな」

心底から嬉しそうな笑顔をする士郎に、抱いていた対抗心が僅かながら立ち消えていく。

こんな表情をされると、どうしても張り合う気が失せてしまう。本当に魅了の魔眼でも発動しているんじゃないかと思う。

「……ええ、そうね。ありがとう衛宮くん、美味しいわ。これ本当に手造りなの?」

「ああ、そうだよ。これは俺と桜で作ったやつなんだ、あー……桜ってのは一年の子でさ。慎二の妹んだけど知ってるか?」

「……そう。間桐さんが、ね」

ゆっくりしていつてくれ、と告げて台所に戻っていく士郎を気に掛ける事なく凜はじつと菓子を見続けた。

もう一度、今度は先ほどよりもゆっくりと口に含み、噛み締めるように咀嚼する。

何故だかその一口は、先程よりも格段に美味しさを感じさせた。

「食べ終わるのを待っておきましょうか?」

「!、いいえ、結構よ衛宮さん。話し合いをする為に来たのですもの。

ええ、構わないわ」

「そう……」

口や顔は毅然としていながら、菓자에添えていた凜の手が何処か名残惜しげに離れたのをイリヤは目敏く見付けてー敢えて触れない事にした。

桜と凜。

2人の関係が特別なモノであろう事は短くない付き合いで何とな

く察している、己にとつての士郎のような特別な関係だろう、と。
「なら良いわ、士郎が調理を終える前に話しておきたかったし。話し合い、しましょうか」

「ええ。こちらとしては全面的に信じる事は出来ないけれど、明日確認してきて判断させて貰うわ。」

それで？ 結果如何に関わらず “衛宮から遠坂” への援助を行うという事だけれど、内容は何かしら

イリヤが凜に打診した内容は以下の通りだ。

聖杯は異常を来たしており、10年前の大火災は異常を来たした聖杯によって齎された災害であること。

今後もし聖杯戦争が行われる場合に於いて同等・凌駕する災害が起これる可能性が高いこと。

については聖杯戦争の根幹を成す大聖杯を停止、或いは破壊する事が望ましいこと。

この事態解決の為に衛宮は魔術師としてだけでなくエミヤグループの総力を以て直ぐにでも遠坂を支援する用意があること。

これが “2つめ” の貸し。

字面だけ受け取れば遠坂に利は有っても損は無い、寧ろ利しか無い “あまりにも都合の良いすぎる” 内容なのである。

これで疑わない方がおかしい。

校庭で士郎が見せた “有り得ない” 魔術も、凜の警戒心を引き上げている一因だ。

要するに凜はこの場で示せと言っているのだ、遠坂が衛宮を信頼するに足る “何か” を。

「分かっているわ、はい。これにサインしなさい」

「……………！ 自己強制証明、ね。そう、本気ってワケ」

凜が外で吐き気を抑えていた間に作製されたのだろうソレは、何度確認しても作為の欠片も無い完璧な内容であった。

魔術師の世界でも滅多に交わされる事のない自己強制証明による契約ならば、確かに信頼するに「足る」レベルのものだ。

そう、コレを出された以上は疑うだけ無駄な程の絶対的な確証。

(ほんっと、こっちに都合良すぎて……イヤな感じね)

それでも不安を感じさせるのが衛宮イリヤスフィールという魔術師だ。

サーヴァントを従えている今なら兎も角、普段では「敵わない」とさえ思う力量を持つ魔術師。

正面切つての戦闘はごめん被る。

いや、そもそも衛宮と「アインツベルン」の二家の継承者たる彼女ならば、サーヴァントに対する策を持っていても納得こそすれおかしくはない。

それ程の相手が、いつそ無条件降伏と言っても過言では無い内容の自己強制証明を用意している。

凜ではなくとも、疑うのが普通だ。

「納得いただけないかしら?」

疑いつつも署名を行う。

これで衛宮は遠坂に対して聖杯戦争中に不利益な行動をする事が出来なくなった。

確かな契約の繋がりをを感じる。

最悪、自己強制証明を装った未知の魔術を警戒してアーチャーに戦闘用意をさせていただけに、心底拍子抜けだ。

「ん、オツケーよ。それじゃ貴方の部屋を案内するから、ついて来なさい」

廊下に出ると如何にも「そっち系」のサングラスが似合う強面のお兄さん方がイリヤに向かって深々と頭を下げる。

イリヤを警戒していたとはいえ、いつ来たのか全く分らなかつた。アーチャーから事前に注意されていなかったら、悲鳴を上げていたかも知れない。

衛宮という家は凜の理解や一般的常識から外れている。

先導するイリヤの後ろを若干頬を引くつかせながら凜は離れの部屋へと案内された。

古い武家屋敷そのものの衛宮邸にて珍しい洋式の部屋。

普段から丁寧に管理・清掃されているのだろう、急な来客にも関わらず内装は整っていた。

「一通り揃ってるから一泊ぐらいなら不自由は無い筈よ、何か欲しいものがあつたらその受話器を使いなさい。24時間対応してくれるわ。」

夕食の用意が出来たら呼ぶから、それまで好きにしておいてちょうだい」

簡単に魔術で調査するも、部屋に全く魔術的な仕掛けや品は存在しなかった。

アーチャーが確認しても問題なかったのも、本当に何の仕掛けも無いらしい。

あるのは華美では無いが間違いなく良い値段のする調度品ばかり、どれも凜の好きな物で構成されている。

用意されている寝間着など、素材の質もさる事ながら詭えた様にサイズがピッタリだ。

正直に言えば持つて帰りたいぐらいで……多分、言えば本当に譲ってくれるだろう。そうなったら流石に代金を払うが。

机の上には大粒の宝石が敷き詰められた宝石箱が置かれてあり、その隣には持ち運び用の手提げ袋に一通の手紙が敷かれてある。

『親愛なる遠坂凜様へ』という謳い文句で始まる文章は、要約すれば『この宝石をお持ち帰り下さい』と書いてあった。

あまりにも明け透けな歓迎ぶりに不信感がマッハで募る。

此処まで徹底的にリサーチしている事やご機嫌取りを隠しもしない姿勢は、新手の宣戦布告と受け取れば良いのだろうか？
凜には判断がつかなかった。

凜を部屋に案内した後、イリヤの顔から魔術師然とした雰囲気は雲散してヘラつとした表情へと変化する。

（あくだる。リンってば私が何したって疑うんだもの、肩が凝っちゃうわ。だから魔術師ってイヤなのよね）

イリヤは凜を「都合よく」動かす腹積もりでこそあるが、騙す気も嘘を吐く気も全く無かった。

にも変わらず煮え切らない態度。

3つも貸しをくれてやると言うのに何が不満なのか、その思考を「魔術使い」でしか無いイリヤには理解出来なかった。

初めて会った時はもう少し可愛げがあったのに、とひとりごちる。

エミヤグループの情報を以てすれば凜の趣味嗜好など丸裸同然。

この地の管理者である凜の気を惹く為に用意していた品ばかり揃えて部屋を飾り付け、遠坂の魔術に欠かせない宝石まで用意したのだ。

これだけ歓迎すれば管理者への義理は果たしたと言っても良い、後は大聖杯の確認を終え完全な納得を得た上でブツ壊すだけだ。

「お、イリヤ。話し合いはもう終わったのか？」

「うん。お互い実りのある良い話し合いだったわ」

ニコつと互いに笑顔を交わし、士郎はスープの仕上げへと向かう。

普段なら手伝うところであるが、今はそうもいかない。つまみ食いしたい気持ちをグツと堪えて、成すべき事をする為に必要な「ある物」の場所を尋ねた。

「ねえシロウ？ 昨日きた荷物何処に置いたかしら」

「ん……DVDじゃないヤツなら多分部屋かな、土蔵じゃ無いと思う」

「分かったわ、探してみる。それじゃヨロシクね」

「ああ、任せろ」

芳しい匂いに頬を紅潮させながら台所を後にしたイリヤはその足で士郎の部屋に向かった。

基本的に殺風景な部屋に場違いな小包が部屋の隅に放置されていた、それを無造作に掴んでそのまま隣の「自分の部屋」の襖を開ける。

少女趣味全開な内装と、魔法少女のポスターやフィギュアに年齢制限のある本が所狭しと混在している空間に足を踏み入れ包装を無造作に破る。

中に収められていた品を取り出し光に翳したりペタペタと手触りを確認したり、放り投げてはキャッチする事を何度か繰り返して満足する。

「本物は初めて見たけど、思ったよりショボいのね。まあ普通は使い道なんて無いのだからこんなものかしら？」

少しだけ期待していた「ソレ」は、魔術師ならば垂涎の品であろうがイリヤにとっては「古くさい」だけの品である。その道の専門家が知れば目も眩むような大金を出してでも欲しがる程の……それこそ0が幾つも並ぶ高級な品なのだが。

現在の持ち主であるイリヤは特に感慨を得ず適当に入れ物に直すとポケットの中に仕舞い込んだ。

「……………馳走さまでした」

負けた。

完全敗北。

高級品で構成されていた紅茶や菓子と違い、特別な食材や調味料を使った形跡は無かった。

それでもそこらの専門店や職人の作る料理よりも上等な仕上がりにあり、小さな配慮が心憎い。

普段からあまり大量に食す事はしない自分が、お代わりまでしてしまった。ニヤニヤとイリヤが見つめているのに気付いた時には、顔から火が吹くかと思うぐらい恥ずかしかったが。

「お粗末様でした。一応デザートも用意してるんだけど、どうかな？」
「……………いただくわ」

これはもう、中華料理でお返しをしなくては気が済まない。下手したらソレでも上を行かれているかも知れない危機感に駆られながらも、凜は心の中でそう誓いながら茶を啜った。

あー緑茶も美味しい、何なら苦手なのだろうか。

そんな風にすっかり油断していたものだから、横から唐突に告げられたその一言は凜の腹筋にクリティカルヒットした。

「お風呂はもうすぐ入れるわよ、一緒に入る?」

「ブフォツ!」

「何その反応、凹むんだけど。ああもう、動くんじゃないわよリン、拭けないでしょう」

甲斐甲斐しく口元を拭かれ慌てて距離を取った。

訝しむイリヤの視線を受ける凜の表情は、今日何度目か分からないが引き攣っていた。

加えて身体を抱え込む。

「? なによ、アーチャー居るんでしよう? リンを捕まえなさい」

その声に従った訳ではないだろうが、凜の傍で腕を組みつつ溜息を吐きながら実体化した。

裏切る気かこの野郎と恨みがましい目で見つめてくる凜からの視線を黙って受けながら、あからさまに呆れた視線を隠しもしない従者は忠告をする。

(凜、落ち着き給え。ペースを乱されてばかりだぞ)

凜とて言われなくても分かっている。

自己強制証明を交わした以上は己に危害が加えられる訳など無いと理解している。

頭では。

本来ならば開き直って居直るぐらいには神経の凶太い凜である、にも関わらずこんなにも“苦手意識”を持っている理由は初めての出会いの日にまで遡る。

魔術師として未だ半人前の域を出ず、ある神父に不承不承ながらも世話になっていた忌まわしい時期にその男は現れた。

出会う前からその男の事は知っていた、何せこの冬木では知らぬ者の居ない程の有名人だ。

男女2人の子どもを連れて挨拶に来たその男が魔術師だったとは

知らなかったが、今まで隠れ住んでいた事に対する謝罪とこれからは管理者である遠坂に対して“それ相応”の礼金を弾むと言われては———当時から金に困窮していた凜に否は無かった。

そこまでは良かった、半人前とはいえ一流の資質を持ち合わせている凜だ。

目の前の男が魔術師としては“既に退いている”事は一目で理解していたし、警戒はしても心配はしていなかった。

2人の子どもの内、男子の方も問題なかった。

魔力を全く感じない上に長子では無い、特別な才能の無い一般人だろう———特別な才能を持つが故に生き別れた“妹”を思い出して羨ましく思った。

問題は、少女の方。

衛宮家だけではなく“アインツベルン”の後継者でもある少女は、そう年齢の変らない凜と違って“完璧な”魔術師だった。

今は記憶の中にしか存在しない父よりも、遥かに格上の魔術師。

『よろしくね、リン』

ニツコリと笑った少女から滲み出る魔力、身震いする程の殺気。

全く気付く暇もなく展開された魔術によって生み出された針金の鳥が肩に留まっている事に気付いた時には、悲鳴すら上げる事も出来ない程に混乱した。

男から宥められて凜への謝罪を口にした少女は、まるで普通の少女のような表情へころりと変化したが……それは偽装である事は明白だった。

これ程の魔術師が一般人じみた思考などしている筈もなく、それは後日になって神父から『衛宮は前回の優勝者』であると言質を貰い確信に至った。

今でもあの日の恐怖が、感情が———脳裏にこびり付いて離れない。

それ以後、定期的に会う度に実力差を励みに魔術への修行に没頭し続けた。

決して表立っては認めたりしないが、イリヤの存在があつたからこそ今の自分がある。認めたくはないが。

しかし一流のレベルにまで達したと自負している今でも、苦手意識は拭えず残ったままだ。

「何かあつたのか、2人とも？ あ、アーチャーあんたも食べないか？」

ケーキを持って戻って来た士郎は呑気なもので、先ほど食事を断られたアーチャーに今度こそはとズイズイ薦めている。

取り皿が4つあるので、端からその気だつたのだろう。意外と諦めが悪い。

「……先程も言ったが、私には必要ない。気遣い感謝しよう」

意外と丁寧に断りをいれ霊体へと戻ったアーチャー以外の3人は黙々とケーキを食べる作業へと入った。

半分ほど食べたところで、思い出したようにモゾモゾとイリヤはポケットの中から小箱を取り出す。

小奇麗な装飾が成されたそれを見て、心当たりのあつた士郎が口を開く。

「あ、それが探してたヤツか」

「うん。急いでたから宅急便で送ってもらつたのよ、まあ予備のつもりだったけど結果的には間に合つたわね」

わいのわいの話しながらパカッと蓋を開けると、流石に凜もソレが何かを察した。

「……………」

今まではイリヤの魔術で隠遁されていて分からなかったが、その小箱の中身からは濃密な神秘が滲み出ていた。

尋常な品では無い、軽く千年以上は経つだろう品を出してきた意図を考えろーこれを使ろーのかと納得した。

(やっぱり衛宮は侮れないわね、こんな物を用意してたなんて)

参加する気が無かつた、というのはやはり嘘である可能性が高くなつた。

これ程の品を急遽用意するなど、幾らエミヤグループでも不可能だ

ろう。方々にしつかりとしたパイプが必要な筈だ。

聖杯戦争の予兆を感じ取ってからイリヤはすぐに聖遺物を手配した。

まさか士郎に令呪が現れるとは考えていなかったが、万が一の事態を想定して動いたその決断は結果的に正しかった。

とはいえ本気で聖遺物を求める気は無く、特定の品は求めず何かしら手に入ればいいや程度のざっくりした要請であったが、――そんな風に考えていたのは本人だけである。

会長である雷画を通じて発令されたその指令に従い幹部は金に糸目を付けず世界中を捜索開始し、考古学者や遺跡への唐突な接触にビジネスチャンスを感じ取った周囲が深読みし動き出した。

その結果、今まで資金難に喘いでいたあるチームが世紀の大発見をしたり海中に沈んでいた宝が引き揚げられるなどして世界経済が大いに賑わった。

そう、エミヤグループの動向に意図はなくとも周囲に影響を与えるのだ。

もちろん雷画も、このチャンスを生かして業績を更に上げており聖遺物の用意に掛かった経費をしっかりと回収していた。

「シロウ、今から召喚をするわ。ついて来なさい」
「おう」

まるで近所に買い物にでも行くみたいな軽さで中庭に向かった二人に凜は呆気に取られた。

どういう神経をしているのかと、関心半分、呆れ半分の心境でやや遅れながらも後に付いて行った。

これから“3つめ”の貸しの一環として、サーヴァントの召喚を行なうと言うのに、気負うところが全く感じられない。

中庭に出ると数本の針金で魔術陣を構成する、その中央に士郎を立たせるとイリヤは背中を手を当て詠唱を開始した。

大量の魔力を含んだ宝石を溶かして陣を構成し、最も魔力が高まる

時間を選んで万全を期した召喚を行おうとした凜（結果的にうっかり失敗）と違い、簡素極まる陣と詠唱であったが、その無駄のなさは戦慄を覚えるレベル。

「シロウ、ちよつと疲れるかも知れないけど大丈夫よ」

事ここに至っても、実はイリヤは士郎にサーヴァントの事はおろか聖杯戦争に関して何一つの説明をしていない。

士郎も何一つとしてイリヤに説明は求めなかった。

それでも士郎は一切の躊躇なくイリヤの魔術に身を委ね、イリヤも士郎を気遣いつつも一切の容赦なく魔術を行使し続けた。

切嗣の夢を受け継いだのは士郎であり、調理に関してイリヤは口を挟まない。

切嗣の魔術を受け継いだのはイリヤであり、魔術に関して士郎は口を挟まない。

どちらとも無くそう決めた事であり、例えそこに命の危険があろうとも、どちらも躊躇すること無く命を預けられる。

そんな無言の信頼があるからこそ、この召喚は見事な程に成立しているのかも知れない。

「……っ！」

だから身体中の魔力が吸い込まれていっても、それを補うようにイリヤとのパスから尋常では無い量の魔力が注ぎ込まれ続けていても、士郎は身動きしない。

2人の魔術師による共同召喚は順調に進み、遂にサーヴァントを召喚する直前にまで至った。

「……汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ。天秤の守り手よ！」

召喚の直前、士郎の身体から光が漏れた、サーヴァントのように凜には見えたが視界を覆う土煙でハッキリとは分からなかった。

恐らくは召喚の瞬間に英霊との契約を結ぶラインが構成された余波ではないかと推測する。

反則的な魔力量のイリヤによる召喚は、凜が望んだ完璧な召喚に勝るとも劣らない結果を生み出すだろう。

それに悔しいと思いつつも、無意識に羨望の眼差しを向けていた。アーチャーに似た気配——否、それよりも濃密な存在感を持った者が煙の奥に居る。

知らず、凜は息をのみ現れるサーヴァントから目を逸らすまいと瞳に力を込めた。

「——サーヴァント、セイバー。召喚に応じ参上した」

煙が晴れ、その姿を現したサーヴァントを見て凜は不覚にも見とれてしまった。

「問おう、貴方が、私のマスターか」

元々、凜はセイバーを喚び出すつもりで儀式を行った。だからだろうか、それともセイバーの持つ清廉な空気に吞まれているからか。

まるで神話の再現のような目の前の光景の中心に居るセイバーを、憧憬すら覚えながら見続けていた。

V Sセイバー　　あなたが私のシェフだったので
ね　　)

まだ陽も明けぬ内から唐突に……割と何時もの事なのだが、イリヤに呼び出され衛宮邸へと心中複雑な思いを抱きながら桜は走っていた。

突き刺さる様な寒波が身体に容赦なく吹き付けるも、そんな事を気に掛ける余裕は今の桜には欠片も存在しなかった。

士郎に令呪の兆しが現れたその場に、当然ながら衛宮邸に足繁く通う桜も居合せた。

居合せてしまった。

余りの衝撃に暫し放心した程に……それは桜にとってあつて欲しく無い出来事だった。

士郎が魔術師である事は知っていた。

亡き義父の夢を継いで料理人を目指している事も知っていた。

叶えるべき願いがある。

だから万能の願望機である聖杯に選ばれるかも知れないと……そんな事にならなければ良いのに、と願って。

期待は裏切られた。

(……もしかしたら、私の見間違い……だったのかな)

令呪の兆しは、知識の無い者が見ればただの傷にしか見えない。

当の士郎も、うっかり出来た傷だと思っていた。

しかし、その傷をイリヤが確認した時。

ほんの一瞬だけ見せた動揺を、桜はハッキリと……見てしまった。

(可能性はゼロじゃ、ないよね……)

あれはイリヤが自分をからかう為にした冗談だったのではないか。

昨日からずっとそればかりを桜は考えていた。

自分すら信じていない、もしもの可能性”を夢見て。

祈り続けていた。

それも、後ほんの少しの間しか見れない夢だ。

もうじき明確な答えが出てしまう。

夢から覚めてしまう。

衛宮邸までの距離は、こうして悩んでいる間も確実に近付いているのだから。

(もし、イリヤさんが私を呼んだ理由が……)

昨日から桜は一睡もしていない。

寝てしまえば全てが悪い方向に進んでしまうかも知れない、そんな漠然とした不安の中で普段以上に精神が張り詰めていた。

呼び出しの意図は分からない。

ただ、その真意がどうであれ。

今日まで続いてきた両家の偽りの友好関係が終わりを迎える時は近いのだろう。

間桐臓硯。

始まりの御三家の1つ、間桐の当主にして五百年以上を生きてきた魔術師。

全盛期こそ過ぎたとはいえ、その技量は並の魔術師を凌ぐ。アインツベルンが滅んだ今もっとも聖杯に近い位置に居ると言っても過言ではない。

並の魔術師では正面から相對する事すら難しいだろう。

そんな彼だからこそ、魔術師として一流でありながら発展途上の遠坂をハッキリ言つて脅威に考えてはいない。

外来から参加するまだ見ぬ魔術師や、教会に居る「神父」の方がまだ警戒に値する。

そんな臓硯が。

聖杯戦争が始まる以前より。何よりも、誰よりも警戒し続けている者が居る。

衛宮イリヤスフィール。

あの「アインツベルン」の最高傑作であり、あの「衛宮」の後継者。

臓硯は確信している。

彼女こそが己の願望を阻む絶対敵であると。

聖杯戦争の予兆を掴んだ臓硯の警戒度はますます跳ね上がった。

幼いながらも既に“完成”された魔術師だ。

恐らくは“最後”となるだろう今回の聖杯戦争、確実に勝利する為に絶対に避けては通れない存在。

『桜よ……お主は余計な事をせずとも良い、ただ衛宮の動向を余さずワシに伝えよ』

そう言つて、かつて臓硯は衛宮へと桜を遣わした。

次代の間桐の要たる桜を使った危険な賭けは成功し、少くない情報を掴む事が出来た。

桜は知る由もない事だが、先代の衛宮切嗣は聖杯を目前にしながら“聖杯を破壊”している。

その理由を、臓硯は正確に把握していた。

故に、第五次聖杯戦争でも——衛宮は再び聖杯を破壊するだろうと睨んだ。

確実に。

(イリヤさんも、お爺様も……互いを警戒し合ってる。私が間桐のスパイで、それはイリヤさんも承知している。そんな中に呼び出されるって事は……つまり)

衛宮邸の門が見える距離まで近付き、その傍らに立つスーツの男の存在に気付く。

冬木市内では藤村組の存在もありマスメディアなどは衛宮とその関係者の住居へと近寄る事は制限されている。

が、それでも何があるか分からない以上こうした警備は欠かせない。

最も、本当に重要な“裏の”警備担当は隠れ潜んでおり常人には到底見つけられないだろうが。

(よかった……)

最初の頃は強面で物静かな佇まいに苦手意識を持ったものだが、今

では甘い物に目が無いところがある親しみやすい性格の人物だと知っている。

だから、彼が居る事に……安堵する。

「魔術は原則、秘匿されるもの。」

魔術師として相對する時のイリヤは、無關係な者を傍に置いたりはしない。

だから安堵した。

少なくとも今日は。

「……殺される事は、ない。」

「おはようございます」

「おはようございます、桜嬢。どうぞお入りください」

「はい、ありがとうございます」

扉を開けると芳しい匂いが鼻腔をくすぐる。

料理人を目指し長期休暇の度に全国の料理店で修行をする士郎の料理の腕は、手習い程度の桜ではどうしても追い付けない領域にある。

凄い、そんな陳腐な感想しか浮かばない。

漠然とした目的しか持たず生きている者の多い同年代の者達に比べ、既に確固たる信念を持って夢へと近付いている士郎。

その姿は、在り方は。

桜の瞳には他のどんな物よりも尊く輝いて映る。

けれど時折、その輝きが余りにも眩し過ぎて……薄汚れた自分が傍に居る事があまりにも罪深く思えてならない。

それでも居たいと思いつけてしまう。

ほんの数年前までは考えもしなかった。

あの輝きに魅せられてしまったのは。

今更失う事など考えられない。

桜の人生を照らしてくるただ1つの光。

(……ダメ、せっかく先輩に会うんだから。しっかりしないと、こんな顔なんて見せられない……！)

士郎にとって桜は友達の妹、いつも元気な後輩。

そうでなくてはならない。

目を瞑り深呼吸して余計な考えを頭から追い出す。

ゆっくり目を開く。

もうここに居るのは何処にでも居る少女だけ。

兄の友達に淡い恋心を抱き、それを隠して気付かれないように振る舞う少女。

間桐桜が居た。

「おはようございまーす。せんぱーい、イリヤさー……ッ？」

居間に人の気配を感じ、歩くー途中でナニカに遭遇した。

「……あー……」

見た目は人間の女性のように見える。

しかし長く艶やかな黒髪をゆらゆらと垂らし、虚ろな表情でヨロヨロと歩く姿は……とても現世の存在とは思えない。

衛宮邸の中でなく、街灯の存在しない夜道で出会していたら悲鳴を上げていただろう。

まず間違いなく妖怪の類である。

呪いのビデオから出て来る系だ。

何だか何処かで見た事あるような相手の気もするが、そんな筈は無いと頭を振って否定する。

だって目の前の存在が本当に桜の思う通り「あの人」ならば。

こんなおどろおどろしい気配など発する訳が無い。

「うー……あー……」

ほら、やつぱり。

あの人……こんな情けない声を出す筈が無い、というか衛宮邸に居る訳が無いのだから。

とても失礼な事を考えてしまったと、桜は心中で謝罪を述べる。

(やだな私……疲れてるのかな)

どうやら睡眠不足による疲れが想定しているよりも深刻で、その所為で幻覚を見たのかも知れない。

パシリと顔を叩き、深呼吸し、ゴシゴシと目を擦る。

恐る恐る目を開く、すると……謎の存在はもう目の前には居なかった。

(ああ……良かった。やっぱり気の所為……だっ……)

ホッと一安心するものの、何故か唸り声のような音はまだ廊下中に響いていた。

ギシギシ……と、まるで誰かが廊下を歩いているような音も聴こえる。

具体的に言えば、桜の3mほど隣に。

振り向いて確認したいが、もし幻覚ではなく本当に存在していたらと思うと……そんな度胸は桜には無かった。

(……気の所為……うん、気の所為……あは、は)

全ては自分の気の所為だと決め付け、耳を塞いで早歩き気味に廊下を進み出した。

早足になったのは、そんな気分になったからだ。

耳を塞いだのは、寒気に晒されて耳が冷えてしまったから。

他意は無いだ。

うん、本当に。

ないったら無いのだ。

「先輩……あっ」

恐ろしい幻覚を乗り越え居間へと辿りついた桜が目にしたのは、見覚えの無い美少女の姿。

その存在感から桜には直ぐ「正体」が理解できた、彼女こそが士郎の呼び出したサーヴァントなのだ。

(本当に……始まつちやうんだ)

胸の奥、心臓の辺りが痛む。

あの優しく暖かな憧れの先輩が、魔術師同士が相争う聖杯戦争などという殺し合いに否応無しに巻き込まれてしまった。

その証であり象徴であるサーヴァントが、目の前に居る。

勿論、まだ可能性は残っている。

この衛宮邸には士郎より遙かに優れた魔術師のイリヤが居る、彼女のサーヴァントである可能性も僅かながら残ってはいる。

しかし、それは有り得ないだろうと桜の感覚が告げている。

特別な感覚を持つている訳ではないが、今回は違う。まず間違いないだろう。

他の誰でもない、士郎と関わりのある事柄について己の感覚が間違えう筈は無いという自負があった。

「……………」

コクコクと頷きながら黙々と食事中の彼女。

その周りには堆く積まれた大量の皿。

ヒヨイ、パク、モグモグ、ゴクン。

目を離れたつもりは無いのに、気付けば皿の中身が次々と消えていく。

いったい何が起きているのか直ぐには理解出来なかった。

見た目は本当に普通の少女にしか見えないと言うのに、何処にあればだけの量が消えていくのだろうか？

内心ありえない大食いだと思っていた大河ですら、この量は捌き切れないだろう。

桜は心中で大河に謝罪する。

食い意地が張ってるなあ、なんて思っていたりした自分が恥ずかしい。

今日は反省することばかりだ。

(それにしても綺麗…………)

見た目の美しさだけではない。

豪華な青いドレス姿は、和風の衛宮邸においては場違いであるにも関わらず彼女が纏っているだけでこれ以上なく場に相応しかった

何よりも醸し出す雰囲気、美しい。

サーヴァントを見た事は初めて「では無い」が、彼女から受ける存在は強烈で……………思わず、見蕩れてしまった。

あまりにも尊く輝いている存在。

そんな存在を桜は良く知っている。

だから、見蕩れてしまうのだろう。

そう、このサーヴァントから感じる在り方は。

余りにもサーヴァントに似通っている。

相応しい、と思う。

数多の英霊の中で、彼女以上に士郎に相応しい存在はいない。

そう確信する。

断言できる。

……嫉妬を覚える程に。

(やだな、私……きつと嫌な顔してる)

ほんの少し先の台所で料理を作っているだろう士郎に、今は顔を合わせられない。

こんな情けない顔を、見せたくない。

「……モグモグ……」

こちらに気付いているにも関わらず、話し掛けてくる事なくサーヴァントは食べ続けてくれている。

その気遣いが有り難かった。

言葉を交わしていたら、この胸の奥で渦巻いている感情をぶつけてしまうかも知れなかったから。

それにしても本当に、よく食べるものだ。

まさか食べる事に夢中で気付いていない……という事も無いだろう。

それは有り得ない。

相手は歴史に名を残した英雄なのだ。

いつ何処で敵が襲ってくるかも知れない聖杯戦争中に『食べるのに夢中で周りを見てませんでした、それよりもお代わりを(キリッ)なんて事、ある筈が無い。

本当に嫌になる。

初対面の相手に、こんな風に浅ましい考えを抱く自分は……嫌な女だ。

「はあ……何やってるんだろう私」

俯きながら居間を後にし、しかし何処かに行く宛もなく膝を抱え込んでうじうじと悩むこと数分。

聴き慣れない乾いた音が耳に届いた。

一瞬、先ほど見たおぞましい存在がまた現れたのかと思つたが——どうも違う。

「……う？」

妙な音だが、経験から類似する音に心当たりが全く無いワケでは無い。

と言つても具体的に何であるか確信するにはまるで至らないのだが。

さっきの妖怪みたいな幻覚や幻聴の類でない事だけは間違いない。

さっきまで気付きもしなかったのに、1度意識してしまうと氣になつて仕方ない。

(これ……何なんだろう)

想像を膨らませる間も鳴り続けるこの、妙に不快な音の発生源を探る為に耳を澄ます——中庭の方からだろうか？

あまり聴いてて気持ちの良い音では無いし普段なら近寄らなかつただろう。

けど今は。

ここから離れられる正当な理由が出来るなら、何でも良かった。

中庭に近付くにつれ音はハッキリと聴こえる。

考え辛いが泥棒だろうか？

仮に泥棒が居たとしても、二重三重の嚴重な警戒を潜り抜けて衛宮邸に侵入する可能性は低い。

それでも万が一。

何者かが居る可能性を考えなるべく音を立てない様に忍び足で、廊下の電気も点けず息を殺しながら中庭へと向かつた。

「……………」

中庭が一望出来る廊下の曲がり角から少しだけ顔を覗かせると、うつすらと射し込む月明かりに照らされ——何者かの姿が影とし

て浮かび上がっていた。

十中八九、誰かが居る。

この場合、考えられる可能性は大きく分けて3つ。

最も高い可能性はイリヤと大河。

この2人なら成程、藤村組の警備に反応が無いのも頷ける。

次に考えられるのは、侵入者。

これは殆ど考慮する必要もないだろう、もしそんな馬鹿が居たとし

たら……南無。

そして、3つめ……これは最悪の可能性。

(……魔術師)

今は聖杯戦争の時期。

もう直ぐ夜が明けるとはいえまだ夜に違いはない、ならば他の参加者が襲撃してくる可能性も0ではない。

桜自身、広義の意味では間桐の尖兵のようなもの。

足が竦む。

何処か遠いものと考えていた。

士郎が巻き込まれた事は真剣に考え心配し、出来るだけの事は全てしようと考えていた。

それでも。

自分が聖杯戦争に関わっているという自覚は、あまりにも低かった。

(……行こう)

決意する。

この場にイリヤか大河以外の何者かが居て、それが士郎を狙う敵ならば。

死のう。

こんな命でも、役に立てるなら。

彼を護れるならば。

死ぬ事は不思議と、怖くなかった。

「……ブツブツ……」

しかし庭に居たのは、敵のサーヴァントや魔術師ではなくイリヤだった。

それもそうだと溜め息を吐く。

先程まで悲壮な覚悟を持っていた自分がどうにも滑稽に思えて恥ずかしく、同時に新たな驚異に立ち向かう為に心を震わせる。

桜にとってイリヤは格別に苦手な存在だった。

一心不乱に何かを行っているイリヤは此方に気付いてるのかいないのか、振り向く事なく何かの作業に没頭していた。

手元に置かれている段ボール箱の中身をじっと見つめては、何かを振り降ろす。

そしてもう一度じっと見つめる。

この一連の作業を繰り返している。

普段ならとづくに気付いてもおかしくない距離まで近付いているにも関わらず一切の反応は無い。

これは非常に珍しく、不気味だ。

(また始まったのかな……)

本当に稀にだが、イリヤはこうした奇行をする。

そういう時は大抵よく分らない魔術を行使しているか、パソコンを激しく罵倒しながら叩いている。

今回は前者だろう。

こういう時に近付いたり声を掛けるとロクな事にならないので放置したい所だが、生憎とそうもいかない。

例えばどんな理由があろうとも呼び出しに遅れると、決まって士郎の前で恥ずかしい事をされるか……弄られる。

この前は士郎の目の前で胸を激しく揉まれ、一日中マトモに顔を合わせられなかった。

今思い出しても恥ずかしくて仕方がない。

そういう人なのだ。

「あ、あのー……」

「……」

勇気を出して声を掛ける……ものの、残念ながら気付いて貰えない

かった。

本心を言えば出来る事ならもうこの辺で放っておきたい所なのが、何度でも言うが恐らく声を掛けなければ後で士郎の前で弄られるに違いない。

そして経験上、声を掛けたとしても士郎をネタに弄られるのは確定的に明らかだ。

理不尽な事だが仕方がない。

この衛宮邸の主人は彼女なのだから。

彼女こそがルール。

従わなければ、それこそ本当に衛宮邸への出入りを禁じられてしまうだろう。

それに比べれば、弄られるぐらいなんてことは無い。

……そう思わなくてはやっていられない。

衛宮邸に通うようになってから、変な精神性が鍛えられてしまった桜だった。

「お、おはようございまーす……イリヤさーん。あのー、お邪魔してます……」

「……ブツブツ……」

「イリヤさん、そのー……お忙しいとは思いますが、良ければお話を……して……」

「……ブツブツブツ……」

一向に気付かないイリヤと、ヘタレて大声の出せない桜。

いい加減覚悟を決めないといけない頃だろう。

その覚悟が、先程の決死の決意に比べなかなか決まらない事に桜は気付かない。

無意識にイリヤの不興を買う事を、死ぬよりも恐ろしく思っているのだろう。

この先どんな出来事があったとしても、この2人の力関係が変わる事は永遠に無さそうだ。

(すう………はあ………)

深く息を吸って、吐く。

なるべく近所迷惑にならないように、けど声を押し殺しながら大声を出す無駄に細かい技術で桜は——

「イ、リ、ヤ、さぁーんっ!!」

——不意に、天地の感覚が消えた。

(あたまがぼーつとする……)

目の前に誰かが居た様な。

何かをしようとした様な。

しかし何も思い出す事が出来ない。

(赤い……なに……)

思い出すという事すら理解できなくなる。

緩やかに意識が途絶えていく感覚。

身体がバラバラになつていく感覚を、どう思っているかも理解できなく……「サクラ!」……唐突に意識が覚醒する。

(ううん……えっと……なんだっけ)

「遅いわよサクラ、何をしていたの」

「……あ、すみません……?」

どうにも頭がハッキリしない。

さつきまで何を考えていたのか……思い出せない。

イリヤに声を掛けようとして、何時の間にか振り返っていた事に気付いて口を噤んだ。

そう、それだけの筈。

なのに——どうにも、心臓がひときわ激しく高鳴って、痛い。

拭い切れない違和感がしこりの様に頭に残留する、そんな不快感は……

「まったく、そんな調子じゃシロウはお嫁に出せないわね。精進なさい」

その一言で、呆気なく消し飛んだ。

「……えっと、逆じゃないですか。じゃなくって! な、なな何を言ってるんですかイリヤさん?! わ、私と先輩はそんな仲じゃ——」

「黙りなさい。言った筈よ、シロウをデートに誘う度胸も無い内は私に口答えするなつて」

一瞬で茹で蛸のように真っ赤な顔になった桜を見やり、ぺろりと舌なめずり。

見た目こそ儂い美少女であるイリヤの、その内面に普段は隠されている嗜虐的な感性が大いに刺激される。

何時まで経っても初な反応を示す桜の、あまり自覚のない乙女心を弄んだりからかったりするのはいリヤの娯楽の一つだった。

「まったく、その豊富な胸は飾りなの？ それとも、通い妻してる余裕？ ハッ。言っておくけどシロウには毎日お見合いの申し込みが何十件も来てるのよ、まあ握り潰してるけど。金目的の女はお呼びじゃないもの。」

あなたには期待してるのよ、少しだけね。

百点満点で言えばギリギリ、お情けで五十点ぐらいだけど、その胸は良いわ。見てよし、触ってよし、叩いて良しの三拍子！ もう少し自信を持って、胸を張りなさい。そう胸をね、胸！

………ほんと何を食べたらそんなになる訳？」

「………あう………あう」

褒めてる様であり貶している様な微妙な言い回し、相変わらずイリヤの思考は桜には良く分からない。

ただ1つ確かな事は。

イリヤは士郎をとても大切に思っているという事。

………それがどうして胸を強調する事に繋がるのかは、恐らく今後も理解できないだろう。

理解したくもない。

「ううっ、もうっ。イリヤさん、からかわないてくださいっ」

「はいはい。ま、今日は良いわ。ほら、突っ立ってないでシロウの手伝いに行きなさい。その為に呼んだって私、言わなかったっけ？」

「え？ 言われてませー」あ！「ー何でもないです。えつと、その」イリヤに弄られて忘れかけていたが、士郎に会うのは少しだけ躊躇われる。

もちろん、会いたい。

けどもう少しだけ……心を落ち着かせる時間が欲しかった。

「……い、イリヤさんは此処で何をしてらっしゃるんですか？」

「……」

「……なんて、聞いてみちゃったり……して……その」

苦し紛れの質問だった。

心を落ち着かせる為、気を紛らわせる為の。

イリヤに軽く罵倒して貰えれば気も紛れるんじゃないかなという、ちよつと錯乱気味の質問。

何時もなら既に罵倒の嵐に巻き込まれている筈が、予想外に此方を眺めるイリヤの表情は硬い。

値踏みをする様な鋭い視線。

氷の様な無表情。

余計な事を言ってしまったと直ぐに後悔した。

普段は明るい少女然とした彼女の、ふとした時に見せる冷たさが桜は恐ろしくて堪らない。

「……そうね」

2・3度まばたきをする間に元の表情に戻ったイリヤは、両手に持っている物を見せ付ける事で桜の疑問に答えた。

金槌と、皿。

金槌は長年使った事により僅かに変形し、錆が浮いている。使えない事は無いだろうが、あまり品質は良くない。

彼女の持ち物ではなく、士郎の持ち物を土蔵から引っぱり出して来たように思われる。

何処の量販店でも買える極普通の品だ。

ドイツ語で喋って変形したり、金色に光って原子分解したりするトンドモ機能は無さそうである。

庭に置かれている段ボール箱の中には、桜の位置からは分からないが同じ様な皿が何枚も存在するのだろう。

箱を持って揺らし、ガチャガチャと皿同士が擦れる音が聴こえた。

特別な拵えではない、これも極普通の品だ。

鑑○団に出しても4桁ぐらいでカウントが止まり、司会者や観客が失笑すること請け合いのお値段だろう。

敢えて特筆する所を上げるなら、控え目に言っても大富豪である衛宮邸にある物とは思えない品質な事ぐらいか。

それ以外には本当に、何もおかしくはない。

「金槌と……お皿、ですか」

だからこそ『逆におかしい』と思った桜の判断は経験上、間違っていない。

こういう時にイリヤが真実『何もおかしい事をしていない』などと、太陽が急に擬人化してケモミミ付けた良妻狐が爆誕し日本の国号がタマモランドになるぐらいありえねーです。

みこーん！

「そうよ」

「えつと、その、何をなさって……」

「は？ 分からない？」

「えつ」

「えつ、はこっちのセリフよ。本当に分からないの？ ん？ んんん？」

「はい……すいません」

イリヤの目が細まり、ジト目になる。

その視線を敢えて言語化すると「これだけ見せてもまだ分からないの？ 頭に脳みそは無いの？ その胸に回す栄養の一部だけでも脳みそに回しなさいこの乳牛！」とでも言いたげな感じか。

恐らくそんなに間違っではないだろう。

何せ今まで言われた事のある組み合わせで構成した内容なのだから。

しかし残念ながら、肝心のイリヤが何をしてたのかは……桜にはサッパリ理解出来ない。

(もしかして、私にも分かるレベルの事なのかな……)

御三家の一員である桜だが、魔術に関しては無知と言ってもいい。

イリヤと一緒に見たアニメのファンシーだったりクレイジーな魔法の方が詳しい程だ。

何度も見せられれば、あまり興味が無くても無駄に詳しくなっ

まうというもの。

故に、優れた魔術師であるイリヤが金槌と皿を使ってどんなけつたいな魔術儀式を行っているのかなど一見しただけで判別出来よう筈も無い。

桜の知っている本格的な魔術など、口に出すのもおぞましい外道な行為だ。

一度だけイリヤに内容を漏らした時には、一週間ほど衛宮邸への出入りを禁止された程に間桐の魔術はイリヤに受けが悪い。

どうにかこうにか必死に考えを巡らせ、辿りつ着いた桜の答えは――

「えっと……の、呪いの儀式……ですよね？」

「……サクラが普段、どういう目で私を見てるかよく分かったわ」

「違うんですか!？」

「なんで驚いてるのよ、驚いてるのはこっちよ！ 見てなさい」

意気も荒くイリヤは金槌を持ち上げる。

ビクツ、と桜の身体が反応する。

その反応にイラツときたイリヤだったが指摘することはしなかった。

自然と桜の視線は金槌へと注がれ、そのままある程度の高さまで持ち上げたイリヤは桜に向かって空いている手を横に振った。

下がれ、という意味だろうか？

コクリと頷き、3歩ほど下がったのを確認するとイリヤは勢い良く段ボールの中へと金槌を振り降ろした。

パリン。

小気味よい音がして皿が割れた。

慌ててキョロキョロと周囲を見渡すも、特に変わった現象は起きていなかった。

空間がおぞましい色に変わったり、見るからに身体に悪そうな煙が発生したり、僕と契約しろとか言ってくる宇宙人とか、勿論メンでインでブラツクな人達も現れなかった。

特別な事は一切なかった。

「ね？」

「……はあ」

イリヤの奇行は今に始まった事では無いので色々と勘繰っていたのだが、今回は特に何の捻りもなく金槌で皿を割っただけ……で正しいらしい。

まあ冷静に考えるまでもなく、金槌で皿を何枚も割ること自体が妙な行動に違いは無いのだが。

そんな事を指摘する度胸は桜に無かった。

「居間のアレ、見た？」

「えっと……アレ、ですか」

「アレはアレよ。あの大飯ぐらいのまな板よ」

「あー……」

アレ＝セイバー。

どうもイリヤ判定で、かのサーヴァントは不合格の烙印を捺されているらしい。

ちよつとだけ嬉しく思ったことは桜だけの秘密。

「ん。話すと長いから説明は省くけど、シロウが料理を作ってあげる約束をしたのよ。満足するまでつて約束でね。で……それから予想外。

めちやくちや食べるのよね、有り得ないくらい。引くわ。最初は私も手伝ってたんだけど、もう私の限界を越えちゃって……で、サクラならシロウの手伝いも出来るだろうから呼んだのよ。

2人きりの共同作業よ、密着するチャンス！ モノにしなさいサクラ。絶対にアレに遅れを取るんじゃないわよ！

でも避妊はしなさい。まだ早いわ。

ほら、説明終わり！ しっしっ。さっさと行きなさい、時は金なりよ」

相も変わらず酷い言い草であったが、要約すると自分を買ってくれているという事なのだろう。

普段はボロクソにいわれる事が多いので、そこまで思われていた事

に少なからず感動を覚える。

胸を震わせていた桜に、何処か頬を赤くしたイリヤから強烈な視線が突き刺さる。

さっさと失せなさい！

無言のプレッシャーに晒された桜は、慌てて踵を返し台所へと慌てて走り去った。

あの美しいサーヴァントよりも、自分の方が良いと言われた事の嬉しさを噛み締めながら。

「……あとで絶対に胸を叩いてやるんだから」

自分の胸をペタペタと触り、意外と去年より発達している事に喜びを感じながら桜との距離が充分に離れた事を確認する。

これから先は「魔術師の時間」だ。

「……お久しぶりね、マキリ。けれど感心しないわ、勝手に上がり込むなんて。貴方を招いた覚えは無いわよ」

つい先程まで桜が立っていた近くの陰から蟲が一匹這い出て庭先へと降りる。

相変わらず醜悪な姿に嫌悪感を持ちつつも、決して表情には出さない。

表情だけではない、何一つ情報を与える気はない。

特に魔力の消耗が激しい事だけは。

『ーなに、こんな時間に出掛ける桜が心配だな。最近は何騒だからのお、つい過保護になってしまった。孫可愛さ故のこと、すまなんだ衛宮よ』

順調に行けば明日にでも、この聖杯戦争は「終わる」のだから。

VSセイバー

くあなたが私のシェフだったのですねく

少しだけ時間は遡る。

召喚された直後、敵サーヴァントの気配を感じたセイバーが斬り掛かり何故か不意を突かれたアーチャーが手傷を負う……という事は無かった。

予めイリヤに霊体化して下がっていると言い含められ素直に従っていたアーチャー（凛には不興を買った）の気配を感じ、警戒こそしていたが。

想像以上の魔力消費にマスターである士郎が身動き取れなかった事も一因だが、一番の要因は傍らに寄り添う白銀の髪を持つ少女の存在が気になったからだろう。

過去……まだ聖杯を求めて間もない頃に出会った“誰か”に似ている少女。

誓いを果たせなかったその誰かに似ている少女に、郷愁にも似た感情を覚えたから。

聖杯から与えられた知識が己の中の“経験”と繋り、この時代が“あの時”に近い時間軸である事に気付く。

ほんの一瞬だけ過ぎる“最初の”聖杯戦争の記憶、思い起こす事は後悔ばかり。

特に最後の最後、あの男からの裏切りは……そこまで思い起こし、連鎖的に気付いた。

アイリスフィール。

そう、この少女は彼女に似ているのだ。

「大丈夫ですかマスター」

「あ、ああ……大丈夫。このぐらい、死にはしない」

「そうね。大丈夫、もう少しの間だけそのまま我慢していてね」

英霊召喚は聖杯のバックアップを以て何とか成功する大儀式だ。

半人前の士郎では魔力が持たず召喚に失敗、若しくは中途半端に成功しサーヴァントとの繋がりが上手く結べない等のトラブルが起こるだろう。

今回はその消費魔力の大部分や詠唱など、諸々の作業をイリヤが賄う事で無事に成功を収めた。

今、士郎に残された魔力量は僅かしかない。

サーヴァントを維持するだけで限界だ、戦闘には耐えられないだろう。

異常な量の汗を掻く士郎をこのままにする事はイリヤとしても避けたい事だが、敢えて今はパスを意図的に塞いでいる。

これから行う「交渉」の為に、セイバーへの魔力供給は最低限に抑える必要がある。

失敗した時に直ぐ「始末」できるように。

「シロウ、しっかりとしなさい。いい？ 今から言う事を真剣に念じながら左手に魔力を込めて復唱しなさい。

『許可なく遠坂凛とそのサーヴァント・アーチャーへの攻撃を禁じる』」

「なっ！ 貴女は「許可なく遠坂凛とそのサーヴァント・アーチャーへの攻撃を禁じる！」マスター!?!」

セイバーが口を挟む暇もなく士郎はなけなしの魔力を込めて「令呪」を発動させた。

訳もわからぬままに貴重な令呪を、よりによって敵への攻撃を禁じるという事に使われセイバーは困惑し、同時に怒りを覚えた。

これがマスターの独断なら、まだ良い。

理解できない行為であるが、何かしらの事情があるのだろうと慮る事は出来る。

しかし今回の令呪は第三者からの強制であり、一切の躊躇なく令呪を使用したマスターとのラインから流れてくる魔力量は今にも無くなってしまうような程に拙い。

このままではマスターが死ぬ可能性もある。

「落ち着きなさいセイバー、あなたが危惧している様な事は起きないわ」

「何を……!」

「落ち着けと言っているのよ、さもなければ2つ目の令呪を使わせる事になるわ」

「それを私が見過ぎすとも？ 貴女がマスターに指示するよりも、私の剣が貴女を斬る方が速い」

「黙れと言っているのよ！ これ以上グダグダと戯れ言を宣つてる間にシロウに何かあつたらブツ殺すわよッ!!」

「!」

イリヤの怒気を受けセイバーは押し黙った。

苦痛の中、自分から少女を隠す様な位置に動いたマスターである少年。

その少年を更に庇う様に前へと出る少女。

2人が互いに厚い信頼関係を結んでいる事が見て取れた故の判断。

それに加えて、少女から発せられた魔力の質があまりにも懐かしく思えて……戦意が鈍った。

「……分かりました。では、納得のいく説明をお願いしたい」

自分が騒ぐ程にマスターへの負担となる事を察し、セイバーは警戒を続けながら少女……イリヤと名乗った彼女の言い分を聞く事に決めた。

臆げながらも、今回の聖杯戦争が容易くいかない可能性を感じながら。

そして思い出した。

かつて自分が立てた誓いを、果たせなかつた相手が“2人”居た事を……。

「……話は分かりました。聖杯が穢れているというのなら、その破壊に協力する事をお約束します。

それでいいですね？ マスター」

「ああ、ありがとう。ゴメンな、セイバーには叶えたい願いがあるから召喚されただらう？」

セイバーは聖杯戦争がもはや根底から成り立たないという事、この儀式に隠された真実の説明を受けた上で協力する事を快く承諾した。

最悪の展開を予想し覚悟していたイリヤにとって、これは望外の結果と言えた。

サーヴァントは基本的に聖杯を求めているからこそ召喚に応える、今回はその聖杯が欠陥品である事を承知の上でイリヤは召喚を行

なつた。

これは明白な裏切り行為だ。

呼び出された相手にも因るだろうが、下手をすれば言い訳すら口にする間も無く殺される可能性が高い。

尤も、この聖杯戦争自体がサーヴァント……英霊の魂を利用し第三魔法の再現をする為にアインツベルンが画策し、遠坂と間桐が同調して始めた魔術儀式だ。

嘘偽りで塗り固められ隠されていた真実を、全てありのままに説明しただけ良心的ではある。

「いえ、構いません。真実、聖杯が穢れており災厄を齎す物であるというのなら私も見過ごす訳にはいきません。

それに、穢れていなければ通常通り。戦えば済む話です」

自分達英霊が聖杯を完成させる為の生贄だったと知っても、セイバーは殆ど取り乱さなかった。

それもその筈。

このセイバーは通常のサーヴァントとは少し違っており、こういう事態には「慣れて」いた。

サーヴァントは「座」と呼ばれる世界の外側に存在する英霊の本体からコピーされた分身に過ぎない。

召喚された時に経験した全ては記憶ではなく、記録として本体へと還元される。

その記録を参照する事は、膨大な蔵書が無造作に収められている図書館の中から何のヒントも無く探し当てる事に等しい。

故に全く同一のサーヴァントを再召喚したとしてもその記憶に連続性は存在しない。

そう、本来ならば。

しかしセイバーは例外的に「数多の」聖杯戦争へと記憶を保持して幾度も召喚されており、それは聖杯を得るか聖杯を「諦める」まで永遠に繰り返される。

故に、今回の聖杯が得られなくともあまり問題では無い事から冷静な判断を下せた。

何しろ時間や機会は無限に存在する。

「ああ、イリヤが言ってる以上それは無いだろうと俺は思ってるけどさ。もしセイバーの言う通りに聖杯が正常な状態なら、俺も出来る限りセイバーを応援したい。」

「ま、俺は魔術は見習いレベルだからさ、戦いには役に立てないだろうけど」

「そんな事はありません。その気持ちだけで充分です」
そう、充分だ。

確かに聖杯を得られる可能性が今まで召喚されたどの聖杯戦争よりも低く、己の宝具を存分に振るう事がままならない魔力量だとしても——今まで召喚されたどのマスターよりも士郎は好ましかった。例えどれだけ優れたマスターだとしても、どれだけ宝具を連発出来たとしても。

それで勝てる程聖杯戦争は容易くない。

それは聖杯戦争のベテランとも言えるセイバーが一番よく分かっている。

聖杯を得る直前で裏切った者。

自身の力を過信し他のマスターと争い敗れた者。

令呪の使用を渋るばかりに勝機を逃した者。

数多の聖杯戦争に参加し敗北し続けたセイバーは、聖杯戦争に於いて最も重要視するべき一つの事柄を見出した。

信頼。

士郎はマスターとしても、魔術師としても、戦闘者としても本人の言う通り三流なのだろう。

それは短い時間しか交流していないセイバーにも理解出来た。

それでも彼は。

その心根は。

意思は。

今までの誰よりも信頼に値する。

惜しむらくは、彼と共に聖杯を得る可能性が低い事か。そう、セイバーも口では聖杯戦争を諦めていない風に語っていたが——その

実、今回の聖杯は得られないであろう事を確信していた。証拠は無い。

ただ、そう「直感」している。

召喚直後に臆げに感じた、この聖杯戦争に対する違和感はいりやから齎された情報の詳細を聞く程に確かな物となっていた。

同時に「あの時」の結末に、初めて疑問を持った。

あれ程に聖杯を欲していた「あの男」が、妻も、仲間すらも切り捨て手段を選ばず聖杯に固執したあの男が。

どうして聖杯を手に入れられる絶好のチャンスを目の前にして裏切ったのか。

その疑問への答えが、ハッキリとするような気がした。

「あー、その……ありがとう。そ、そうだセイバー！ セイバーは何か好きな食べ物とかあるかな？ 大抵の料理は作れるから、遠慮しないで言ってくれ」

好意は時に、口に出さなくとも如実に伝わる。

セイバーからの信頼と親愛の笑み。

その美しさに年頃の少年らしく照れてしまった士郎は、気恥しさを誤魔化す為になんか軽く口に出した。

それだけの、軽い一言だった。

「いえ、サーヴァントは魔力さえ供給されていけば食事は……」

この時は士郎も。

「でも、食べられない訳じゃないんだろう？」

セイバーも。

「はい、それはそうですが」

互いの尊厳を賭けて争う事になるとは。

「じゃあ、一口だけでも食べてくれ。気に入ってくれたら好きだけ作るからさー！」

露ほども思わなかった。

士郎は買い物の際およそ5日分を目安に食材を一気に買い込む。

これは冷蔵庫のサイズや賞味期限に割引きなど、食材の鮮度が保たれるギリギリの線を鑑みた上での最適な量だ。

とは言っても、衛宮家には食欲旺盛な野生の虎が生息しているので一般家庭の5日分とは量が違う。

極普通の4人家族が1日3回しっかり食べたと仮定すると、10日程は食べられる量。

つい先日買い物をしたばかりなので、まだまだ一週間分以上は残っている計算になる。

保存食を合わせれば半月分は堅いだろう。

「シロウ、ご飯のお代わりを！」

だから問題はなかった。

例えセイバーがどれだけ大食いだとしても、人が一度に食べられる量など限られている。

それが例えばテレビを賑わす大食いたレントでも、最強の国技SMOUの継承者であるRIKISHIでも。果ては食べる事に命をも賭けるフードファイターだったとしても。

十分に満足させられる量が賄える筈だった。

……その筈だった。

今や食材のストックは半分を切ったというのにセイバーのペースは全く衰えない。

「あいよ、お待たせ！」

一升炊きの炊飯器を引っ張り出して用意したご飯は既に空に近い、これは大体20人前の量である。

もう一回ほど炊かねばならないだろう、同じ味では飽きるだろうか。今度は炊き込みご飯だ。

存外到達者な箸使いでご飯を食べ続けるセイバーだったが、それ以上におかずを食べるペースが凄まじかった。

しかしセイバーの食事ぶりは、大食いたレントのような雑に胃袋へ放り投げるような暴食では決して無い。

あくまでも一定のペースを維持する。

しっかりと噛んで咀嚼し、口いっぱい旨味を感じてから、食道を

通る食材の一片にまで感謝しながら一口ずつ食べている。

……それが何故か常人の目には留まらない速さと言うだけの話で。それこそが士郎にとつては大問題なだけだった。

「うわ……もう皿ないわよシロウ」

「本当か？ あー、このペースだと洗うのが追い付かないな」

戸棚に残っているのは小皿ばかり、使うだけ洗い物が嵩み邪魔になるだけだろう。

土蔵の奥に予備の皿があるが、煮沸消毒もしていない新品を引っ張り出す訳にもいかない。

ならばどうするか？

決まっている。

無いならば、作り出せばいい。

「どうするの？」

「ん……悪いイリヤ、魔力を回してくれ」

セイバーを維持する為の慢性的な魔力不足による負担は、数年前まで行っていた修行を思い起こす程に、士郎の身体を苛んでいた。

この上、何かを投影するにはかなりの無茶が必要になるだろう。

無茶と言えば、魔術に関しては昔から無茶な事ばかりしてきたものだ。

（そーいやあの時が、2度目。だったか、イリヤを泣かせた事は）

魔術回路を1から作り続けるという荒業。

そんな常軌を逸した行いを、1日たりとも欠かさず続けていた。

ソレが、間違った。方法だと気付かされたあの日。

忘れえぬ失敗の記憶。

そして、昨日の3度目。

もう3度も泣かせてしまったのかと思うと男として、弟として、家族として自分が酷く情けない。

しかし幸か不幸か、その制御のミスにより死に掛けた経験が無ければ。

ランサーと対峙した経験が無ければ。

今頃は意識を失っていたかも知れない事を思えば、失敗した事も無

駄にはなっていないのだろう。

「魔力が足りなかった？ 最低限は回してたつもりなんだけど」
「いや、大丈夫。維持するだけの量はキッチンと貰ってる、魔力は大事に取っといってくれ。料理を盛る皿を何枚か投影したくってさ。本当、それだけだ」

「ああ、そういう事。はあ……分かったわ、持っていきなさい」
送られてきた魔力量は必要量より幾分か上だった。

本人よりも正確に消費魔力量を把握しているイリヤが間違える事など珍しいので横目でチラリと見ると、不満気な顔で口を尖らせながら肩をすくめていた。

(……バレたか)

セイバーを召喚してから「何故か」体調は良くなってきていた。それこそ折れた筈の脚に違和感すら感じない程に。

だから魔力不足による酩酊を誤魔化せていると思っていた士郎の思惑は、イリヤには筒抜けだったらしい。

ショートして機能不全になっていた回路も段々と正常に戻って来ている。

一眠りすればセイバーを維持するのに困る事は無いだろう。

その一眠りが何時になるか、今のところ全く分からないのだが。

(投影、開始)

設計図を構築する。

普段から何気なく使っている日用品の投影は、一番出来の良い包丁に比べてもかなり精度が高い。

と言っても包丁やナイフ等に比べれば消費魔力は増えるし、構成も甘くなり勝ちだ。

それでも昔の様に完全に中身が無い失敗作よりは随分とマシになったものだ。

「……終了」

ところが。

今までの投影とは段違いに素早く、真に迫った皿が出来上がった。
消費する魔力は変わらない、使った設計図も変わらない、ならば

……変わったのは自分。

(……不思議だな、気味悪いくらい上手くいった。あの双剣も、次はもっと上手く出来る自信がある)

「シロウ、こんなに投影速かったっけ？」

「いや、そんなこと無いぞ。多分だけどもムチャな投影したからかな、普段より回路が敏感になつてる気がする」

「そう……それじゃあ私、これ持つていくわ」

投影した新しい皿を何度か叩いて強度を確認してから盛りつけた料理を持つて居間でコクコクと頷いているセイバーの元へと向かったイリヤを見送り、士郎は次の調理工程へと取り掛かる。

(魔力に余裕が出来るのと流石に頭がスツキリしてきた。イリヤに後で感謝しとかなきゃな、セイバーを召喚したのだから「俺の為」なんだろうし)

誰がどう考えても。

魔術師見習いの士郎にだつてわかる事だ。

令呪の有無など関係ない。

士郎よりもイリヤの方がサーヴァントを従えるに相應しい事を。

今セイバーを維持している魔力こそ士郎のものだが、召喚陣も、呪文も、魔力の大部分もイリヤが負担したものだ。何もかもを負担して、しかし肝心の契約だけは士郎に結ばせた。

この理由が分からないほど士郎はも愚かではない。

他のサーヴァントから護らせる為。

原則としてサーヴァントはサーヴァントでしか倒せない。

どれだけ優れた魔術師といえど、サーヴァントと闘うなど……ましてや打倒するなど到底不可能。

それは身を以て体験した士郎自身が、誰よりも分かっている。

(女の子を闘わせるってのはどうかと思うけど……)

今振り返つてみても、あのランサーの攻撃を防げた事は奇跡に近い。

もう少し相手が本気ならば、もう少し投影速度が遅ければ、もう少し怪我をしていれば、もう少し強化が上手くいかなければ、もう少し

アーチャーが来るのが遅ければ……あの数秒を乗り越えられたのは
確実に運が良かったただけだ。

2度はない。

まだ見ぬサーヴァントが命を狙ってきた場合、十中八九……死ぬ。
ぬ。

士郎の予想は概ね当たっていた。

もともと大聖杯破壊用の戦力と言うよりも士郎を護らせる為に
サーヴァントを召喚する事はイリヤの中で規定事項であった。

だが、それほど急ぐ事では無いと思っていた。

呑気に昼寝をする程度には。

状況が変わったのは、期待していた遠坂の守護が全くと言っていい
ほど役に立たなかったからだ。

士郎を護る為に戦力の補充は急務となった。

存外に“最上級”の触媒を手に入れられた事もあり、これならば問
題なく士郎を護れると考え……懸念していた問題が起きた。

召喚者を己自身と聖杯に誤認させながら行う事で士郎の中に眠る
“あるモノ”との縁を回避させようとした策略は、結果的に失敗し
た。

現れたサーヴァントに対し心中で何を思ったかを知るのは、当人で
あるイリヤのみだが。

何となくだが、イリヤがセイバーに対し悪感情を持っているだろう
とは士郎も薄々は感づいている。

（……いや、今はいい。余計な考えは腕を鈍らせるだけだ。今、俺が
やらなければならぬのは料理を作る事だけだ）

こんな自分が、自分に従い護ってくれと言ってくれた彼女にして
あげられる唯一の取り柄。

それが料理なのだ。

何より、あんなにも美味しそうに、幸せそうに食べるセイバーの笑
顔が……嬉しい。

誰かを幸せに出来る料理人になる夢への遠い道のり。

きつとまだ、ほんの一步だけ。

全体から見渡せばきつと誤差にすらならない一歩。

それでも確かな一歩を踏み出せた気がした。

まだまだ彼女は満足していないのだろう、チラリとセイバーの方を見ると変わらずコクコクと食べ続けている姿と、そんなセイバーを憎々しげに見ながら空いたお皿を片付けているイリヤが見えた。

これだけ長時間の調理は初めての経験だ。

無意識に頬が釣り上がる。

(さあ、次は何を作るかー)

作り続ける。

手を動かし、鍋を振り続けよう。

それが彼女と交わした約束なのだから。

カリツ、ジュワ……。

パリパリの皮と柔らかくも強い弾力を持った鶏肉の旨味が、溢れ出す肉汁と共に舌に絡み付くようだ。

香辛料で引き立てられた肉本来が持つ甘さが、丁寧に下処理された事によって一切の臭みを持たず口内に広がる。熱くて呼吸する度に、漏れ出していく香りすら勿体なく思える。

このままでも充分に美味しい。

というのに、ツヤツヤに炊き上がったご飯と一緒に食べ咀嚼するとーえも言われぬ満足感が身体中を駆け巡るではないか。

(唐揚げー美味しいです、これも素晴らしい)

脂っこくなつた口の中をリフレッシュする為に漬物を一口。ポリポリ。

うまうま。

味噌汁の入ったお椀を持ち上げ、ゆっくりと傾ける。

味噌独特の甘みと風味、出汁の持つパワーがセイバーの舌へと続きざまに叩き込まれ味覚を刺激する。

既に慣れたものだが、最初に口にした時は驚いた物だ。こんなにも複雑な味わいが小さなお椀の中で綺麗に纏まっている。

想像だにしなかった世界。

(ふわあ……この豆腐やワカメも堪りません。これだけで充分な一品料理ですね)

付け合せのサラダへと箸を進める。

水洗いして一口サイズに加工しただけの簡素な野菜の上に、琥珀色のソースを絡めるだけで何倍も食欲が増す。

食べれば食べる程にお腹が空くような錯覚に囚われ、今度は別の揚げ物へと箸が伸びる。

どれもこれもが聖杯からの知識には存在しないモノだった。

(何ですかこれは、何でこんなに簡単なのに美味しいんですか！ むしろ野菜って美味しかったんですね!?)

もう、これ。本当に、もう。もう、もう！)

『すみませんマスター、私なんかの為に』

『気にしないでくれ、勝手に作ったただけだから。要らなかつたら残してくれていいから』

『そんな事は出来ません！ では、その……少しだけ、頂きます』

『召し上がれ』

まがりなりにも、遠慮していたのは最初だけだ。

今やセイバーは次々に手を変え品を変え、多種多様な料理の数々に惜しみない賞賛を挙げながら、ひたすら食べ続けるだけの装置と化している。

もともと優れた素質を持っていながら、食糧事情によって無用の長物と化していたセイバーの優れた味覚は。

士郎の作る料理によつて今や錆をすっかり落とされた剣の如く、輝いていた。

「シロウ、ご飯のお代わりを！」

思い返せばサーヴァントとなつてから……いや、その前からセイバーは“料理”を食べた事など無かつた事に気付かされた。

料理という物を侮っていた。

焼いたり、煮たり、適当に混ぜたりしたものを今の今まで料理だなどと思ひ込んでいた。

とんでもない事だ。

これは料理に対する侮辱に等しい、何たる愚かしさか。かつて自分へ、自信満々に味も素っ気もない料理（○）を振舞ってきた騎士達を叱りつけてやりたい。

特に「日中は3倍美味しいですよ」とか馬鹿な事を言っていた騎士はブン殴りたい衝動に駆られていた。

（こんなにも料理が心を暖かくしてくれるとは知りませんでしたーローシロウ、あなたが私のシェフだったのでね）

とまあ、こんな事を2・3分に1回ぐらいのペースで考えながらセイバーはもう2時間ほど食べ続けていた。

その間も士郎は作り続けており、今はイリヤが補助に根を上げた（もともと士郎1人の方が早い）ので1人切りだ。

実を言えばセイバー、けっこうお腹は満たされていたりする。満腹でない辺りは御愛嬌。

適当なところでご馳走様でしたと言うつもりだったというのに、ついつい美味しさに釣られ箸を止める事が出来なかった。

ご飯が足りないと思うと勝手にお代わりをしてしまう。

その間もあれよあれよと積み上がる皿、供給され続ける料理。

幾ら何でも多過ぎると考え出したセイバーに、ある閃きが生まれた。

これは所謂、満漢全席なのでは？

そんな、間違った直感が。

聖杯はサーヴァントが現代に問題なく順応出来るようにある程度の知識を召喚時に与える。

言語や風習、様々な神話や英雄に関する基礎知識。

それらの中に混じって偶に「よりにもよって何でこれ？」という感じの無駄知識を、時に正確に、時に不確かに与えてしまう事が間々ある。

今回セイバーの脳内で起きた突飛な解釈は以下の通りである。

大量の料理が並んでいる↓こういうスタイルあったような……↓

満漢全席↓それだ↓私の直感に間違いは無い（キリッ

とても正気とは思えない発想だったが、それは仕方ない。

セイバーは聖杯の被害者だ。

適当ではなくテキストな知識を植え付ける聖杯が何もかも悪い。

自分が間違っているとは露程も気付かず、セイバーは愚直に箸を進め続ける。

作り続けてくれている士郎へ惜しみない賞賛と感謝の念を抱きながら。

全ての料理を食べる事こそが、何よりも士郎への感謝の念を示す手段であると思つて。

ひたすら食べ続けた。

ある意味で悲劇の……実際は喜劇の擦れ違いをしている2人の共通点は、互いを尊重しているという事だ。

士郎は美味しく食べ続けてくれているセイバーがもういいと言つてくれるまで。

セイバーは作り続けてくれている士郎に感謝している為。

どちらもお互いの為に鍋を、箸を、動かし続けていた。

「……フム」

そんな2人を静かに見つめる1人の男。

3つめの貸しである “令呪によるサーヴァントの行動抑制” を確かに見届けた凜は、話し合いの為に居間へと向かった3人を尻目に一足早く部屋へと戻り眠った。

ちよつと目を離れた隙に新品の学生服が用意されており、ご丁寧な事だと嘆息。

『あいつらの事しつかり見張つときなさいアーチャー、何かあれば私も直ぐに起きるから。いいわね？ 勝手な事すんじゃないわよ？』

そう言つて直ぐに眠ったマスターからの指示を受けて3人を、特に士郎とセイバーを監視する事に精を出しているアーチャーだった。

イリヤは結構ウロウロと動くが常に魔力を発して現在地を分かり易くしており、監視されている事は承知しているのだろう。

それにしても……まさか深夜に料理大会を行うとは思わず、面食らつてしまった。

聖杯戦争中だと言うのに呑気なものだと思う。

どうやら外に居る連中の中に何人か “こちら側” の者が紛れているようだが、士郎よりはマシとしても凜やイリヤに遠く及ばない技量である事は明白だった。

ならば捨て駒かとも思ったが、赤外線カメラなどが上手く隠されている辺り “対魔術師” 対策の釣り餌である可能性が高い。

(全員魔術使いか。それに外国人、傭兵……とは少し違う、あの雰囲気は殉教者のソレに近い)

例えば死の直前、誰にも手を差し延べられなかった少年が居るとして。

その少年を、いやその周辺に居る者達に救いの手を差し延べた男が居るとする。

その男が世界レベルで災害支援や復興支援などを積極的に行っており、衣服や食べ物に住む家、安定した労働環境を与えられる財力を持っており、惜しみなく与えたのならば。

感謝し、必死に働く事で恩に報いようとする者が殆どだろう。

自分も同じ様な者達に手をさし延べようと励む者も居るだろう。

中には、自分の命に変えても恩返しや彼の家族を護りたいと願う少年も居る筈だろう。

アーチャーが知る由も無い事だが、つまりはそう言う事だった。

(この気配は……)

玄関の方で動きがあった。

特に警戒される事無く衛宮邸に入って来た2つの気配が1つになり……急に消える。

セイバーの方を見るが全く動く様子はない、気付いているのかいないのか分かり難いが恐らくは気付いているだろうと考え、霊体化したまま廊下へと出る。

いつでも実体化して戦闘できるようにしながら複数の “矢” を待機状態にして玄関方面へと向かった。

まさかセイバーが気付いていないなどは全く思わず。

(あの小僧はセイバーが護るだろう、凜は……チツ、何故起きている?)

いや違う、寝ている……分かん)

大方トイレに行った後、普段の家と違う事に気付かず徘徊しているのだろうと当たりを付ける。

凜が向かってくる方向の角で待ち構える事に決めたアーチャー。フラフラと歩いてくる凜へと警戒を促そうとした瞬間、凜の隣に“唐突に”人影が生まれた。

(↑・軽度の認識阻害魔術、視界による看破を容易とした代償に聴覚や嗅覚への耐性を持たせたもの。妙な違和感はコレかーしかし普段の凜なら兎も角、今の凜では看破は不可能)

よほど注意が散漫か、よほど精神的に余裕が無ければ騙せない程度の魔術を施した相手は……しかし何故か凜に何かをするでもなく、逆に怯えながら居間へと向かって行った。

もう少しでアーチャーからの攻撃を受けていた事など気付いていないだろう。

(やはりこの家の関係者だったか……まだ分からんか、警戒は続けるべきだろう)

普段のアーチャーなら即座に斬りつけていただろうが、外の魔術使い達や一般の警備員達が何もせず玄関から通した相手だ。

怪しい行動を取ったとはいえ、凜に何もしなかった為に見逃した。

セイバーの居る居間へと向かった事もある。

凜から見張れとは言われたが助けるとは言われていない、自分達で何とかしろと心中で呟く。

「おい、凜」

「あー……………」

「凜！」

「……………うー……………」

「……………はあ」

これは話にならないと察したアーチャーは後ろから背中と膝を支点に抱き抱え、部屋へと向かった。

いわゆるお姫様抱っこの状態で運ばれた事など気付きもしない凜は、夢うつつ。

契約の繋がりがらくる安心感に身を任せ完全に夢の中へと戻って行った。

「やれやれ、朝では無いというにーーそんなにも気疲れする事だったのかね？」

イリヤとの交渉に際し、不必要ではと思えるぐらい神経を張り詰めていた事を思い出しながら布団をしつかりと掛けて部屋を後にする。

結界の上に更に初歩的な結界を構築し、その要として「一振りの剣」を据える。

その最中に、妙な魔力を庭の方から感じた。

(この魔力の高まりはイリヤか、彼女に何かあった……?)

念の為に別の「剣」を入口に飾る。

これならば方が一敵襲があっても、自分が来るまでの時間稼ぎになるだろうと納得して勢い良く隣家の屋根へと跳躍した。

「……なるほど、間桐か」

衛宮邸の庭に、先ほど見た気配ではなくもう一つあった気配の主とイリヤが居る事を「鷹の目」で捉える。

何もない空間から瞬時に弓と矢を「造り」出し、引き絞り狙いを定めた。

必要とあらば衛宮邸を吹き飛ばしてでも、あの少女に傷は付けさせないと心に誓いながら。

「I am the bone of my sword..」

静かに魔力を高め獲物を見定める。

暫くそのままの体勢で眺めていたが、およそ5分ほど後、気配のあった場所に居た蟲が突如として現れた針金で潰され消滅した。

「見事な物だと舌を巻く。」

少なくともアーチャーにさえ前兆を悟らせなかった一撃を、あの至近距離で回避したとは思えなかった。

「……フウ」

黙って弓と矢を魔力へと還元したアーチャーは霊体へと戻ると、もう一方の気配が居る居間へと向かった。

そこには相も変わらず食事を続けるセイバーと、1人の少女のお陰

で大分余裕が生まれた士郎が和気藹々と料理を作り続けていた。

「桜、それももう少し蒸し焼きにしてから出す。皿を温めておいてくれ。ソースは？」

「はい先輩、ソース出来てます。確認お願いします」

「いや大丈夫、見てた。桜が良いなら心配ない、かけておいてくれ……つと、そろそろ炊けたか」

「茶碗、出しておきました」

「助かる」

和風を中心に構成されていた料理は、今は半数以上を洋風へとシフトしていた。

時々刃幅が微妙に違うナイフや鉄串などを桜から見えない位置で変形・投影している士郎の手は全くと言つていいほど淀みが無い。

基礎がしっかりと身体に染み付いているのが窺える。

（フム、料理は才能よりも経験がモノをいう。包丁を持つ手を見れば料理人のある程度の格は知れる……あの年齢にしては大したモノだ。私が……俺がああの年齢の時は趣味の域を出てはいなかった）

しかしアーチャーから見ると、まだまだ全体的に荒い。

包丁を部位や用途に合わせて常時変形させる発想は買うが、一瞬の刃の変成に伴い切り口に僅かな違いが見られる。

見た目はともかく、舌が肥えた人物ならば味わう時に微妙な違和感を覚えるだろう。

（今のセイバーは、どうやら初めての食事らしいから問題ないが……そうさな、あと1時間もあれば彼女の舌はその違いを見抜くぞ）

投影の完成度、これも年齢からすれば悪くないが良くもない。落第点に近い。

全ての包丁が「投影品」である事を見抜いたアーチャーは、その理由が何度でも新品同様の状態に戻す為であろう事を「解析」した。

（宝具の模倣に比べれば雲泥の差だが……惜しいな、お前の包丁には決定的に「経験」が欠けている）

包丁はただの道具では無い。

料理人の分身の様な物だ。

士郎が本来持っていた本物の包丁は切嗣からのプレゼントだ。だからだろう、研ぐ度に短くなっていたソレを大事にするあまり「常に新品」を士郎は使い続けていた。

(道具を大事にするのは結構だが、1本や2本は使い潰す覚悟が無ければ技術が完璧に身体に馴染む事はあるまいよ。ましてや、包丁に「経験が宿る」事は無い)

投影品の包丁の質は変わらない、いや構造を補強し変更する事で切れ味を良くする事は出来るだろう。

しかしそれは、包丁の質ではなく投影の質を上げているだけに過ぎない。

これが「剣製」であるならば問題視はしなかったが、こと「料理」となると話は別だ。

(……今は良からう。しかしな衛宮士郎、お前の進む先に必ず壁が立ちほだかる。それは俺が経験してきた事とは段違いの壁となり、お前の未来を阻むだろう。

なにせ、俺は殺せば良かった。妥協し、次善策を用意し、ひたすら1を切り捨てて進み続ければ良かった。

だがお前は違う……お前の進むその道は、なまじ英雄になるよりも――)

そこまで考えて頭を振る。

柄にも無く考え過ぎてしまったのは、この世界では召喚された目的が「果たせない」事に気付いてしまったからだろうか……。

それとも、あの少女の幸せそうな笑顔を「また」見る事が出来たからだろうか。

「……さて、敵襲がないか確認してくるか」

わざと声に出すことで気持ちを区切り、屋根の上へ出て実体化する。

土蔵の方に向かって段ボール箱を持って歩くイリヤが見えた、先ほど見えた皿の量から考えれば割って敷き詰めたとするのかなりの重さだ。

で、ある筈なのに「随分と軽々と」持ち歩き、最後には土蔵の奥へ

と放り投げてしまった。

さもありませんと納得し、地平線に近くなった月を見つめ苦笑いを浮かべ小さく呟いた。

——やはり剣以外は、才能が無いらしい

第四話 愛する家族

「行ってらっしゃいませ、宗一郎様」

「……」

「どうされました？」

「いや、行ってくる」

それだけを告げ離れていく男の背中を女は愛おし気に見つめていた。

短い付き合いであるが今の短い言葉を発する前の沈黙、僅かな所作やイントネーションの中に含まれていた優しさをしっかりと見出す。

寡黙な男なりの不器用な優しさ。

遠ざかっていく背中を遠見の魔術で何時までも観察していたい衝動を振り切り、女はこれからの為の準備に邁進する。まあ暫くは遠見を続けるのだが。

魔力供給に問題ないとはいえ無尽蔵な訳ではない。

無駄な魔力を使う事は極力避けて行かなければ、この聖杯戦争を勝ち抜く事は難しい。

(行ってらっしゃい……いい、凄くいいわ)

浮ついた気分で勝てるほど甘い筈はない、何せ今から挑むのは「戦争」なのだから。

7人だけの戦争。

たった7人、されど7人。

万の軍勢をたった1人で打倒し得る常軌を逸した力を持つ英霊^{化物}が7人も集まる殺し合い。

女もまたその英雄の1人である。

だとしても……いや、だからこそ英霊を敵に回す事の恐ろしさを誰よりも理解している。

(新妻……素晴らしい響き、たったの数文字がこんなにも心を揺さぶるなんて)

それでも勝たねばならない。

神に人生を狂わされて続けて来た女の、この状況すらも神の采配だ

と言うのなら――神に感謝すらしても良い程に今の状況は悪くない。

女の「夢」を叶える為の、今回の聖杯戦争の現状は想定していたよりも最悪では無かった。

アーチャー、ランサー。

どちらも対魔力を持つ三騎士であり優れたサーヴァント。

だが、付け入る隙が無い訳ではない。

ライダー。

未だ見ぬ宝具こそ注意が必要だが、マスターがお粗末すぎる。

始末する事も「手駒」とする事も容易。

アサシン。

問題外、せいぜい上手く使い潰すでしょう。

セイバー。

対魔力Aという冗談の様な能力を持つ、女にとって最も厄介な相手。

何とか彼女を手に入れる事が出来れば、この聖杯戦争に王手を掛けられると言っても過言ではないが……それは難しいだろう。

バーサーカー。

未だ現れぬ最後の一騎。

しかし所詮は低ステータスの英霊を狂化によって向上させるだけ
が取り柄のクラス。

理性を失った英霊など、そこらの畜生と大差ない。

危険度は低い。

(手作りお弁当……流石にレベルが高いかしら、料理を作る魔術なんて知らないし……んん、みこーん知恵袋に質問しなきゃ)

女……キャスターは冷静に状況を俯瞰し最善の戦略を構築している。

先ずは何を置いても聖杯の器の確保が先決となる。

既に聖杯の「大体」の仕組みは掴んでいる、入手してしまえば後は詰将棋の様なもの。

もちろん一手足りともミスが許されず、そもそも将棋と違って効果

不明な駒が幾つ隠れているかも分からない非常にリスキーなものが。

そんな事がキャスターの夢を諦める理由にはならない。

その為に自らに課していた禁を破ってまで形振り構わず勝利の為に策を弄したのだ。

(ああ、いけないわ……流石にこれ以上は妄想に浸っていられない。ああ、でも！ もう直ぐ妄想ではなく現実となるのよ、してみせるの！

そう、私は宗一郎様と添い遂げるの……ウエディングドレス、ブーケトス、群がる女どもを見下す私……ふ、うふふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふ)

これから先一秒足りとも無駄には出来ない。

卓越した魔術師であるキャスターの全能力を、その優れた頭脳を以てしても残された時間は余りに少ない。

深く、静かに策謀を巡らせる。

焦る事は無い。

全ての陣営の中で今、聖杯に最も近いのは自分達なのだという確信がキャスターに絶対の自信を与えていた。

キャスターが陣地としている柳洞寺は山頂に存在しており、そこに至るには整地されていない道無き道を登るか果てしなく長い階段を登るかのどちらかしかない。

だが、道を選ぶ事が出来るのは人間だけだ。

階段以外の場所には自然霊以外を排除しようとする強力な結界が存在しており、それは精霊に近い存在であるサーヴァントをしても例外無く干渉される。

「おや」

故に柳洞寺へ他のマスター達が攻め入るには正面から乗り込む必要がある。

キャスターはそこに目を付けて山門に“アサシン”を門番として配置した。

このアサシン、その真名を佐々木小次郎という剣豪――の役割を与えられた無名の亡霊。

詳細は省くが、佐々木小次郎という「存在しない」剣豪の逸話に近い業を振るえるという理由だけで「非正規的」に召喚されたサーヴァントである。

彼が「召喚者」たるキャスターに与えられた役割はただ一つ。

他のサーヴァントの侵入を防ぐ事。

「ふむ……」

そして今、山門に向かってくる存在を見つけて彼は思案する。さて、この場合「令呪」の縛りはどう働くのだろうか……。

太陽が中天に差し掛かる手前。

柳洞寺の奥で神殿の構築に精を出していたキャスターは、結界が強引に破壊された事を知覚する。

酷く乱雑に、引き散ちぎるように行なわれた破壊は――中核を成す魔術式を丁寧に「書き換えた上」で行われており、幾らでも気付かれず破る事が可能であった事を主張していた。

その意図はキャスターに正しく伝わる。

(あらあら)

不躰な訪問の仕方ではあるが、非常に興味をそそられた。現代の魔術師には感知出来まいとさえ考えていた結界を破った存在。

ローブを解除し現代風の装束を着用する。

サーヴァント特有の気配を遮断する魔術を使い一般人に見えるように偽装。

その間も侵入者は堂々とした足取りでキャスターの居る方向へと近付いており、山門の手前で僅かに停滞した後すぐに境内の中まで侵入して来た。

アサシンを破った……それにしては早過ぎる。

過大にも過小にも評価せず能力だけを見るならば、門番としては決して悪く無い筈なのだ。

(アサシンを振り切った……いいえ、違う。あの男の性格を考えるな

ら「見逃した」可能性が高いわね。使えないわ

ギリツと歯を食いしばり、後でどんなお仕置きをしてやろうかと考えながら侵入者の元へ急ぐ。

生意気にも監視の目を全て潰し待ち構えている相手の姿を想像しつつ努めて朗らかな笑顔を装って。

どんな屈強な男かと想像していたキャスターにとって、その侵入者の正体は良い意味で意外だった。

だから張り付けるようにしていた笑顔ではなく、思わず素の笑顔で挨拶していた。

「あら、いらつしやい。可愛らしいお嬢さん」

そこに居たのは、年端も行かぬ見目麗しい少女だった。

第四話 家族

「柳洞寺へようこそ。ご用向きは何でしょうか？」

あくまで一般人を装い話し掛けるキャスターであったが、目の前に居る少女が既に只者では無い事は「知って」いる。

簡易的とはいえ山道の結界を綺麗に潜り抜け容易く書き換える能力。何よりも冬木市全体に張り巡らせていた監視の眼で、遠坂、間桐と同じく。

底を探る事が出来なかった衛宮の少女。

実際に相対してみても改めて理解する、とても優れた魔術師だ。

自分を召喚した三流魔術師とは一線を画する、いや比べる事自体がバカバカしい。

深夜に行われた「セイバーの召喚」も見事な物だった。

神秘の薄れた現代に於いて、奇跡の様な存在と言っても過言では無いだろう。

(ふうん……)

キャスターはそれとなく少女の観察を続ける。

腰まで伸びた白銀の髪。

幼さを残しながらも美しく整った顔立ち。

紫を基調としたコートと、その隙間から覗く陶器のごとく白い肌。僅かな所作から感じる育ちの良さ、しかし型式ばった硬さは見せず優美な立ち居振る舞い。

どれもこれもが好みだ。

(……ドレス、可愛らしいドレスが似合うわね。白、いいえ在り来たりかしら。黒、もしくは紫……ええ紫。ぴったりだわ、飾り立ててみたくなるわね)

これはとんでもない逸材が現れたものだと内心で興奮しつつ、冷徹に少女を見極め終えた。

取るに足らない相手である、と。

幾ら優れた魔術師であろうとも、魔術師の英霊たるキャスターには遠く及ばない。

サーヴァントを連れてくるならばともかく、少女はマスターでは無い。

1人ならば全く驚異足り得ない。

「そうね、目で見て確認しに来たのよ……キャスター」

「キャスター？ 何でしょうかそれは、私はここに居候しておりますー」

「そういう駆け引きは結構よ、キャスター。無駄なお喋りに付き合う気は無いわ。私は宣戦布告に来たのよ」

不快さと不穏さを感じさせる視線にげんなりしつつ、イリヤはキツパリとクラス名を断定する。

誤魔化しはしない。

さつさと話を進めようではないかと。

「ーそう、確信しているよね。ええ、そう。私がキャスターよ」身に纏っていた現代風の装束が掻き消え、長いローブを羽織った古式ゆかしい如何にも『魔女』といった風体の装束に包まれる。

同時に濃密な魔力がイリヤの肉体を囲うように放たれた。

もしもこの場に居たのが凡百の魔術師ならば、それだけで戦意を喪

失していたらろう。

只の魔力放出だけで息が詰まりそうになる。

(規格外ね)

現代の魔術師として破格の能力を誇るイリヤをして、そう思う程にキャスターから感じ取れる力は凄まじい。

まだほんの触り程度の力しか見せていないと言うのに、これだ。

成程。

流石は魔術師の英霊。

事前の予想を遥かに超越した絶対的存在。

「後学の為に、なぜ私がキャスターと分かったのか聞かせてもらえるかしら？」

「単なる消去法よ。それよりもキャスター、穂群原学園の結界はあなたの仕業？」

「……死にたいのかしら」

深く事情を知らぬが故のその一言は、キャスターにとって逆鱗にも等しかった。

しかし、その大袈裟な反応の仕方は。

イリヤの中にあつた一欠片の疑心を吹き飛ばすには充分なものだった。

「失礼。単なる確認よ、万が一って事があるじゃない？ あれは宝具の域の代物だけれど、結界としては三流も良いところ。でも良かったわ。もし、あんなお粗末な結界がキャスターの宝具だと言うなら——直ぐにでも貴女を殺していたもの」

「——ッ！」

柳桐寺に満ちていた魔力を押し退けてイリヤの魔力が強烈な殺意と共に放たれる。

それはキャスターが放った殺意や魔力量と比べても遜色なく、その奥に秘められている激情……その意味に無意識に「共感」したキャスターの氣勢は削がれた。

学園に張られた結界と、そこに居る「愛しい人」の姿を一瞬だけ脳裏に浮かべて。

「……どうやって此処に？ アサシンを倒したという訳では無いようだけれど」

「どうやっても何も、普通に通してくれたわ。面白いサーヴァントね、呆気なく真名を教えてくれたわ」

思い出しながら語るイリヤ顔に浮かんでいた表情は、敵陣のサーヴァントと相対した人間にしては酷く楽観的で好意に満ちていた。

それに対しキャスターの方は苦虫を潰した様な、酷く苛立たい表情を顔にし件のサーヴァントに対し内心で罵倒を続ける。

「門番さえロクにこなせないのかしら、あの男は……」

「そうね、あなたには分不相応な男前だと思うわよ。あんな『変則的な召喚をしたにしては、結構な当たりを引いたようねキャスター』
気付かれた。

確かにアサシンの存在は歪であるが、それを初対面で見破り……それがキャスターの『ルール違反』である事に気付く洞察力は異常だ。

目の前に居る少女を、この時キャスターは初めてしっかりと認識したのかも知れない。

「……謝罪するわお嬢さん。貴女を侮っていた、どうして気付いたの？」

「そんなもの直接『見れば』分かるわ。でも、アレが貴女の策だと言うのなら……あら、意外と大した事が無いのかしら？」

くすりと笑う少女の姿が唐突にブレて消失する。

驚く間もなく次にキャスターが少女を知覚した場所は……。

「だつてこんなにも隙だらけなんだもの」

背後に、居た。

瞬時にその存在を捉えたとはいえ、完全に隙を見せてしまった事を悟りキャスターの背筋を悪寒が駆け抜ける。

『……！』

それまで想定していた危険度を一気に最上級のモノへと引き上げ、振り返る事無く防御魔術を展開し上空へと短距離転移。

直ぐに複数の光弾を生み出して待機させる、その量は莫大でイリヤ

の視界が埋め尽くされる程だ。

「1つ1つが大魔術級の威力を持つソレをたつた一言『何事か』を
呟いただけでキャスターは作り出した。」

一般的な魔術師ならば、彼我の絶望的なまでの実力差にもはや思考
すらままならぬ恐怖を感じる光景を目の当たりにして――しかし
イリヤは、臆することなく尚も笑っていた。

「凄いわね、飛翔と空間転移……加えてこれだけの短時間でそれ程の
大魔術を複数構成する能力。」

訂正するわキャスター、あなたやつぱり大した魔術師ね」

「……」

返答の代わりとして、光弾が閃光となってイリヤへと降り注ぐ。

尋常ならざる破壊力を秘めた閃光は、大地に突き刺さると数mもの
大穴を穿ち大量の土砂を巻き上げる。

直撃は当然として掠っただけでも人を容易く屠る一撃が雨あられ
となって柳桐寺の境内を破壊していった。

一般的な魔術師とは隔絶した力量を誇るイリヤを、しかしキャス
ターは容易く上回っている。

それだけではない。

魔術師としての力量、経験、場数。

比べれば比べる程に両者の実力差は顕著なものであり、それはイリ
ヤとキャスターの共通認識でもあった。

「ほらほら。こっちよ、キャスター」

「くっ！」

にも関わらずキャスターが放つ魔術はイリヤを捉え切れず、それだ
けでなく幾つかを相殺すらしていた。

その数はキャスターの放つ光弾と比べるべくも無いが、そんな事は
当然だ。

現代の魔術師が、いや例え魔法使いであろうともキャスターに魔術
戦で勝てる者は存在しない。

そんなキャスターを相手にして僅かな時間とはいえ拮抗している
現状がどれだけ異常であり、特別な事か。

何の苦勞や代償も無く成し得る事では無い。

対面しているキャスターは直ぐに何をしているかを理解したが、然しものキャスターをしてイリヤの行っている「ソレ」は常軌を逸していた。

「……随分と器用な真似をするのね今時の魔術師という者は。普通なら繰り返して肉体がボロボロになってもおかしくないと言うのに、貴女は不完全ながら「無効化」している。

お嬢さん。貴女こそ大した魔術師よ」

いつの間にか荒地と化した境内、その中央で僅かに口元に血を滲ませたイリヤはコート裾でそれを拭いつつ上空へと勢い良く脱ぎ捨てた。

使用した魔術の反動を「かつての使用者」とは次元違いの領域で抑えられる彼女であったが、久方ぶりの使用である事、敵が格上である事、セイバー召喚に魔力を割き過ぎた事……幾つもの要素が重なり完全とはいかなかった。

「……お褒めに預かり光栄だわキャスター。けれど一つだけ、重要な部分を間違えているわ」

脱ぎ捨てられたコートは風に流される事なく、キャスターの視線からイリヤを遮る様に真っ直ぐ落ちてきて……地面に落ちた頃にはイリヤの姿は消えていた。

同時にキャスターの頭部目掛けて飛翔する「何か」が防御陣に阻まれ地面へと転がる。

「間違い？ あら、それは何かしら」

地面へと転がった「何か」の正体をキャスターは直ぐに理解する事が出来なかった。

初見の魔術であろうとも、如何に上手く隠蔽されていようともキャスターに見抜けない魔術は存在しない。

それが魔法であろうとも目の当たりにすれば概要を把握する事すら可能な彼女が、だ。

しかしキャスターは知らなくとも、彼女の「知識」はその正体を知っていた。

魔術とは対極の道を行く存在。

未来へと突き進む力。

科学の兵器。

「私は魔術師じゃないわ」

イリヤがその両手に持っている物の正体をキャスターは遅まきながら理解する。

彼女の生きた時代には存在しなかった、現在最もポピュラーで有り触れた携行型の殺傷兵器。

拳銃。

1つは連射力に優れた白銀の拳銃。

手に馴染む様な大きさと、片手での装填を可能とした特殊機構。

イリヤが自身の為に作った特注品だ。

しかしもう1つは、少女が持つには些か無骨であり、高威力な弾丸を放てるが実戦で使用するには不向きな単発式の古びた大型拳銃。

それでも敢えて使う理由は、愛着が有るからだろう。

「そう、貴女は……」

大型拳銃の中折れした部位から薬莖を捨て、新しい弾薬を装填する。一連の動作は1秒も掛からず行われ非常に洗練されており、使い慣れている事を思わせる。

「“魔術使い”よキャスター。古臭いカビの生えた如何にもな“魔女”の貴方に私が直々に教えてあげる、今時の戦い方ってものをね」

軽装になった事で肌の露出が増え、全身に線のように浮かび上がる魔術回路が顕となる。

その総量にさしものキャスターも目を丸くさせ、同時にイリヤがどういった存在であるかを遅巻きながら見抜いた。

「……ふふっ、いいわ。貴女に魔術の深奥を見せてあげる、そして反省しなさい。私を魔女と呼んだ事を！」

羽を広げるようにローブをはためかせキャスターは新たに魔術を構築する。

本気では無いが、手加減は一切しない。

ゆつたりと力の差を見せ付けて、心をくじいてから手駒の1つとし

て活用しよう。

迫り来るキャスターの猛攻を不敵な笑顔で見つめながら「刻印」へと魔力を回し、体内時間を加速させる。

受け継いだ部位と時計塔から無理やり奪った部位、加えて聖杯として調整されてきた魔術回路を連動させ1つの大魔術を発動させた。

（さっさとしなさいよね、リン！ 出来れば「これ」は使いたくないんだから）

勝つ必要は無い、いや勝てる筈も無い。

元よりこれは単なる時間稼ぎに過ぎないのだから。

早朝。

朝特有の清廉な空気を、安っぽい原チャリのエンジン音と調子の外れた鼻歌で台無しにしつつ全開で飛ばしながら衛宮邸に向かっていく人影があった。

書類上はホモサピエンスの雌であるが、明らかにそれは間違いであり、その実態は世にも珍しい二足歩行する虎に違いない。

多分。

名を藤村大河と言った。

「ごっはんーごっはんー♪ 士郎のごっはんーが食ーべれーるぞー♪」

見た目は美人である。

スタイルも良い。

教養もある。

スポーツ万能にして剣道の達人。

穂村原学園の生徒に慕われる（尊敬とは言っていない）教師NO.1と言っても過言では無い。

これだけの優れた要素を持ちながら浮ついた噂の一つも無く、冬木

の虎という称号で評される彼女は総合的に見ると……残念な女であつた。

凄く凄く、残念な女であつた。

「お疲れ様です!!」

「はいはい、お勤めごころうー!」

「ありがとうございます!!」

衛宮邸の護衛に就いている彼らにとって、大河は元締め的な地位にある。

一糸乱れぬ挨拶をする男達の間を縫って進み、原チャリを預けるとスキップしながら玄関の扉を勢い良く開けた。

うるせーぞ藤村! といった幻聴も一緒にした。

「おつはよーう士郎! イリヤちゃん! 桜ちゃん! 大河お姉さんが来ましたよくん」

乱雑に脱いだ靴を護衛の1人が直している事に全く気付くこと無くドタバタと派手な足音を立てながら居間へと向かう。

グウルルル……。

虎の唸り声の様な空腹音を鳴らしながら、3人で囲んでいるであろう朝食に混ざる為に更にスピードを上げる。

うるせーぞ藤村!

「お腹ぺっこぺこだよ〜ギブミー飯ー!」

ここ数年、士郎の技術向上は目覚ましいものがある。

今日は何を食べられるのだろうか、考えただけで涎が止まらない。

もう士郎の料理以外は口に合わない体になってしまったの(キラツ☆)と、物凄くイラツとくるような事を考えながら居間へと辿り着いた。

うぜーぞ藤村!

「やつほー! 士郎士郎、私のご飯は大盛りで………あるえー?」

『おはよう藤ねえ、すぐ用意するから落ち着けて』

『お早うございます藤村先生。先に頂いています』

『朝から煩いわよタイガー』

と、こんな風に返ってくる返事が無く。

それどころか3人とも居間には居らず、あるのはラップが貼られた小さな皿が2つと水筒、その下に挟まれているメモ用紙だけ。

右を見ても左を見ても、ついでに上と下と背後を見ても誰も居ない。

今度は幻聴も聞こえない。

「もーう、お寝坊さんかなー？ 3人ともなんて珍しいわねー……あははー……ヤベーすっげー嫌な予感するんですけどー」

そんな野生の勘がビンビンに危機感を煽ってくる中、他に宛も無いので恐る恐るメモ用紙を拾い上げる。

そこに書かれていた文字を読み上げ、縦読みし、斜め読みし、もう一度普通に読んで「ファツ!？」大河は絶望の淵へと叩き落とされた。

悪い藤ねえ、それしか残ってない。

ごめんな、急にお客様が出来たから用意出来なかった。

でも食費貰ってないんだから仕方ないよな。

あと今日の昼は自分で食べてくれ。

その代わり、夕飯は楽しみにしておいてくれ。

肉だぞ、肉。

追記

皿は洗っておきなさい、じやないとメシ抜きよ

I l l y a s v i e l

「……………いただきますーす」

小さめのおにぎりが2つ（中身は梅とおかか）

肉野菜の炒め物（小盛り、塩分控えめ）

それだけが広いテーブルの上に置かれている小さな皿の中に虚しく存在していた。

あとお茶が入った水筒。

「あ、おいしいー。さっすが士郎わーもう食べ終わっちゃった。やつぱ

食後はお茶よねー、飲み頃だわー。全部飲んじゃったー。

「ごちそーさまでした、よーしこれで今日も一日頑張れる………わ、
け、ぬうわあ………いっ!!!

「フツシャ………! 皿洗うぞゴルアア………!」

衛宮邸から虎の咆哮が御近所へと響き渡った。

その勇ましさを感じさせる声はどこか悲しげで、寂しげで……あと
普通にうるさかった。

朝っぱらから迷惑禁止条例違反ものの大音量を垂れ流しやがった
大河だったが、それを聞いた御近所さんの感想は「あらあら大河ちや
んは今日も元気ねえ」とか「うるせーぞ藤村!」とか「危ねえ、タイ
ガーの声が聴こえなかつたら遅刻してた!」など、概ね好意的なもの
ばかりであり、緩やかに日常へと戻っていった。

普段から迷惑を掛けつつも愛される大河の一面が良い方向に働い
た結果である。

「いやー素敵ですね。」

「ガルルルル、どうよイリヤちゃん! このピッカピカのお皿はー!
ふっふーん、私だってお皿ぐらい洗えるんだゾ♪ だから私にお肉
プリー………ズ! 行ってきまーす!! って誰もいなーい!! う
わ………!!」

半端に食べた事で余計に空腹感が増した大河は、ギャーギャーと吠
えながら割と丁寧皿を磨いてから衛宮邸を飛び出し、原チャリに跨
ると学校へ………は行かずコンビニへと走り去って行った。

因みに余談ではあるが。

護衛の者達はセイバーに料理を作っている際に差入れを貰ってお
り、お客様である凜やキチンと食費を貰っている桜の分は別に確保さ
れていた。

イリヤは摘み食いをして腹を満たし、士郎は料理の味見で腹を膨ら
ませていた。

つまり。

今日、衛宮邸でしっかりとご飯を食べる事が出来なかったのは大河
だけだったのである。

「あー……藤ねえ行つたみたいだな」

「凄まじい怒りを感じました。タイガとやらには申し訳ない事をしてしまった」

「いや、あれはセイバーの所為じゃなくて……」

「いえシロウ、あれは私の不徳が……」

既にもぬけの殻と思つて衛宮邸を飛び出した大河だったが、実は奥座敷に士郎達は居た。

朝方まで続いた2人の決闘(?)は、食材を切らしてしまった士郎の敗北で終わった。その時になって大河の分の朝食の用意を忘れていた事に気付いた士郎だったが後の祭り。

今更セイバーに食べるなどとも言えず。

キッチンと食費を貰っている桜にも食べるなど言えず。

勿論お客様である凜の分を削る事は出来ない。

八方塞がりになった士郎にイリヤは悪魔の囁きを行った。

『タイガ食費払ってないんでしょ? ならいいわよ1日ぐらい』

『でもなあ、それは流石に……』

『シロウ! タイガは大人なのよ、働いてるし住む家だってあるしお金だつてあるわ。身内だからって甘やかしちゃダメよ、タイガの為にならないわ』

『そう……かな』

『そうよ(ニヤリ)』

そんなこんなで凶らずも大河へのお仕置き決定となり、それでも何とか集めた材料で最低限の分は確保しおいたのが士郎の精一杯だ。

大河の反応を見るに。作らない方がマシだったのかも知れないが。

それにしても急遽(愉快的擦れ違いで)始まった大食いバトルに辛うじて勝利したセイバー、流石は常勝の王と言つた所か。

そう、こんな流れで明かす様な事では無いのだが……セイバーの正体はアーサー王その人なのである。

しかしアーサー王伝説を知る者ならば不思議に思う事があるだろう、なぜアーサー王が女性なのか?

その理由は、特に大した意味はない。女性である事を隠していたからだ。

尤も、セイバーの容姿はどう穿った見方をしても美少女である。にも関わらず、殆どの者はセイバーが女である事に気付かなかった。

昔の人間は視神経に重大な障害を抱えていた可能性がある。若しくは美醜や男女の見分けの仕方が現代と著しく異なっていたか。

或いはそれだけ蛮族(?)の侵略が凄まじく王様の顔が女顔だと気づく余裕すら無かったか。

「ほら2人とも、余所見していないで聞いていなさい。特に青い奴(ボソツ)」

大河の咆哮に気を取られる2人(主に片方)を叱咤して、イリヤは広げていた冬木市の地図に赤ペンで囲んでいる場所を改めて指差した。

まあイリヤとて2人が驚く気持ちには分からないでも無い。と言うか一番驚いている。

幾ら震源地に近い場所とはいえ、大河の咆哮は結界を容易く突き抜けて響いたのだから。

初めて会った時からずっと大河はイリヤの予想を良くも悪くも超越している。

その意味不明さは、長年生態を観察しているイリヤにすら未だに全く分からない。

何かもう……何だこれ？

冗談半分で考えた『虎のアルティミットワン説』が一番違和感が無い程に、大河は人間として(変な方向に)突き抜けていた。

たぶん固有結界を使える。

聖杯も持つてる。

なんの証拠もなく、そう確信していた。

「リンが戻って来たら二手に別れるわよ。私とリンで大聖杯の調子を確認して、壊せたらその場で壊す。その間シロウは『ソレ』と学園に行って普通に過ごしていいわ。学園の結界は手を出さないで、今なら大した影響もないし下手な事をして刺激したくないから。」

何か問題があったら連絡しなさい、いいわね？ 何か質問ある？

「……………無・い・わ・ね、はい解散。行ってらっしゃいシロウ♪」
おずおずと手を挙げたセイバーに対し露骨に顔を顰めつつ無視したイリヤは一方的に話を打ち切った。

そんな態度を取られる事に身に覚えがあるセイバーは無理に問い質そうとはせず、しゅんとしながら士郎に促され立ち上がる。

玄関に向かって歩いていく2人の背中（の片方）を苛立たし気に見つめつつ、イリヤも立ち上がる。

昨夜よりも格段に近い距離感で会話する2人（片方）の空気が気に入らない。

（随分と仲良くなってまあ…………ウチの食材を切らすまで食べる卑しきと言ひ、卒なく制服を着こなすスタイルと言ひ。ほんつと嫌味なサーヴァントね）

今のセイバーは穂群原学園の制服を着用していた、勿論何故かサイズはピツタリである。

エミヤグループが一晩で用意してくれました。

セイバーに対して嫌悪感を持っているイリヤをして、彼女の制服姿は非常に似合っており、それが腹立たしい。非常に腹立たしい、超ムカツク。

士郎の進級時にこっそり自分用を作って着たイリヤの姿は、自分で見てもコスプレ姿同然だったと言うのに。

胸のサイズこそ大差ないが、身長やスタイルに於いて2人には埋めようの無い差が存在していた。

（ふんっ、でも幾ら若く見えても実年齢は私より遥かに上。西暦で数えればざつと千歳以上のババア。

何よりサクラの胸に比べれば貴女の胸なんて板…………いいえ窪み、大穴なのよ、クレーター！

ククク、生憎だったわねセイバー。貴女のその将来性の無いブラツクホールでは、未だに私以上のペースで胸が育っているサクラには及ばない…………！

貴女なんかシロウは渡さないわ、大切な弟の結婚相手を決めるの

は私よ！ このイリヤスフィールなのよ!! ククク、クフフフフフ、アハハハハハハツー！)

切嗣やアリスフィールを護れなかった(そう切嗣から教わった)セイバーに対する苦い思いと、士郎に擦り寄る泥棒猫(イリヤにはそう見える)に対する姑的な思いと、様々な劣等感が入り交じって……端的に言ってイリヤは少しばかり錯乱気味な状態だった。

聖杯戦争を早期終結させる事を第一に考えて行動している事に変わりはない。

だが、その理由が『士郎に纏わり付く悪い虫を払い落とす』事にシフトし始めている事に本人は気付いていない。

「んじや行ってくるぞイリヤー」

「フク、ククク、クフフフフフ……」

「あー……早く戻ってきてくれよ。んじや行こうかセイバー」

不気味に笑い続けるイリヤを置いてスタスタと学園へ向かう士郎を、慌てて追い掛けるセイバー。

しかし最後に見たイリヤの奇怪な様子が気になってしまい、玄関を通り過ぎ衛宮邸が見えなくなってもチラチラと後ろを振り返っては士郎の横顔を窺う様な仕草をして、また後ろを振り返る。

……そんな一連の動作を幾度も繰り返し続けていた。

普段の彼女らしくもない優柔不断な姿だが、しかしセイバーをよく知らない士郎には奇異に映らず気を利かせて話し掛ける甲斐性は無い。

と言うよりもだ。

美少女と一緒に学園へと向かっている事に気恥ずかしさを感じている士郎に、セイバーからの視線に気づく余裕は欠片も無かった。

「くしゅんっ！ ……なんだろう、変なの」

先に学園に行かされた桜は唐突にクシヤマをしたあと、妙な胸騒ぎを覚えた。

具体的に言えば、自分ではドキドキしてくれないのかという胸騒ぎを。

「……良かったのですかシロウ、その、イリヤスフィールを放つておいて」

「ん？ ああ大丈夫だよ、暫くしたら元に戻る」

ようやく切り出した質問に、随分とあっさりした答えが返されセイバーは面食らう。

あの、誤解を恐れずに言えば……どう見ても精神的におかしな状態の人間が“大丈夫”などは。

（他人の私よりもシロウの方が彼女をよく知っているのでしょうか……いえ、どう見ても“アレ”は人間として大丈夫な状態ではない！）

「しかしですねシロウ、あれは……例えば蛮族に村を滅ぼされ家族や友人を目の前で失って精神的に追い詰められ心を病んでしまった人間の様な、そんな虚ろな状態に思えるのですが？」

「い、いやに具体的に嫌な例えだな。」

大丈夫だつて。イリヤは今、ちよつとだけ遠くて近い世界に旅立ってるだけだから……うん、その、稀によく有るんだ」

妄想家のイリヤは、時々あんな状態に陥る。

前にあんな状態になった時は何が原因だったかと考える土郎の脳裏に過ぎつたのは……涙目になりながら下着姿で逃げ回る桜と、鼻息を荒らげながら喜々としてメイド服を持ち追い回すイリヤの姿……だった。

（あ、これ思い出したらダメなやつだ）

頭を振り、記憶の隅に眠っていた惨劇から意識を逸らす。せつかく忘れていたというのに、頬に赤みが増すのを抑えられない。

人は日々、幾つもの記憶を忘れて生きていく。

楽しかった日々を思い出せなくなる事は悲しい事だが、忘れる事は何も悲しい事ばかりでは無いのだ。

忘れる事で人は、救われる事もある。

『あ、やめ、ダメですイリヤさあん!!』

『ファイひひひふえふえ、うるさーい！ さっさと着替えて跪きなさい！ めいどー！ メイドー!』

『た、助けてくださいせんぱい！ せんぱあー、きやああ!』
よし、忘れた。

何やら幻聴や幻視が収まらないが多分気の所為だろう。
最近のニワトリの発声は複雑だなーと目を細める。

「……それは大丈夫と言わないのでは?」

そんな現実逃避は、そのセイバーの一言で呆気なく現実に引き戻され終わった。

「………大丈夫だよ」

とても長い沈黙。

絞り出す様にそう答えた士郎の表情は、まるで尊い答えを得た人間のような澄み切った笑顔だった。

それはもう、語尾に「ああ、安心した」と付いて眠るように亡くなってしまいそうな程に。

「……すみませんでした」

何となく気持ちを察したセイバーは、士郎の笑顔を正視する事に耐え切れず顔を逸らす。

そのまま気まずい沈黙の中2人は歩き続けた。

その姿は多くの者達に見られ、恋人説、愛人説、ハニートラップ説などで穂群原学園の今日の話題を席卷した。

「待たせたわね衛宮さん。さあ、柳洞寺に行きましようか」

「待ったわリン。さ、乗りなさい」

「……歩いていきませんか?」

士郎の予想通り短時間で復帰したイリヤは澄ました顔で凜を待ち構えていた。

よってイリヤの醜態に気づく事なく合流した凜は、いよいよ大聖杯が安置されている円蔵山は柳洞寺の中腹へと向かう事となる。

そこでの調査結果次第ではあるが、場合によっては大聖杯の物理的解体も視野に入れねばならない。

……その前に、無事辿り着けたらの話だが。

凜の前には昨日とは別のベンツが鎮座しており、その車体の色は真紅に染め上げられていた。

色自体は割と好みであるのだが、昨夜の事が脳裏を過ぎり一瞬でトラウマを呼び起こす。

とても好きにはなれそうにない。

無理だ。

あんな物に乗れば遠坂凜は、死ぬ。

少なくとも只でさえ精神的に弱っている今よりも、更に悪化してしまおう。

そうだ、第一魔術師ともあろうものが科学の力に頼ること自体がおかしいのだ。

絶対そうだ。

「なんで？ 何が起こるか分からない以上、体力の消耗は控えるべきよ」

「体力の前に、私の精神が磨り減るつてのよッ！……お願いだから歩きましょう衛宮さん。この宝石も返しますから、お願いだから歩いて行きましょうよ。何ならおぶって行きますから」

「?? まあ仕方ないわね、聖杯戦争中はリンに従う契約だもの。あと、宝石は結構だし余計な気遣いも結構よ」

ガツカリした表情を隠しもせずベンツから降りたイリヤは、ホッと一息つき隠れてグツと手に力を込めた凜に気付く事は無かった。

そのまま脇に控えていた護衛に鍵を投げ渡し、ついて来なくて良いと厳命し柳洞寺に向かい始める。

その後ろを黙して追隨する凜は、柳洞寺に着く前だというのに既に激戦をくぐり抜けて命からがら生還した兵士のような達成感と疲労感を肩に感じていた。

プライドを投げ捨ててまで車を拒否した価値があるというもの、何だか空気が普段より美味しい気もする。

(はあ、助かった)

(……………)

(なによアーチャー、言いたい事があるなら言いなさいよ?! ああん!?)

(いや……失礼、気に触ったのなら謝罪しよう)

皮肉屋の気があるアーチャーとしては、こうした時にはからかい倒したくなるものだが……流石に自重する。

どうやら凜とイリヤ、この2人の関係はよほど相性が悪いか逆に良すぎるらしい。

朝にはすっかり回復していた凜の精神的余裕が、たった一台の車を目にただけで急転直下の勢いでダダ下がっている。

遠坂の家訓からは程遠い、優雅さの欠片も見られない有り様だ。

そんなマスターに鞭打つ様な真似は出来なかった。

その後は特に会話する事は無かった。

同盟関係とはいえ、別に仲良くなった訳でも何でもない。契約を結び、互いにその履行の為に足並みを揃えているに過ぎないのだから。

別に、車を目にして気分が悪いから口を開くのも億劫だった訳では無い。

呼吸を整え精神を落ち着ける。

何とか気分を持ち直した凜は今日何度目か分からない“切り札”の確認をしながら、ようやく柳洞寺へと続く階段まで近付いた事に気付く。

大聖杯の確認なんて勿論初めてする作業となるので大急ぎで文献やら何やらを読み漁ったのだが、肝心な事は何一つ書かれておらず嘆息するしか無かった。

(……) とういう時にお父様が亡くなられた事が遠坂にとってどれだけ大きい損失だったかを思い知るわね。私の知らない遠坂の秘伝がどれだけ有った事か……仮にも後見人だった癖にアイツはあんまりこういう事には役に立たなかつたし……)

(凜、止まれ)

「! 衛宮さん、此処で止まって」

肝心なモノが見付からなかった事への苛立ちが身近な人物への愚

痴へとズレて思考が浮ついていた凜に、索敵を任せていたアーチャーからの警告はその全てを振り払い現実へと戻すには充分だった。

直ぐに立ち止まり、宝石を指に挟んで戦闘態勢に移行する。

急に鋭さを増した凜の雰囲気を感じ、イリヤもまた全身の魔術回路の“半分程”を励起させた。

実体化したアーチャーは屋根の上から周囲を隈なく見渡し、じつくりと観察し終えてから凜の傍らに降り立つ。

未だ双剣を構えていない事とパス越しに感じる落ち着いた気配から、凜は幾らか警戒を緩める。

少なくとも先日のように、気付かれず背後を取られた訳では無いらしい。

いきなり襲撃される最悪の展開は回避したが、逸早く状況を把握する必要がある。

その為には多角的な視点からの意見が望ましい。

(凜、どうやらアーチャー)

(待ってアーチャー、衛宮さんにも聞かせて)

(ふむ、いいのかね?)

(いいわ)

衛宮イリヤスフィールに負けたくない、頼りたくないと思う気持ちはある。

その下らないプライドを抑え込む。

見栄や矜持は大事だが、そればかりに傾倒しない柔軟さが凜の美德の一つだ。

「状況説明！」

「……どうやら山門にサーヴァントが居る様だ、マスターらしき人影は見当たらん。此方に気付いてはいない。我々の先回りをしていると言うよりは、あそこを根城にしている可能性が高いだろう。どうする？」

「……衛宮さん、貴女はどう思う？」

柳洞寺のある円蔵山は冬木で最も優れた霊地である。

そこに拠点を構える事のメリットは魔術師にもサーヴァントにも

多大な物がある。

同時にデメリットも少なからずある。が、今問題なのはそこではない。

「……素直に考えるならキャスターかしら、でもキャスターが人目に付く様な場所に居るなんて考え辛い。アサシンは問題外。ランサーとは違うんでしょ、ならライダー……って事になるのかしら？」

「概ね同意よ。一応訊いておくけど貴女の畏じゃないわよね？」

「リン。答えの分かっている質問をするより、有意義な意見を出したらどうかしら？」

「……そうね、ごめんなさい」

自己強制証明を結んだ以上イリヤが凜を害する事は考え辛いし、そもそも畏に掛けるならこのタイミングは微妙過ぎる。悪手に近い。

そう頭では理解していてもイリヤに対する警戒を怠らない凜と、その心中を察し辟易しているイリヤ。

2人は同時に、小さく溜息を吐いた。

それを目敏く見ていたアーチャーは（やはりこの2人の相性は悪くないようだ）と思うのだが、思うだけで口に出したりはしない。

イリヤはともかく、そんな事を指摘したら凜からガンドが飛んでくるだろう。

ムカついたなら相手が誰であろうとも、それがサーヴァントですらも喧嘩を吹っかける豪儀さも凜の美德の一つだ。

喧嘩っ早いわけでは無い。

「……訂正するわ、キャスターで確定よ」

警戒しつつ、階段の傍まで近付いたイリヤは唐突に……しかし確信を持って断定した。

訝しむ凜の視線を気に止めず、そのまま眼を瞑り目の前の空間に手を翳す。

僅かな間を置いて浮かび上がったのは、高度に隠蔽されていた「結界」に干渉し目に見える様に「改竄」された結界だった。

その結界に全く気付けなかった事に凜は驚愕しつつ、視覚化された結界の構造を解析し……再び驚愕した。

(なんて複雑で綺麗な結界なのよ。校舎の結界と比べても遜色ない高度な神秘で構成されている癖に、これは「魔術式のみ」で構築される……私じゃ侵入するまで気付けない、それを……ッ！)

侵入者を術者に知らせる基礎的な結界。

それを一般的な魔術師のレベルを遥かに超越した術式で構築している矛盾。

それは宝具級の結界に比べ見劣りするどころか凌駕していた。

凜ですら事前に見破れない程に優れたこの結界。

そこらの魔術師ならば気付きもしないだろう。

しかも用途を考えれば、これは「特別な」結界では無い初歩的な結界なのだろう……あくまでその術者の能力的には、の話だが。

成程、これだけの結界を張れるなら現代の魔術師の可能性は限りなく低くなる。そして聖杯戦争が行われている冬木市の中で術者の可能性が高いのは誰かと言われれば……十中八九、キャスターに相違ない。

よしんばキャスターでないとしても、優れた魔術を扱うサーヴァントである事には変わりはない。

これは同時に、この結界を見破り干渉して見せたイリヤの魔術師としての能力の高さを際立たせている。

凜は無意識に唇を噛む。

まだ見ぬ謎の存在への警戒心よりも、隣に居るライバルとの差に対する焦りを感じて。

「よく気付けたものね衛宮さん、流石だわ」

「そうでもないわ」

「謙遜も過ぎれば嫌味よ?」

「いいえ、違う。結界に関しては「身近」でよく知ってるからからだし、それに……うん何でもないわ。よし、無効化した。これで正面から侵入しなければ悟られる事は無いけれど……」

イリヤは振り返り、アーチャーを見る。

目と目が合うと、その鷹の目を思わせる鋭い眼差しがほんの少しだけ優しげに揺らぎ……それを気付かせる暇もなく首を振った。

伝えたい事を瞬時に汲み取ったアーチャーにイリヤは素直に感心する。

とても出来たサーヴァントだ。

流石は凜が召喚しただけはあると関心しつつ、もう一度アーチャーを見た。

(アレとアーチャーしか知らないからかも知れないけれど、やっぱり素敵ね。うん、私のサーヴァントに欲しいぐらい)

出会った時から妙にアーチャーの事が気になる自分の感情を、セイバーの他に比較する対象がないからだと冷静に分析するも……しつくりこない。

まるで答えを知っている筈なのに、思い出せない様なもどかしさ。

聖杯としての機能を十全に残していれば、もしかしたら分かったのだろうかと考え……詮無い事だと振り払う。

今はそんな事を考えている場合でも、余裕も無い。

瞬時に思考を切り替える。

大聖杯を破壊する為に行動する以上サーヴァントが妨害してくる事は織り込み済みだ。幾つか手段も浮かんだ、問題はこの場でどの手段を取るかだが……

「私達はともかく、アーチャーは正面から入らなければ弱体化は免れない。敵サーヴァントが存在する場所でそんな愚行は犯せない、けれど正面から行けば気付かれる。サーヴァントを連れずに敵の領域を歩くなんてバカな真似も出来ないし……面倒ね、いっそ正面から行って戦おうかしら？」

凜も同じ結論に至っていたようだ。

その上で戦う事を視野に入れるところが実に彼女らしく、好ましい。だから魔術師とはいえ、凜の事が嫌いになれない。

惜しむらくは胸が控え目な事かと、胸部に視線を送り哀しげに逸らした。

そうイリヤが考えた時に凜は謎の苛立ちを覚えたが、これは恐らく戦闘前の気の昂りだろうと考え納得した。

今から挑むのは、キャスターの領域なのだから。

魔術師の工房。

その中では、格下が格上に勝利する事も不可能では無い程の圧倒的アドバンテージを得る事が出来る。

キャスターのクラスは、その工房よりも上位の神殿を構築する事が可能となる。

その中に飛び込む事は無謀を通り過ぎて、もはや自殺行為に等しい。

更に一級の霊地である柳洞寺を拠点とする事で莫大なマナを手中に収めており、且つ歴史に名を残す程の優れた魔術を行使する英霊とくれば……もはや現代の魔術師では比較対象にもならない。

「賛成だ凜。聖杯戦争を続けるにしても終わらせるにしても障害と成り得る相手だ。此処で後顧の憂いを断っておくのは理に適っている。

それにこの距離は……弓兵の領域だ」

山門で呑気に佇んでいるサーヴァントの姿を、アーチャーは逃す事なく捉え続けている。

現在地から山門までの道は開けており、この距離ならば弓の英霊たるアーチャーが外す道理は無い。

無論、回避する暇など与えるつもりはないが。

左右はサーヴァントの存在を許さない結界で囲まれている、万が一山中に逃げ込んだとしても弱体化は避けられず、そんな状態であればアーチャーは確実に射抜く事が可能だ。

「……だが、それは早計かも知れん」

「どういう事アーチャー？」

「簡単な話だ、凜。奴がキャスターであるならば、これは罠の可能性が高い。そして奴がキャスターでなければ、この状況は余計に質が悪い」

アーチャーの言わんとする事を、2人はほぼ同時に理解する。

キャスターは策謀を巡らせてなんぼのサーヴァントだ、神殿を構築したとしても他のサーヴァントを相手にするには些か力不足。

普通の人間なら到底不可能な事を成し遂げてきた英霊ならば、力業でキャスターを圧倒する者も居るだろう。そして正面から戦うには

キャスターはアサシン以上に向いておらず、故に表に出ず暗躍する事がキャスターのスタンダードと言ってもいい。

そんなキャスターが堂々と姿を表しているならば、それはもう『罫を張っています』と宣言しているのと同じだ。

そしてそれは。

山門に居るサーヴァントがキャスターではなく、別のサーヴァントである場合に、少し違った意味合いを持つ事になる。

「私達の様に同盟を組んでいる可能性ね？」

「その通りだ、イリヤスフィール」

そう、仮にこの結界をキャスターの仕業であると仮定しても……それは山門のサーヴァントがキャスターである証拠にはならない。

最終的に聖杯を手にする事が出来る陣営は1つだが、だからと言って手を組む者達が居ないとも限らない。

目的が違うとはいえ現在アーチャー陣営とセイバー陣営は同盟関係にある、ならば他の陣営が手を組んでいる可能性は0では無い。

「……キャスタークラスに選ばれる程の魔術師ならば、他のマスターを手中に収めている可能性も……いいえ、これ以上はやめましょう。」

憶測ばかりで確かな事は何一つ分からないだし……どうします衛宮さん？」

「……………」

色々な可能性が考えられる以上、今現在取るべき行動は単純に考えるなら2つだけだ。

行くか、行かないか。

大聖杯を確認しに行くならば気付かれる事は覚悟の上で望むべきである。その場合、主な戦力となるのはアーチャー1人で、相手同盟を組んでいるならば最良でも2対1、悪ければ最大4対1の構図となる。

しかし1度戻って士郎達を……セイバーを連れてくれば話はガラリと変わる。

セイバーの対魔力Aならば、ありとあらゆる魔術を防ぐ事が可能と

なる。

それは勿論キャスターが相手でも例外では無い。

(そうね……)

考えるまでも無い。

戻るべきだ。

無理に今挑む意味は無い。

セイバーが居れば。

それだけで勝手が変わる。

キャスターを相手にするならば。

これは当然の選択だろう。

そう。

本当に、考えるまでも無い話だ。

だから……。

「行くわ」

別にセイバーに対する嫌悪感からの判断では無い。

寧ろ使い物になるなら優先的に使って、使い潰してしまった方が気

分的にも上策だ。

ただ一つ問題がある。

それはイリヤにとつて最も回避しなければならぬ問題だ。

士郎が巻き込まれる。

「そう、分かった。私も元よりそのつもりだったもの、行くわよアー

チャー。あなたの力、まだ充分に見せてもらってないわよ」

「耳が痛いな。そうだな、首級の1つぐらい拳げねばと思っていたと

ころだ」

「勘違いしないで、リン」

孫の様に可愛がってくれる雷画。

姉貴分を自称してくる騒がしい大河。

衛宮の嫁として目を掛けている桜。

何かと必死に競ってくる凜。

街を歩けば近所の住人は気軽に声を掛けてくれるし、海外にも知り

合いは居る。

誰も彼もが好きだ。

あの冬の城に閉じ込められていた頃には考えなかった程に、今のイリヤは沢山の交友関係を築いている。

それでも。

イリヤにとつての家族は、もう士郎だけだ。

イリヤの特別は士郎だけ。

依存にも似た愛情を向ける只一人の相手。

未来永劫それは変わらないだろう。

士郎の為ならば命も惜しくない。

「……キヤスターと戦うのは私だけよ」

サーヴァントが傍に居る方が士郎は安全だ、それは家に居ても結界の張られた学園の中でも、何処でも変わらない。

しかし戦場に絶対は無い。

既に1度、士郎は聖杯戦争に巻き込まれている。

そして聖杯戦争の間中は、この冬木全体が戦場と言っても過言では無い。

これ以上は、許容出来ない。

傷だらけの士郎を思い起こす度に「あの日」の絶望が心を凍てつかせる。

「……正気？」

一刻も早く、こんな茶番は終わらせなければならぬ。その為に「封印」を解く事も視野に入れている。

ふと隣の凜に視線を合わせた。

思えば長い仲だ。厳しい視線の中に見え隠れする彼女の生来の不器用な優しさを確かに感じ取り、これならば大丈夫だと改めて判断する。

イリヤの知る誰よりも優秀な魔術師であり、誰よりも魔術師らしくらぬ少女。

彼女ならば大聖杯の状態を目の当たりにすれば此方の言い分に納得して、解体の為に動いてくれるだろう。

それまで保たせれば良い。

5分だろうか？

10分だろうか？

それぐらいなら、例えサーヴァントを相手にしても生き残れる自身はある。

最悪「切り札」を使えば良い。

「ええ。私が囿になるからリン達は大聖杯を確認してきて頂戴。納得出来たら合図を送って、何でもいいわ。そしてアーチャー、恐らく不可能だろうけど壊せたら壊していいわよ。」

じゃあね、任せたわ！」

2人の返答を確認する事なく強化された足で山門への階段を駆け上がる。

その姿が見えなくなる前に、凜は急いで大聖杯の安置してある場所へと向かった。

「なによ……これ」

大聖杯の元へと辿り着いた凜が目にしたのは、嘗て先祖が創り上げた荘厳な大魔術礼装だった。

圧倒されてしまう。

御三家として生まれ、生きてきた凜はある意味で感覚が狂っているところがある。

聖杯は元より、英霊をサーヴァントとして召喚し、その行動を束縛出来る令呪、そのどれもこれも超一級の魔術の結晶だ。

頭ではそのデタラメさを理解していても、何処かしら有って当然の様に感じる部分がある。

「我らを召喚し、この場に留める楔となる大魔術礼装。いや、中々に見物ではあるな」

そんな呑気な感想を呟くアーチャーの声も耳に入る事なく、凜はただただ圧倒されていた。

これが聖杯戦争の根幹を成す物、全ての始まりにして究極の大魔術礼装。

さしもの凜をして、圧倒されるしか無い。

「……………気持ち悪い」

これだけ優美な姿をした大魔術礼装が。

その在り方が“こんな風に”歪んでしまうのかと、凜は人の悪意と
言う物に圧倒され続けていた。

気分が滅入る。

そんな意識とは裏腹に休む事なく動き続けていた身体は、大聖杯の
奥深くに隠れ潜んでいる闇を暴いていった。キモチワルイ。

調べれば調べる程に、清浄さの裏側に存在する醜悪さが垣間見え
る。キモチワルイ

この場にいるだけで、ナニカよくないモノに魂まで毒されてしまい
そうな錯覚。キモチワルイ

「アーチャー、これは……何」

それは質問ではなく、思わず言葉として洩れた凜の本心だった。

此処にある物の正体を、それが指し示す意味を理解しているの
に……理解してはならない事だと暗示をかけるように呟いた心の
鎧だった。

答えは求めていなかった。

「人間だよ」

ハツとして、振り向く。

此方に背中を向けて立っているアーチャーの表情は窺えない。

空耳だったのかと思う程の囁き声。

しかし強い意思を感じさせる張りのある声とも感じた。けれども、
その言葉に込められた思いが凜には理解し切れなくて。

こんな近くに居るのに、果てしなく遠い場所から告げられた様に思
えた。

大きく逞しい背中。

召喚してから今まで変わらないその背中が、どこか物悲しく思えた
のは。

果たして凜の錯覚か。

それとも……。

キヤスターとイリヤの戦闘が始まってから凡そ5分。

神代の魔術を惜し気もなく行使した面制圧により終始圧倒するキヤスターに対し、現代兵器と魔術を巧みに織り交ぜキヤスターの虚を突く事で何とか生き残っているイリヤ。

2人の戦いは最初から変わる事なく、一方的なままだった。

「……Vier……!!」

今もまた眼前にまで迫った大量の光弾を避ける為に“加速”して、避ければ直ぐに反動を消す為の対抗魔術を発動させる。

戦闘開始後に変わったのは魔術のキレをベストに戻した事ぐらいだ。お陰で自分の魔術でダメージを蓄積させるなんて間抜けな事態には陥っていない。

だからと言って何も事態は好転していないが。

(いい加減きついついての! これじゃあ保たない、わよ……ツ!)

互いに決定打は浴びておらず、身体の何処も異常は起こっていない。

それでも追い詰められているのはイリヤの方だ。

卓越した魔術師であるキヤスターは徐々に、確実にイリヤの戦闘法を学習しながら上手に“手心”を加える。

殺さぬ様に。

死なぬ様に。

「もう5分は過ぎたかしら。まだ私に、今時の戦い方つてものを教えてはくれないの? それとも、時の流れから外れる貴女には時間の感覚が分からない?」

キヤスターは“手加減”し続けている。

彼女にとってイリヤという魔術師を相手にするには、片手間とは流石にいかないが……全力には程遠いものだった。

「せっかちな……! 急いで、事を、仕損じるって諺が日本には、あるのよっ!!」

ガリガリと削られていく魔力量は、遂に最大量の半分を切った。

やはり不味い。

このままではジリ貧だが、幸いにも凜の侵入をキヤスターは気付い

ていない。

(でもこれ以上は無理……ツツツ！ バツツツカじゃないの今の、当たったら蒸発するってば！)

勿論キャスターは避けられる事を前提として攻撃を組んでいるが、当たれば一巻の終わりとなる一撃を避けなくてはならないプレッシャーはイリヤの精神を大きく削る。

次第に見えて来た戦いの終わりを見据えて、キャスターは舌なめずりをする。

駒として使う事は確定しているとはいえ、これだけの美少女をただそれだけに使い潰すのは惜しい。

色々と着飾って楽しまなくては損だ。

「さあ、良くやったわよお嬢さん。もうおしまいにしましょうか？ 私も暇じゃないのよ」

キャスターが本格的にイリヤを打ち倒そうと魔術を構築し始めた事を、当のイリヤも気付いた。

恐らくあと1分は保たないだろう。

未だに凜からの合図は無い。

逃げ出すにはタイミングが悪い。

アーチャーの支援なくして撤退は困難だろう。

士郎に令呪による救助を求めれば間違いなく助かるが……それではこうして1人で囷を務めている意味が無い。

(……………あと2発、間に合う？ それより出来る？ ……いいえ、やる。仕方ない。最悪、こんな賭けに出なきゃいけないなんて)

少しばかりキャスターを甘く見過ぎていた。

いや、自分を過大評価し過ぎていた。

体調が万全では無いにも関わらずサーヴァントの足止めをしようなんて大それた事を考えるべきでは無かったのだ。

そう、分かっていたが……過ぎた事だ。もはや事此处に至っては手段を選ぶ余裕もない。

「ふっ！」

身動きの取れない上空へと無謀にも飛び出し、必要な地点へと銃撃

する。

そして迫り来る幾つもの大魔術から逃れる為に魔力を暴発させ、勢い良く地面に叩き付けられる。

加減を間違えた、痛い。

結局は自分の魔術でダメージを受けてしまった。

「どうしたの？ 恐怖のあまり錯乱してしまったのかしら、フフフ」
ボロボロになった上着を脱ぎ、下着だけの姿になったイリヤを嘲笑うキヤスター。

釣られてイリヤも笑う。それは諦めによる自暴自棄の笑いだとキヤスターは思った。

人間とサーヴァント。

初めからこの両者の勝敗は決まっている、人間がサーヴァントに勝つ例外も世界を探せば見付かるだろうが……生憎と、この場はその例外には含まれないだろう。

だからイリヤは笑う。

さて、では人間とサーヴァントでは勝負にならないのならば……一体どんな存在ならばサーヴァントに勝てるだろうか。

5つの魔法を使う魔法使いか？

使徒二十七祖と呼ばれる化け物共だろうか？

それともアルティミットワンと呼ばれる星の最強種だろうか？

成程、確かにどれもこれも人間よりは格段に勝つ事は可能かも知れないだろうが、それらの内の何れかが今この場に現れてキヤスターを倒して去ってくれる可能性はあまりにも低い。

「ええ、そうねキヤスター……終わりよ」

そんな奇跡の様な確率が起こる事を期待する程、イリヤは見た目とは違い夢見がちな少女では無い。

そんな方法よりも、もつとずつと、確実にまではいかないが悪くても50%以上の高確率で生き残る手段が残されているのだから。

「全て」の魔術回路を励起させる。

身体の所々に線が走る様に浮かび上がっていた魔術回路は、今やくつきりとした紋様となりイリヤの身体を覆い尽くしていた。

「貴女、何を……!? これは」

イリヤを中心にして地面を伝い魔力線が迸る、それは見境なく広がっているのではなく地面に埋没した“弾頭”を起点として柳洞寺の境内に、とある魔術陣を描いていた。

それを上空から俯瞰して見ていたキャスターは一瞬で何であるかに気づき、しかしそれは有り得ないと頭を振る。

ここは、柳洞寺は既にキャスターの神殿と化している。

まだ不完全とはいえ、それでもこの地の支配権はキャスターのものであり……だから……不可能なのだ。

「そんな事が出来ると思っているの!? そんな事も分からない筈がないわ、本当に錯乱しているの?」

サーヴァントの能力は凄まじい。

だから、そのサーヴァントと渡り合うならば何が一番か?

決まっている。

サーヴァントには、サーヴァントをぶつける事が聖杯戦争に於ける常道。

「アハハハ! 違うわ、貴女は本当に酷い勘違いばかりするのね。出来るんじゃない、叶えるのよ!」

元より、私の体は――」

切嗣に連れ出されてから今日まで。

その本来の形を歪め、削ぎ取り、長きに渡り封じられてきたイリヤスフィールの本質が顕になろうとしていた。

元より無理をして押さえ込んでいたソレが解放されたならば、安定期まであと10年という束縛を破り“もはや耐えられない”体になった今のイリヤの身体に重大な欠落を生む可能性が高い。

ガチリ。

イメー
激鉄を上げる。

封印の張られた頑丈な箱を破壊して、中身を取り出す為に銃を構える。

中に居るだろう自分自身を、引き摺り出す。

そして成すのだ、生まれてきた意味を。

アインツベルンの道具として？　――違う。
聖杯となるべくして？　――違う。

確かにそんな風に生まれる可能性もあった、それは事実だが。
――正しくはない。

母は人形だった。

人に似せて作られた人形が、1人の人間と恋に落ち……やがてその
愛の結晶を欲した。

母は人間になった。

父は人間だった。

無謀な夢を実現させる為に人形よりも人形らしくあろうとして、1
人の人形を愛してしまった。

そして人間に戻った。

そうして生まれたのだ。

千年の妄執を叶える為の道具としてではなく、母に望まれ、父に愛
され、そうやって生まれてきた“1人の人間”がイリヤスフィール。

人間の子供。

ああ、ならば恐れる必要は無い。

この身は確かに聖杯として生まれ、今やその機能の半分も成せない
壊れた身だが。

衛宮イリヤスフィールは。

衛宮アイリスフィールの娘で。

衛宮切嗣の娘で。

衛宮士郎の――姉なのだ。

父や母は自分を人間として愛する事の出来る世界を作る為に戦い、
死んで行った。

愛する家族を護る為に、その身を捧げた。

今度は自分の番だ。

愛する弟が暮らすこの冬木を、滅ぼしてしまうかも知れない穢れた
大聖杯を破壊する。

その為に必要ならば、この命を賭けてでも――成し遂げる。

「――体は、願いで出来ている」

激鉄が、落ちた。

その現象に大空洞の中で聖杯を調査していた凜が逸早く気付いた。大聖杯に蓄積されていた魔力が、柳洞寺へと集められていた魔力と共に急速に一点へと収束していく。

(何これ、キャスターの仕業……ううん、違う。きつと違う)

今までの、醜悪さを薄皮一枚で覆い隠していた雰囲気とは打って変わって大聖杯の中心部から眩いまでの光が粒となって空へと溢れ出していた。

その光景は、今まで凜が見て来た全ての美しい光景と比較しても……なお尊い輝きに満ちていた。

そして唐突に、大聖杯から光が失われる。

元の状態へと戻った大聖杯を、しかし凜は空を見上げていて気付かない。

何があつたのか正確には分からない。

ただ空を、その先を思い描いて……唐突にイリヤの事を思い出した。

「っ！ マズっ、呑まれてた。引くわよアーチャー、大聖杯に手を出すのは「今は」まだ早い！ 大至急この場から離脱して合流するわ！」
「心得た。では脱出してから彼女の依頼通り合図を送るとするか、掴まっっている凜」

そう言つて凜を片手で抱えたアーチャーは入口へと走りながら一振りの魔剣と弓を「引き出し」て空いた片手に出現させる。

その魔剣が何なのか、振り落とされないうよう精一杯しがみついている凜には判別も出来ないが。

感じられる魔力の質は桁違いだ。

どうやら派手な「合図」になるだろうと、ニヤリと口元を歪めた。

己の領域が、召喚陣がある場所だけとはいえ敵の手に落ちた事に

キヤスターは驚愕しつつ素早く魔術を構築。

もはや一分の情けも無い。

この世から完全に塵と化し消滅させるレベルの魔術を都合10以上も放つ。

そこで静止した世界の中で、イリヤは詠唱を続ける。

極限まで加速された体内時間の中で、封印を解き聖杯としての機能を一部復元させ大聖杯へ限定的なアクセス、サーヴァント召喚を執り行う。

元より令呪を「与えられて」いたイリヤの召喚と魔力のバックアップ要請に大聖杯は「……その核となって眠る者が……」応えた。
(誓いを此処に)

ポケットに突っ込んでいたままの聖遺物は違う事なく召喚の触媒としての効果を果たし、残されたクラス・バーサーカーへと座から降りてくる英霊を導く。

さあ、全ての準備は整った。

これから反撃の時間となる。

現れる英霊の力をイリヤは確信している。

しかし同時に心配もしている。

確実に・容易くキヤスターを凌駕するだろうその英霊を寄りにもよってバーサーカーのクラスで呼び出すのだから。

只でさえ消耗した魔力で、聖杯として不完全なこの身で「彼の大英雄」を支えなくてはならないのだ。

(来なさい、天秤の護り手よ！)

体内時間の加速を終える。

これ程の高加速による負荷であと数秒は揺り返しを抑える為に身動きする事が出来なくなる。

もはや任せるしかない。

こんな風に追い込まれてしまったのは自分のミスなのだから、致し方ない。

ドン！

していた。

食い入る様にそれを見て、恐怖のあまり絶望の声をあげるキャスター。

彼女はその鋼の鎧の正体を知っていた。

恐らくは少女よりも、誰よりも。

「■■■■■■……」

ゆったりとした動作で鋼の鎧が動き出し、全長2mを越える隻腕の巨人となった。

その立ち上がる迄の所作は雄々しく、されど優しく、少女を労る様な慈愛に満ちたものであった。

そして、まるで“時間が遡る”様に根元から千切れていた腕が急速に元の形を取り戻し始める。

全力で防御を固め、慌てて距離を取るキャスターが視界の端に映るも全く意に介さず。

イリヤは巨人を惚けたように見上げていた。

バーサーカー。

狂気に支配され、理性の残っていない筈の瞳と目が合い……吸い込まれそうな程に釘付けになりながらイリヤは満面の笑みで呟いた。

「バーサーカーは、強いね……」

此処に、最後の一騎が参戦し聖杯戦争は正式に幕を開けた。

未だ誰一人として脱落者は居らず。

次回予告。

現れた最後の一騎バーサーカー。

大聖杯の歪みを知った凜。

その命を削りながらもイリヤは、遂に聖杯戦争を集結させる一手を打つ。

次回！

最終回 その一！

E n d i n g o f “E”

最終話 あの日のを空を思う

幸せとは何か。

そう問われてハッキリとした答えを返せる人間は少ないだろう。幸せとは不定形であり不確実な物だ。

確かにそこに存在する筈なのに、何処にあるのか分からない。いや、元より抽象的な価値観の中にしか存在しない架空の概念なのだろう。

だから人は、それぞれ別の「幸せのカタチ」を胸に秘めている。では例え話をしよう。

藤村大河。

彼女にとって幸せとは何だろうか？

やはり定義するのは難しいだろう、私人としての彼女、教師としての彼女、立場や環境によって幸せのカタチは如何ようにも変化してしまう。

けれども今は、そう今だけは。

彼女にとっての幸せのカタチを端的に表すことが可能である。

それは何か？

そりゃあ勿論——

「ガルルルウ（腹音）くうくこれよこれ、お昼を少なめにしておいた甲斐があるってものよ！」

士郎ー、お姉ちゃん限界だつZ E ☆」

大盛り幕の内弁当とカップ麺3個に菓子類の山が少なめと言うのならそうなのだろう。

大河の中では。

グリグリと頭を撫で回してご機嫌取りをしてくる大河に苦笑しながらも火の番を疎かにはしない。

炭を移動させて火力を調整しつつ、絶妙な焼き目を見逃さない様にトングの動きを止めることはしない。

「しーろーうー！ うー！ うー！」

そのうーうー言うのを（ry

しつこいぐらい絡んで来るのは慣れっことは言え、そろそろ鬱陶しいのも事実である。一応は今日の主賓であるので待たせ過ぎても良くないだろう。

食べ頃を見計らい手渡そうとすると、分かり易いぐらい目を輝かせて掠め取った。

はしたないものであるが、そもそも野生の虎に人間のマナーを理解しろと言うのが酷だろう。

第一、今日はあまりマナーどころは関係ないメニューなので指摘するのは後日にする事にした。

あくまでも後日。

「わあー・にくー・お肉！ ニクー！ NIKUUUUー！」

あまりに嬉しすぎて肉以外の言葉を発する事が出来ないらしい。

特に最後のNIKUなど英語風の無駄にカツコ良い発音で誤魔化されそうだったが、そこはせめてmeatとかbeefと言うべきだろう。

英語教師的に考えて。

「んあ~~~~んむ……っ！ んんんんんん！！」

この料理の食し方に厳粛なマナーなど無い。

童心に返ったように手掴みで喰らい付くべし！ はしたなく口元を汚すべし！

元より、食事に於いて『美味しく食べる』以外のマナーなど本来は不要なのだ！

聞いてんのか、テメーの事だぞフランス料理!!

「むふ、んふ、んんんん〜！」

いわゆるBBQと呼ばれるスタイルの焼肉料理は、朝食を食べる事が出来なかった大河の怒りと哀しみを鎮める事を建前とし。

聖杯戦争の終結を祝い開催された。

流星に熱いのか普段の様な勢いが感じられない大河だが、もしかしたら野性の勘で肉の質の違いに気付いたのかも知れない。

だとすれば鋭い。手配したのはイリヤなので何処の肉かは士郎も知らないのだが、触ってみればある程度の質は分かる。

これは文句なしにA5ランク相当だろう。

普段買っている百グラム百〜数百円の肉とは値段も味も文字通り次元が違うスペックを誇るこの高級肉、それを何十kgも使って屋外BBQと洒落込んでいるのだから士郎的には堪らない。

然るべき処で食せば一体どれほどの値段になるのやら……そんな肉を自分の様な料理人見習いが扱うなどは、些か以上に荷が勝ち過ぎている。

くうう……

と、そんな風に悩んでいる隣で可愛らしい音が聴こえた。チラリと横目で見ると、そこに居るのは今日出会ったばかりの少女の姿。

そして、今日別れる少女。

「……ああ……」

声が漏れている事に気付くことなく肉に悩ましい視線を送り続ける彼女とは、結局1日限りの付き合いとなってしまった。

割とドライ、と言うか達観しているのか「ああ、やはり聖杯はダメでしたか」と語ったきり聖杯戦争の話をしようとはしなかった。

「ほら、セイバーも」

「感謝します、シロウ！」

大河が食べている間じつじつと串を見つめながら涎を垂らし瞳を輝かせていたセイバーの姿は、士郎の目にはまるで犬がお預けされて我慢している姿に思えた。

渡された串から肉を頬張り、もつきゅもつきゅと食する様など犬がパタパタと尻尾を振っている風にも見えて可愛らしい。

しかし食欲自体は獅子のそれなのだ。

今回用意した肉の量は肉食漢の多いアメリカ人でも

『オイオイ、この量は多過ぎるだろう。もしかして俺らを太らせて次の肉にでもするつもりかい？ H A H A H A!!』

と、下らないジョークを零す程の量の筈だが……。

「士郎ー！ お代わりっ!!」

「シロウ、もう一本ください！」

この猛獣2人が同時に暴れるとなると、些か以上に心配になる量

だ。

イリヤに頼めば幾らでも追加が来そうだが、そうなると思えば流石に値段が気になって調理が上手く出来そうにない。

「はいはい、肉もいけど野菜も食べるよ藤ねえ」

「? やさ……い……? んー、お姉ちゃん英語はあまり解らないナリー」

「それでいいのか英語教師!」

予めグループ別に分けて食べるようにしたのは正解だったなど、あの意味一番大変な2人の世話を担当する事になった土郎は隠れて溜息を吐く。

見る見るうちに網の上から減っていく肉の隙間に新たに肉を追加して頑として野菜を視界に入れようとしてもしないバカの口に無理やり突っ込んだ。

しかし意外だったなと思いつつながら凜達のグループをチラリと横目で覗く。

そこで焼き担当をしている男の手際はこうして離れていても思わず魅入ってしまう程に洗練されていた。いったい彼は何者なのだろうか、あと少しで訪れる別れの時を思いつつ意識を逸らした。

「一口にBBQと言っても各州や地域、家庭によってもスタイルは大きく変わる。竈を使って肉を吊るし豪快に焼いたり、各種調味料や香料でしつかりとした味付けをして香草で包みオーブンで焼いたり、フライパンで焼いてから細切れの野菜を溶かしたソースを絡めたりするものまで、どれもがBBQだ」

「へえ……」

「そうなんだ! 私、アメリカはアメコミでしか知らなかったからドーナツばかり食べていると思ってたわ」

手際よく網の上で食材の位置を整えながら語る男の言葉に耳を傾けながら、凜は手渡された串から丁寧に肉を取りながら適度に頷く。

その隣で顔にタレが飛ぶ程勢い良く食べながら目を輝かせて話を

聴いているイリヤ。

男は普段の皮肉げな態度は鳴りを潜めており肅々と語り続けた。

「今回は非常に簡易的でオーソドックスなスタイルだな。いわゆる『ダダイクール!』や『F o o o h!』と騒ぎながらビールや毒々しい見た目のジュースを呑みつつ、フライドポテトやソーセージなどを摘みに『知ってるかジョン、フライドポテトは野菜だからヘルシーなんだぜ?』とか『私が飲むのはこのダイエットコーク、カロリー半分なのに美味しいから何杯でもイケちゃうわ!』と言った会話を楽しみながら肉を頂くのが一般的だな。

言うまでもないがフライドポテトは分類としては揚げ物だ。カロリーが半分でも倍以上飲めば無意味だ。実にアメリカらしい大らかさが感じられるエピソードだな」

それは大らかさと言うよりはテキトーさと言うんじゃないかしらと思いつつながら凜は揚げたてのフライドポテトを摘む。ザクつとしてフワツ。

厚切りのポテトと荒塩のコンビネーションは抜群で、確かにこれはコーラが欲しくなる味だ。

伊達に全世界のバーガー店で最もポピュラーなセットでは無いといった所か。

「私もお菓子とジュースばかり食べてるから太ってしまうのかしら?」

「いや、その可能性は低いだろう。君の様に成長期の人間は多めに食べるべきだ、但し HALF とは言え日本人の血が入っている以上は食過ぎには注意だ。

日本人は割と太りやすいからな、特にジュースはデブと呼ばれなくてはならない節制は必須だ」

「……………」

男の言葉で太った自分の姿を連想してしまった凜は手を伸ばしかけていたジュースから距離を置いた。

あまりに美味しいものだから普段の倍以上は既に食べてしまっている、デザートが出て来る事は確定事項なのでこの辺で抑えなければ

明日の……いや、その先の未来の自分に皺寄せが来るだろう。

そんな無様な真似は遠坂として許容できない、優雅（たましい）なデブ坂凜にはなりたくない。

デザートを食べないという選択肢からは優雅に目を背けた。だって今日は魔力いっぱい使ったんだもの、仕方ないじゃない！（言い訳）

「そうそう、日本では脂身のサシが入った肉が好まれるがアメリカでは赤身が主流だ。それに質よりも量が尊ばれる、だからアメリカでBQに誘われたからといって百グラム何千円単位の高級肉を僅かに持っていても『アメリカ人よ、これが肉だ（ドヤ顔）』『oh:気を使わせて悪かったね、犬用の肉を持って来てくれるなんてさ！ 日本人は優しいな、H A H A H A!!』などと鼻で笑われてしまうぞ。

そもそも日本人が思うよりもアメリカの牛肉の質は高くて美味い。和牛の味が最高峰なのは否定しないが企業の偏向イメージに踊らされてアメリカ肉＝靴の底、などと思っただけは損だ」

それは流石に一部の人間の偏見か、そういうネタ発言じゃないのかと推測しながら凜は自分のお腹が許容量を超え始めている事に気付いた。

これは不味い、いや料理は美味しいけど不味い。

デブ坂を登り始めた……いや、転がり始めた様な気分だ。おのれアーチャー、この聖杯戦争で最も警戒しなければならぬ相手が身近に居たとは……！

「……なーんてね」

そんな風にバカみたいな事でも考えていないと、心にぽっかり空いた隙間から意地や矜持といったプライドの煮こごりが漏れてしまっそうだった。

思わず頭を抑えて溜め息をつく。

「……どうした凜、頭痛かね？ それとも胃もたれか？

そういう時はすだちを使うといい、適度な酸っぱさが気持ちを落ち着けるだけではなく脂っぽさを緩和してくれる。食前に牛乳やヨーグルトを飲んでおくのも手だったが……今更だな」

「ああ、うん。そういうのいいから」

的外れな心配をしてくる己がサーヴァントに割増で込み上げてくる頭痛を抑えながら凜は、まあ明日から頑張ればいいやと無理矢理に開き直り黙々と肉を食べ続けた。

ああ美味しいやっぱり不必要な我慢は身体に悪いわそうよ絶対にそううんうん私天才ね知ってたけど。

そんな風に、自分自身を騙しながら。そもそも。

何がこのサーヴァントの琴線に触れたのかは知らないが、BBQが始まってから妙に気分良さげに肉焼きを担当しつつ蘊蓄を語り続けているのは何なのだろう。

記憶喪失の割には博識と言うか、聖杯からの知識だとしても無駄な雑学が多すぎる。

小話と言った方が正確か。

(アメリカ………つぼさは無いわよね、ううん……)

何なのだろうか、もしかして近代アメリカ出身の英雄なのかと疑問に思う。

しかしそれは無いだろう、アメリカ人にしては彫りが深くないし皮肉は言うが発言自体は非常に理知的だ。

別にアメリカ人は理知的でないという話ではない、勘違いしてはいけない。

(ま、今更どこのどいつか分かってても仕方ないか……聖杯戦争も終わっちゃったし)

付けっぱなしのラジオから今も尚引つ切り無しに流れている『円蔵山謎の崩壊！ その真実を追う』という番組のパーソナリティが得意気に「戦時下の不発弾が〜」「ガス漏れが〜」「某国の陰謀が〜」「つまりノストラダムスの仕業だったんだよ！」など。

1時間どころか五分おきに仮説の変わる有難い御高説を賜りながら、長いようで短かった今日の出来事を振り返った。

柳洞寺は崩壊した、いや正確に表現するならば……円蔵山が崩壊していた。

富士山や北岳を初めとする標高3000m級の山々に比べれば微々たるものだが、それでも冬木に於いては知らぬ者の居ない著名な山。

空を見上げれば視界の隅に僅かに重なっていた山頂部は今や存在せず、夜の帳が落ちた始めた今ではハッキリとは見えないまでも立ち昇り続ける山火事の煙が、事件の大きさを物語っていた。

この原因は全てバーサーカーである。

分かり切った過程を書く必要はない、バーサーカーはキャスターを圧倒して勝利、大聖杯をその身を以て破壊し尽くしたのだ。

聖杯戦争は終結した。

その立役者たるイリヤと凜、この2名が人目に触れぬよう離れていく姿に気付ける者は皆無だった。

「……お疲れ様、衛宮さん。あなたの描いた通りの結末、って事かしら？」

「概ねその通りね〜あ〜〜、リンって意外といい匂いなね〜すはすは〜あ〜」

「吸うなっ！」

凜に背負われたイリヤは、大量の魔力消費により身動き一つ取る事が出来ないでいる。

バーサーカーは既に座へと戻っており、大聖杯が破壊された今となつてはサーヴァントを維持しているのは凜とイリヤの2人だけ。

それぞれアーチャーとセイバーの現界を何とか支えているに過ぎない。

「すまんね、マスター。私としては君の代わりにイリヤを背負っても構わんのだが、それでは私の魔力消費が嵩んでしまいかねないのだ。分かって欲しい、この忠実な従者の心の痛みを」

「オオツケ〜、ア〜チャ〜!! あんたは、絶対に、私が研究し尽くすまで、逃がさないんだからねッ！」

聖杯戦争の終了は別に良い。

元々聖杯なんぞに託す願いなど無く、ただ遠坂として聖杯を手にするのは義務だと思つて始めたに過ぎない。

その聖杯が穢れており、災厄を成す存在であるならば冬木の管理者としてこれを処断するのも務めだ。

でも折角だから英霊を研究したい。

そのぐらいの利益はあつてもいい筈だ。

だからこうして、現界に使う魔力を極限まで抑える為に霊体化させている従者がイリヤを抱えられないのは仕方が無いのだ。

そしてイリヤを背負っているのも、これまた新たに借りを作れるからで。こんな事ぐらいで衛宮に借りを作れるなんて万々歳なぐらいだ。

ここまでが良い。

凜が自分で課した利益を得る為の相応の代価の内だ。この苦勞が後に遠坂にとつて素晴らしい利益を生むのだ。

「んゝすはすはゝゝやっぱりんも一緒に風呂入りましょうよ〜サクラといっしょに〜」

「……………(ビキ)」

「大丈夫かね、マスター？ なあに、君なら造作もない事だ。鼻歌でも唄ったらどうかね、気が紛れるぞ」

「……………(ビキビキ)」

「んあゝもつと優しくしてよねゝゝ揺れて気持ち悪いわゝゝうぷ」

「……………(ビキビキビキ)」

そうだ、確かにこの状況は自分で望んだ状況だ。

それでも。

それでもだ。

(……………コイツら絶対にあとで殴ツ血KILL!!)

キレる権利ぐらいはある筈だ。

「お、お帰り……………遠坂、さん」

「ただいま、衛宮くん」

「シーローウ〜！ おぶつてえ〜リンは飽きた〜」

とても爽やかな笑みでイリヤを背負い帰った来た凜を迎え、命の危機を感じた士郎は危険物を扱うかの如く丁重に凜を労いつつイリヤを受け取った。

その笑みは本当に綺麗で、普段よりも輝いて見えると言うのに……寒気しか感じない。

「そっちはどうだった？ 昼過ぎには学校の結界も解除されたと思うけど。何かあった？」

「いや……あ、いえ。何もありませんでした」

「ふうん、そお……良かったわねえ衛宮くんは。うふふふふ」

笑い続けながら、離れへと歩いていく凜。

触らぬ神に祟りが無いように、触らぬ遠坂に祟りは無いと信じて黙ってお見送りする事だけが、士郎に出来る最善の選択肢だった。

「しー、ろー、うーーー」

「大丈夫かイリヤ？ 医者を呼ぼうか？」

「だーいーじょぶー、魔力がー足りないだけえ、ちよつと寝るねー」

部屋の手前まで背負って行くと、しゃかしゃかと素早い動きで布団へと潜り込んでいった。

よほどキツイのだろう、普段は一緒に寝ようと駄々を捏ねると言うのに今日はモゾモゾと収まりの良い格好を探っては布団を巻き込んでいく。

「……お疲れ様、イリヤ。おやすみ」

「んんん………おやすみい、夕飯には起こしてねえ………んんん………」

完璧に寝たのだろう。

静かな吐息しか聴こえなくなったイリヤの身体は、所々が布団からはみ出ている。冷やさない様に布団を弄ってから戸締りを確かめ、静かに部屋から退出する。

さて、今から夕飯の仕込みに入らねばならないのだ。

その前に、もう一度だけイリヤを見やり溜め息をついた。

「その布団、俺の何だけどなあ……どうしようかな」

構わない、と。もう少しで口にしてしまうところだった。
流星にそれは、出来ない。

この家で、この場所で、彼女らと共に食事をする権利など自分とはとつくの昔に捨ててしまっただけだから。

それに何より、ここには「衛宮士郎」が居る。
だから。

「……一つ、訊かせてくれ」

「？ あ、ああ。いいけど」

「ああ、お前は……」

だから断らねばならぬと言うのに、どうしてか口は勝手に言葉を紡いでいた。

どんな質問をしたか、頭にすら残らない気の迷いのようなそれに返された答えに「……酷く、納得してしまった。」

「……それが、お前の答えか」

「答えてっというか、そう思ってるだけだけど」

「……良いだろう、顔ぐらいい出してやる」

そう言い残し、消えること無く凜が寝ている離れの部屋へと向かうアーチャー。

その後ろ姿を眺めていた士郎は、先程の質問が何を意味していて、自分の答えがどう思われたのかを考えようとし……台所へ向かう途中だった事に思い至る。

「やっべー！ まだ何も仕込んでないぞ、早くしなきゃ藤ねえ帰って来ちゃう」

その時、彼と交わした言葉を士郎は覚えていない。

ただ、いざ夕食が始まる前にフラツと現れたアーチャーの表情が妙に澄んでいた事だけは……何時までも心に残った。

それからの事

何時の間にか巻き込まれていた聖杯戦争が何時の間にか終わりを告げ、士郎はそれまでと殆ど変わらない日常を送る事になった。

けれども2つだけ。

確かに変わった事がある。

頻繁に凜が衛宮邸を訪れるようになった事。

イリヤがあまり外を出歩かなくなった事。

そんな風に日常がほんの少し変わったとしても士郎の目指す目的に変わりはない。懸命に、自分なりに料理人になる道を歩き続けた。

そんな彼の姿をイリヤは黙って見守り続けた。

慈しむような微笑みで。

溶けて消えてしまいうような、雪のような儚さで。

それから幾つもの季節が過ぎ。

冬の厳しさが和らぎ春へと移り変わろうとしていたある日。

海外に活動の場を移していた士郎の元に、イリヤから唐突に家に戻るようにと連絡があった。

昨年から体調を大きく崩していた彼女は、喋ることすら億劫な筈で

……しかし、そんな事は無かったかのようにな彼女が電話越しに話す声は朗らかで。

それで。

分かってしまった。

――ただいま イリヤ

おかえりなさい シロウ

――何か 食べるか？

ううん

——そっか

うん

衛宮邸の中庭に面した縁側に腰掛けたイリヤは、士郎の方を見る事なくじつと空を見上げていた。

その隣に腰掛けた士郎も、黙って空を見上げる。

そのまま互いに喋ることなく空を見上げ続け、月を隠していた雲が晴れた頃。

ぽっぽつと。

イリヤは語り出した。

シロウ

——どうした？

シロウはね とつても素敵な料理人になれると思うよ

——……そうかな

そうよ だって 私が保証するんだもの

——そっか それじゃ間違いないな

うん

——うん

私ね

——うん

どうしてあの時 あんな風に笑ってたのか分からなかったの

ーーーーうん

でもね 今は何となく分かるかな だってね

ーーーーうん

シロウはわたしの……

ーーーーうん

………

ーーーーイリヤ？

………

ことん、と肩にもたれ掛かって来たイリヤの身体を優しく受け止める。年齢の割に随分と小さく、細くなってしまったイリヤの身体はとても冷たかった。

ーーーー風邪引くぞ イリヤ

まだ寒い季節だと言うのにこんなに薄着で居るものだから、すっかり冷え切ってしまったている。

上着を脱ぎイリヤに被せた。

上背の高い士郎の服は小さな彼女の身体には大きく全身を包んでしまえた。

これで冷える事はないだろう。

そう確信して胸元に抱きかかえる。

——おやすみ イリヤ

幸せそうな顔で眠っているイリヤを優しく、しかし強く抱き締めながら士郎は一度だけ目元を拭った。

何時の間にか降り始めていた雪が彼女の顔にかからない様に強く強く強く抱きしめながら。

空を見上げる。

あの日と変わらない空を。

——おやすみ

今頃は夢の中で会えているのだろうか。

父親と。

母親と。

冷たい冬の城ではなく。

この、温かな衛宮邸で。

そう思いながら。

そう願いながら。

陽が明けるまで抱き締め続けた。

この先も続いていく物語

その結末は

きつと……

・勝者 衛宮イリヤスフィール
遠坂凜
衛宮士郎

・犠牲：被害 円蔵山、及び柳洞寺

セイバーの華麗な活躍

メデアさんの素敵な生活

食費

シリアス↑New!!

おまけ

【badルート】

「お、おとおおおー！」

数年ぶりに全身の魔術回路へと魔力を流し込む。

しかし長年使われずにいた回路は錆び付いた機械の如くその機能を著しく損ねていた。

足りない、このままではーああの剣を創る事は不可能だ。

(くっそ、が、ああああああっ！)

不意に、内側から剣が飛び出る感覚を「思い起こし」た。

内深く……より深く。

奥深くで眠っている「何か」が士郎の意思に応える様に動き出す感覚と共に、一面の荒野と剣の墓標を幻視する。

塞き止められていた回路に魔力が溢れ出す。

激流となつて体内を循環する魔力は、未熟な魔術回路を半ば破壊するかの様に荒々しく目覚めさせ本来の機能を取り戻していく。

自らの魔力で自壊しながら、破格の速度で開かれ続けていく魔術回路は「剣の創造」という己の本分を果たせる事に歓喜するかの様に、主により定められた設計図から双振りの剣を構築していく。

それらの工程は現実時間にして僅か1秒も掛からず行われ、遂にその両手に陰陽の双剣が握られる。

「あ……い……」

それと同じくして、士郎の胸部を朱槍が貫いた。

「ワリいな坊主、死んでくれや」

遅すぎた。

全身から力が抜ける、手から双剣が零れ落ち廊下に突き刺さる……事も無く罅割れ幻想へと還っていく。

不出来だ。

あまりにも。

投影も、何より……自分自身が。

(イリ……ヤ……ごめ……)

胸部に刺さっていた槍が引き抜かれ、ゆっくりと消失していく意識と共に身体が倒れて行く。

元より生存を度外視して行われた投影の余波で死にかけていた身体は、心臓を破壊された事により完全な致命傷となった。

感じない。

何も。

思考すら。

目も。

鼻も。

耳も。

何も感じなく……

シロウは死なないよね？

……何かが聴こえた。

大切な何か。

大切な。

きつとそれは。

こうして命が尽きるよりも。

重要な事の筈だ。

「……………いい……………」

最後の力で指を動かす。

ほんの少し。

僅かに。

何かを握り締めようと。

抱きしめようと。

慰めようと。

動いた。

それが……衛宮士郎の最期だった。

ルート2

前編 君の願う幸福すら知らず

そこは暗い場所だった。

暗く。とても暗い。その実態は人が人である限り決して許容する事が叶わない深い闇の淵。その顕現。

もしこれが完全に光の射し込まない闇の中ならばまだ良かった。ほんの少しの灯りも無ければ、まだ心強かつただろう。物理的に完全に閉ざされた地下であればどれだけ救われたことか。凡そ考え付く限り、ある種の世界法則とも言える程に人類不踏の地。

そんな場所で有り得ざることには人影があつた。

この冬木で長らく活動している神父、名を言峰綺礼という。表だけでなく“裏”からも敬虔な信徒として有名なこの男——この男こそが、この地を絶望が肌を包む闇の地へと変貌させていた。パキリ。

何の音かも定かではないが、その音と共に散つた火花が男の相貌を僅かに窺わせる。その瞳はじつと、ただ一点を見つめ続けていた。ただひたすらに“ソレ”を。

そうだ、僅かでも“ソレ”が見えてしまっている事。言峰以外に人間の存在が無い場所で、嘗て人間と“呼べた”存在達が煖炉にくべられる薪が如く放り込まれ燃え盛っている悍ましい光景。

そんな、全身を錆び付いた包丁で無造作に無遠慮に解体される方が心穏やかでいられる様な光景が、この地下室で無造作に展示されていた。

然しそれも。

『それがお前の選んだ（望んだ）答えか』

その声の主が語るだけで、静謐さすら感じさせる厳かな空間へと地下室は様変わりした。先程までの暗さは、もはや微塵も窺えない。

言峰という男から感じる気配すらもまた、敬虔な信徒としか感じられない程に。灰となり消え行く“モノ”達が天に召されているかと

錯覚する程に。

『黄金の男』

現代の言葉ではそうとしか呼称できそうにない、いと尊き絶対無二の存在が彼「ら」を見定めていた。

『そうだ。お前には物足りぬ答えであろうが、私にとつてこれ以外にもはや執着はない。氣に入らねば自害せよとでも命じればいい』

言いながら袖を捲る言峰の腕には聖痕が刻まれていた。

神の子イエスに由来する聖痕ではないものの、そこに内包された神秘は確かに神の力の模倣としてその役割を果たす事だろう。一つの軀として。

それでもこの黄金の男がその氣になれば塵芥に等しい代物に過ぎない。

『よい、今日までのお前の功に報い今後もし生を謳歌する事をとくに赦す』

下知を賜った言峰は恭しく頭を垂れる。

その隠れた表情が酷く歪んだ笑みを湛えていたとしても、その様だからこそ生かしておく価値があった。

『それで？ お前は何処に行くのだ』

『ふん……』

黄金の男の背面が揺らぎ、その中へ帽子が吸い込まれる。何処にでも売ってある量産品の帽子は酷く汚れ、解れ、もはや帽子としての役割すら果たせていない。だが、ただ一つ。

ただ一つだけ特別な意味がある。

この帽子の持ち主へと買い与えた者こそが目の前の黄金の男であるという事実。それだけでこの帽子は史上最高にして最古の価値を持つており。その持ち主は凡そこの世に在らざるべき存在によって命脈が断たれた。

要するに……。

『我の所有物に手を出したのだ。……決まっておろう？』

黄金の男へと唾を吐きかけたに等しい。

時は第五次聖杯戦争の開催よりも数年前。

とある日の出来事。

前編 君の願う幸福すら知らず

「悪いな美綴、今日はやっぱり帰らせてもらう！ スマン！ 埋め合
わせはする、な？ よし、じゃあな!!」

放課後。

HRが終わった瞬間に一も二もなく鞆を担ぎ駆け出した士郎は、そのままと逃亡すれば良いにも関わらず律儀に断りをいれてからそそくさと下駄箱へと向かった。

その愚直さが却って功を奏してか、呆気にとられる美綴を尻目に士郎は強化を叩き込んだ走力を持って戦術的撤退を成功する。

「は？ あ、ちよ、待てよえみ……はやっ!？」

有無を言わさぬ言葉の嵐に反応の遅れた美綴は、どう見ても友人（一応）であり穂群原陸上部に並ぶもの無しとされるエースの蒔寺楓（近人種）より明らかに速く走って消えていった士郎の背中を見送るしか出来なかった訳だ。

その姿をぶすーっとした表情で一瞬だけ見やつてから教室を離れた凛の姿は、誰に気付かれる事もなかった。

「むうー、そりや来て欲しかったけど用事があんなら私だって無理強いしないぞ?」

グイグイと押すぐらいの姿勢で勧誘しなければたちまち紐を離れた風船の如く飛んでいってしまうから仕方なくなのだ。別に体育会系特有の強情さは関係ない……筈。

とはいえ、今日は手応えがあつたので残念な事に代わりはなく、早速明日また誘おうと頭を切り替える。

あの射を観る為ならば機は選ばない。

即断実行が唯一最善の手段なのだ。

「おおおー!? 何だよ衛宮のヤツ、やっぱり普段は手え抜いてんのな!!!」

うぎやー!! 舐められてる気が☆Z E!!」

美綴の中でギリ友人（人間）のカテゴリに振り分けられているとは知らない蒔寺楓が士郎の隠し持つ力を前に対抗心を燃やし叫ぶ。

その音量は優に公害レベルだが、生憎と周囲の生徒は慣れてしまっていた。

「五月蠅いぞ蒔の字」

「ほんとすごいねー衛宮くん」

常に冷静沈着なツツコミを入れる氷室鐘と、どう考えても身体がマインスイオンで出来ている三枝由紀香も各々の感想を述べる。

それに何故だか知らないが気分が良くなった美綴は、鼻高々になりながら自慢げに胸を張る。張るほどのものではないが、とある友人よりは御自慢の逸品だ。

「だろう？ お前らにはやらん、衛宮は弓道部のエースに戻るのだからな！」

「へっ、今までずっと断られてんの知ってたぞ〜?! オマエしつこいから嫌われてんじゃねーの。友達とも思われてなかったりしてな、ハハハ！」

「誰がだ！ 失礼な、大体お前と違って私と衛宮は歴とした親友……じゃないか……友達……うん、すごい友達だからな！」

わいのわいのと何時の間にか集まってきた3人組と語りいながら迎えた放課後、そんなこんなで部活の始まるまでの短い時間を美綴綾子らは「生涯最後」に見ることとなった衛宮士郎の話で盛り上がった。

「ただいまー……っつと、寝てるのか」

居間の中央に堂々と鎮座するのは対冬特化Aランク宝具であるコタツ。そこで寝こけている小さな姉の姿に苦笑しつつ鞆を置き冷蔵庫を開いて嘆息する。作り置いていたシチューの容器は触れられた様子もないのに、備蓄してあるジュースのペットボトルだけは無くなっている。ついでに幾つかの菓子もだ。

何時もの事ではある。

「栄養偏るって言うてんのになあ……つたく」

言葉ほどには不快さを滲ませず、ガスコンロに火を点し温め直す。野菜を手頃な大きさに切り分けつつオーブンでパンを加熱し、コトコトゆっくりかき混ぜながら香り付けと消毒に香草を混ぜた頃に背後でモゾモゾと動く気配に気付いて振り向いた。

「くあああ……おかえりーしろー」

ほわわ、と欠伸をしながら起き上がったイリヤの頬にはカーペット模様の紅葉色がだらしなく刻まれており、眠りの深さと長さを感じさせた。へにやりとした表情筋は弛み、頭は起ききつていない。

それでも緊急事態なら魔術で無理やりにも覚醒するのだが、まあそんな緊急事態なんて早々起きはしない。

「悪い、起こしちゃったか」

「んく……ちがうけどお、でも美味しそうな匂いだねー。おかわりー」
「はは、まだ食べてないだろ」

寝惚け状態のイリヤにまずは気付け代わりに苦みばしったコーヒーを与える、温め直したシチューを器によそってからスプーンと共に側へ置く。

何の躊躇もなく水を飲み干すように勢い良くコーヒーを嚥下したイリヤの目が大きく見開かれる、ふるふるすると震え脂汗を垂らしながらも何とか飲み込めばバツチリお目覚めた。

途端に、自分の状況に気付いたイリヤは時計をちらりと覗き「あ、やっちまった」と言わんばかりにガツガツとシチューを掻き込み始めた。

「いただきます」

「いただきますふー」

対面に座って手を合わせてから士郎もシチューを食べ始める。ゴロゴロとした大きめのサイズの鶏肉やじゃがいもはしつかりとした食感で口腔を賑やかさせ、クリーミーなスープの中に溶け込んだ玉ねぎの甘みと一緒にお腹を温めてくれる。まるで極上の羽毛布団に包まれているような安心感だ。

隠し味のチーズがコクと味の奥行きを演出し、一口サイズに切り分

けたトーストの相性はバツグン。付け合せのサラダがいい箸休めとなり飽きさせない。

急いで帰って疲れた身体にこれは効く。

「もぎゆ、もぎゆ……シロウ、食べ終わったら出かけるわよ」

「ん？ そりやいいけど、話があるんじゃないか？」

「大丈夫よ、向かいながら……もぎゆ……はなしゆから」

かなり忙しく食べ終えたイリヤは、食器をテキパキと洗うとバタバタと忙しく家中を駆け回り始めた。

そんな姉の姿に呆れつつ、ゆつくりと食べ終えた士郎が食器や鍋を纏めて食洗機に入れ終えふと後ろを向くと其処には、余所行きの衣装に身を包み大きなトランクを2つ重ねた上に乗ってニンマリとこちらを見つめる小さな雪の妖精が居た。

「え……いや、イリヤ？」

「なあに？」

「出かけるって、その……何処なんだ？」

てつきり近所に出掛けるのだとばかり思っていた士郎の予想を裏切り、イリヤの姿はどう見ても遠出のそれだった。クスクスと笑い、更に驚愕するような内容を告げる。

「決まってるじゃない、海外旅行よ！」

「……………なんでさ」

まだ春休みには早いんだけどなあ。

そんな呑気な事を考えながら、衛宮士郎は『二度と帰ることのない

我が家を後にした。

「ねえアーチャー、あんたも昔は生きてたのよね」

「キミは英霊をなんだと思ってるのかね？」

軽く人払いをしながら校舎内に張られた結界の基点の魔力を散らせつつ凜は、退屈凌ぎに己がサーヴァントへと語り掛けていた。

全くもって無意味な問いだ。訊いた相手がそもそも記憶障害持ちで、それでなくとも生涯を戦いに明け暮れたであろう英霊の生前の話など歴史の証人程度の意味合いしかない。

魔術師は過去へと疾走するものだが、別に過去の時代に興味があるわけでもない。寧ろ未来の方に興味がある、金策的な意味で。

「別に。ただ、英霊が人間みたいに普通に生きてたなんて、なんかしつくり来ないし」

「ふむ」

「大した事じゃないのよ、ゴメン。気を悪くした？」

「いや……っ」

ふっと霊体化したアーチャーを訝しがる間もなく、目の前を走り去って行った藤村大河の背中を見送った凜は彼女が走って来た方向に目をやり……弓道場を視界に入れた。

だからどう、と言うことはない。特に理由の存在しない衝動に流されるままに部員からは死角になる場所へと踏み込み丁度いい足場を見つけ優雅に腰を掛けた。

だから、別にその姿を見てどうこう思いはしなかった。今、正に射る瞬間の少女の真剣な表情を、放たれた矢の向かう先を目で追い、その結果に薄く微笑んだのも光の加減で偶然そんな風に見えただけに過ぎない。

暫くはそうしていたか。

それぞれのタイミングで放たれる矢、的に中るのも有れば外すものもある。何時しか陽は落ち始めていた、更衣室に1人の少女が向かった処まで見送りふと……疑問が湧いた。

弓の英霊とまでなったこの男から見て現代の弓道とはどう映るモノなのか。

「ねえアーチャー、アンタから見て彼らの弓はどうなの？」

『さて、どう……と言われてもな。私の弓は彼らのソレとは大きく違う、弓を放つ意味が違う以上は比べる様な事ではないさ』

「そりやそうかもだけど……」

それで話は終わった。

再び人払いをしながら校舎内へと向かった凜は、この夜ランサーと出会う。アーチャーとランサー、2人の英霊の闘いを邪魔する者はなく今夜、1体目の脱落者が生まれる。

そんな遠坂凜の聖杯戦争、最初にして「最後」となる闘いの火蓋が切られようとしていた。

「ちよつとー！ イリヤちゃんってばア、どういうことなの!? ちゃんと説明しなさい!!」

ギョオオオオオン!!

冬木の誇る怪獣藤村大河の咆哮が轟く、こてんと首を傾げたイリヤは逆に貴方が何を言っているのか理解出来ませんとばかりに澄ました顔でもう一度要件をそのまま告げた。

「だーかーらー、明日からシロウは1週間休学させるからタイガも一緒に旅行に行かないかって言ってるんじゃない。あれ? 私ってば日本語じゃなくてアインツベルン訛り出ちゃってた?」

「うわああああん! イリヤちゃんは何言ってるのか分かんないよー士郎うー! なんで、なんで学校休むのお?! うえええんっ!!」

それと私一応教師だからズル休み出来ないんだよー、と話の内容を理解して叫んでいる大河には悪かったが士郎も何が何だか分かってはいない。

分かつてはいないが、それはそれ。

「いや、そりや俺もいきなり過ぎると思うけどさ。でも俺はイリヤのすることを信じてるから、だから1週間ほど休むな。休学届けはちゃんと書いてあるから、藤ねえ行かないなら出しといてくれ」

んっ、と渡された休学届けを握り締めつつ私の御飯はどうなるのよ〜と情けない事を喋りながら何とか引き留めようと抱き着こうとするのを防ぐ様に、ペシペシと小気味いいジャブで牽制しつつひらりと宙を舞ってそそくさとベンツの中へと戻った。

「もうっ! いいタイガ、ほんとは無理やりにも連れて行きたいとこだけど何でか知らないけどタイガは放っておいても平気そうだから置いてくわ! でも夜は出歩くんじゃないわよ、保健所に通報されちゃうから」

「誰が虎じゃあああ!!」

「えー、そんなの決まってるじゃない♪」

アハハハハと高笑いしながらアクセルを踏み込み空港へと向かったベンツ、2人の唐突な海外旅行を渋々ながら見送った大河は今日ももう自棄酒して寝ようと固く決意をした。

1週間もしたら帰ってくるのだし？

それからクドクドと自分を置いて楽しんでくるだろう2人から美味いものでもたかってやろうと。

そんな訪れることのない未来を描いていた。

イリヤと士郎。

2人が冬木の地を離れてより少しして、とある「ナニカ」がこの街へと訪れる。聖杯戦争の匂いに誘われてか、はたまた……。

だがそれは問題ではない。

このナニカは共に連れてきてしまったのだ……一つの災いを。それから数日後。

遠き海外の地にて世界へと発信されたセンサーシヨナルなニュースを知った士郎は、愕然としながら大通りのショーウィンドーで流れるニュースを見続けていた。

高感度カメラによる遠距離映像。

そこに映るのはまるで。

あの日の焼き直し。

生存者は絶望。

……冬木市は世界地図から姿を消した

番外編

※クリスマス特別編※

「クリスマス？ えっとねー、ケーキ食べてー、プレゼント交換したりー、みんなでワイワイはしゃぐ日よね！」

元アインツベルンのお嬢様であるところのイリヤは『クリスマスとは何か？』を以上のように答えた。間違っではないだろう、ただし日本人の意味で。

もはや原型たる聖なんかを肅々と祝うような厳かな行事であることを忘却しているらしい。

切嗣からアインツベルンより奪還されてより日本人化著しい彼女らしいエピソードである。

これは、そんな彼女が聖杯戦争前に催したクリスマスsofの日の出来事である。突貫で書いてあるから誤字とかの修正は知らねーのである。

「メリクリー！ しろー、お姉ちゃんサンタが来たぞおー！ うめえー!!」

「おう、いらっしやい。ところで、最近のサンタは勝手に他人の家に入って勝手に飯を食うもんなのか？」

百均で買ったようなお粗末なサンタ帽を被ったタイガー（おそらく人間種）は挨拶するや否や配膳途中のチキンに手を、もとい口を出していた。

あむあむと租借する最中、獣は絶対たる王者の気配を感じ恐る恐る振り向きー地獄を、見た。

「タイガー……？（ニコッ）」

「……さーせんっしたー、はい。出来心なんです、すみません」

タイガーに対してしつかりと全身を無駄に高級な素材で仕上げた特注サンタ服（約60万円）姿で決め込んだイリヤは、心からの笑顔でタイガーを出迎えた。

おお、いたいけな子どもにたしなめられてタイガーも反省したのだ

ろう。まるで強力な魔力に充てられたかのように全身をプルプルと震わせて己の罪を悔いたのである、聖夜の奇跡といった所か。

「おい、その先は地獄だぞ（エ並感）」

「い、イリヤさんそこまでしなくても……「あ？」……な、なんでもないです」

「よし、これで最後だぞー……ん？どうしたんだ皆？」

イリヤの横で、胸や脚を異常なほどに強調するデザインのスanta服（約30万円）姿の桜が哀れなタイガーに声をかけようとするものの、切ない表情を浮かべて目を逸らした。

たぶん桜は幻覚でも見たんじゃないかな。

遅れてやって来た士郎は何時ものユニ○口服の上にサンタ風のエプロンを着用している、何故かビクンビクンと死にかけの魚のように力なく跳ねているタイガーと露骨に口笛で何かをごまこそうとしているイリヤと青少年には刺激が強すぎる格好の桜へと声をかけたが結局は曖昧に誤魔化されてしまう。

改めて一堂に会した四人（？）はクラッカーを用意し、未だ心が死んでいるタイガーの頭にイリヤがビリつとする謎の力をかけて立ち直らせる

「ほらタイガー、何してるのパーティー始めるわよ！」

「はっ！わ、私は今まで何を……うひゃっほーう！肉だー！」

「はしゃぐなって藤ねえ、んじゃいくぞ……！」

「ニ「メリークリスマス!!」ニ」

ポポポン！

とシャンパンを開けた四人は互いのコップへと注いで誰からともなく用意された聖夜の特別メニューを食べ始めた。

料理描写は割愛する、各自で『クリスマス』『料理』などでググって欲しい。作者的にはクリスマス明けのクリスマス料理が狙い目である、財布事情的に考えて。

「はいはいーい！それじゃプレゼント交換よー、まあ私はシロウにしかあげないけど。はいシロウ!!めりくりー♪」

「ありがとうイリヤ、お……欲しかった料理本だ。んじゃこれ、はいイリヤ」

「ありがとシロ……うそー！やばい、まだ未発売のプリズマな魔法少女アニメのBD boxだー！」

互いの好みを熟知している姉弟は満足のいくプレゼントを渡せたことと、貰ったことにニツコリとしている。

余った形になったタイガーと桜は、一応教員かつ弓道部顧問である立場のタイガーは珍しく気を利かせ道具一式をプレゼント。

桜からは料理の締めケーキを任せて欲しいと士郎に直談判しており、見事に食後のクリスマスケーキを振る舞うという栄誉を預かっていた。

「どうぞ先輩」

「ありがと桜、とても美味しそうだ」

「実は自信あります、えへへ」

ボンツと服の一部が強調されている桜から手ずから貰うことによって、上方から谷間を最高の角度で俯瞰してしまったシロウ。加えてはにかんだ笑顔という隙を見せぬ二段構えの萌えを味わい当然のことながら心臓が高鳴っていた。

（くくく、さすがねサクラ。今日という日にしかない要素と私すら想定していないあざとさを以てシロウへの有効ポイントは計り知れないわ！

あとでゴムあげなきやね……うふふふふ）

そんな甘酸っぱい光景を裏で作り上げることに成功したイリヤは満面の笑みの裏側でニヤリとほくそえんだ。

しかし彼女の計略は桜のあまりのヘタレっぷりと鉄心エンドでも迎えたのかと勘違いするほどの強固な精神力を見せた士郎らの手によって阻まれた。

しかしイリヤの衛宮家ハッピーファミリー化計画は始まったばかりである、このあといくつもの手段で二人を結び付ける（物理）為に

暗躍をし続けるだろう。

残念ながらそれはまた別のお話した（露骨な宣伝）

日本人的なクリスマスマスを終えた士郎とイリヤは、残されたパーティーグッズの片付けに追われていた。この日に限ってはイリヤもほぼ全ての護衛に暇を出しており衛宮邸は珍しいほどに人の気配がしない場所になっていた。

気遣いのできる女である、家族持ちには喜ばれた。

因みに、よかれと思つて出した休暇の日にも何処にも行く宛がなく、まるで信じたすべてに裏切られた某掃除屋のように「俺はね、クリスマスなんて知らなければよかったんだ」と絶望と後悔に苛まれ過ぎた者達が多かつたんだってさ。

「楽しかったねーシロウ」

「そう、だな。うん……楽しかった」

無尽合体キ○ラギのクリスマスマス特別編を眺めながら士郎とイリヤはコタツで微睡んでいた、すると自分の膝の上に陣取つたイリヤが次第にコクリコクリと頭を揺らし始めたことに気付いた士郎は手元に置いてあつた大きな布団を自分とイリヤを包むようにかけた。

「こんなところで寝たら風邪引くぞ……つたく」

暖かさに包まれ寝入ってしまったイリヤの体が冷めないように、かつ暑すぎて寝汗を掻いたりしないように気を配りながら日付変更までそうした。

麗しい姉弟愛である。

シャンシャンシャンシャン。

そんな幸せな1日を満喫している彼らを見守るように遙か空の果てにて赤い礼装を羽織つた老紳士が幻想種にソリを運ばせながら世界を飛び回っていた。

英霊サンタクロース

世界中の子どもたちから、そうあって欲しいと願われ誕生した架空の英霊。

12月24日から25日にかけて召喚される。

全ステータスEX、宝具によって世界中のよいこにプレゼントを届ける。分霊として世界中のお父さんに憑依召喚され直接プレゼントを渡すこともある、当たり前じゃないっすかーサンタクロースはじつざいするんですよー(曇りなき眼)

「っ!!」

心暖まる光景を見届けた英霊サンタの前に、巨大な漆黒の炎が行く手を塞いだ。それを放った男の存在に気づき、サンタは顔をしかめる。

「ヒヤハハハ！どこへ行く気だあ…… 〃兄弟〃 イ…!?!」

その男の服装は、奇しくもサンタに酷似していた。

ただひとつ、そして決定的に違うのは色だ。赤の服装のサンタに対し、男は漆黒の服を纏っている。それは単に黒く塗られているというよりは、赤々しい血が乾き黒々と変色したかのような不気味さを醸している。

「……やめよ。我らが争ったところでどうなると言うのだ」

「うるせえええ！止まらねえんだよ、疼くんだよオオオオオ！てめえをぶち殺せって俺の心がさあアアア!!」

反英霊サタンクロース

嫉妬や怒り憎しみといった全ての負の感情を受け現れた、サンタという英霊の反存在。

12/24から25にかけて現れる、全てのステータスEX。その身は『リア充死すべし』という絶対目標のためだけに力を発揮する。

星の殲滅種。

「避けられぬ戦いと言うならば是非もなし、私は世界中の子ども達のために貴方を倒さなくてはならない……ッ！」

爆発的に膨れ上がった存在感が世界を“凍結”させる。

便宜的に凍結と言ったが、正確には違う。この二人が争うということは、それ即ち五つの魔法すら越える絶対的な力と力のぶつかり合いが地上で巻き起こるということ。その威力に世界は僅かですら耐えられない、故に時空間を超越したこの戦場へとサンタクロースはサンタクロースを閉じ込めたのだ。

そしてこの空間から外に出れるのは、勝利した方だけ。

「くっ、クヒヤヒヤヒヤハハアア!! 殺してやるぞサンタクロースうろうろ！」

童……童……と全身から溢れ出す障気にサンタは息をのみ……この運命の残酷さに心が軋む音を確かに聞いた。

「貴方を倒します……」
「兄さん」

サタンクロースはサタンクロースの反存在である。そう言ったし確かにそれは事実だ。だが、それは『サンタが先に生まれた』と言うことを現しているのではない。

人は正しく生きようとしても、悪の道を捨てきれない生き物である。しかしだ、そもそも悪の道こそ“人の正しい道”なのではないだろうか？

サタンクロースとサタンクロース。

この二人の争いの果てに、我々は人という種の“真理”を知ることが出来るのかも知れない。

我々は悪であるか。

それとも……………

「……………」

変な夢見たあ」

いつの間にか寝ていたイリヤはそう呟き、起きた。

もしヘラ　　くもしもイリヤがヘラクレスをセイバー
クラスで喚び出すという暴挙に出たら

なんか思っていたより凄く早く触媒が届いた。

欲しい商品をクリックした瞬間、玄関で配達員が荷物を持って待機
していた……ぐらい早かった。

「ん〜思ったより地味ね、でもいつか。要は英霊との繋がりになれば
良いわけなんだし」

まだ聖杯戦争は始まっていない。

もしもの為の準備として用意した触媒だったが……考え様によっ
ては、これは最大の好機かも知れない。

だつてヘラクレスだ。

ギリシャ神話最強の英雄ヘラクレス、人の枠を超えて今や神の末席
に存在する超常存在。

僕が考えた最高のチート能力を持つあらゆる難敵や、かぐや姫でさ
え考え付かない様な無理難題、抑止力ですらドン引きする程の制限を
掛けられながら十二の試練を超えてきた英雄。

並の英雄ですら人間では手も足も出さず負けると言うのに、その英雄
を片手間でブツ殺せる程の英雄を超えた大英雄。

由緒正しい超チート系主人公の先駆けである。

「善は急げ、つてね？　ふふ〜ん♪」

残りのクラスが何かまでイリヤは把握していないが、まあどんなク
ラスで喚んでも『何とかなるよ絶対大丈夫だよ』と無敵の呪文を唱え
ながらサーヴァント召喚を行なった。

PON☆

恙無く厳かな儀式を終え、エーテルが嵐の様に吹き荒れながら一点
に収束する。

凄まじいまでの筋肉と申し訳程度の鎧と長剣を携えたサーヴァン
トが、イリヤに対して頭を垂れて恭順の意思を示していた。

「サーヴァント、セイバー。参上致しましたお嬢さま、何なりと御命令

を」

色々（頭のおかしな）逸話が残っているので少しだけ心配していたが、喚び出されたヘラクレスはめっちゃ紳士だった。

この闘い、我々の勝利だ！（死亡フラグ）

「宜しくねヘラクレス、早速で悪いのだけれど貴方の願いは何かしら？」

「何ありません、強いて言うならば……貴女の笑顔を、褒賞として頂きたい」

丁寧な聖杯で願いは叶わない、ブツ壊すつもりだと説明し終えてもヘラクレスの態度は変わらなかった。

従うフリをしているのかとも訝しんだが、溢れる程に濃厚な紳士オーラの前ではそんな邪推をする事自体が無意味だ。

ただその在り方のみで誰もが心奪われる、これこそが大英雄たる者の証！

「さ、エスコートして頂戴。目指すは柳洞寺よ！」

「ご随意に」

・市街 対ランサー

「おっと待ちな、そのサーヴァント！」

その巨体を駆使して意外な程に乗り心地の良いお姫様だっこ状態で柳洞寺を目指していたイリヤ達の前にサーヴァントが立ち塞がった。

鋭い眼光と、それよりも尚鋭い殺気と存在感を持つ全身を蒼の軽鎧で固め朱槍を持ったサーヴァント。

ランサー。

「お下がりにくださいお嬢様」

油断なく主を降ろし、視線を遮る様に立ち塞がるセイバー。

その間ランサーは微動だにせず、じっと精神を尖らせながら構えを取らず佇んでいた。

「ふむ、どうやら礼を言わねばならぬようですねランサー殿」

「んなもん必要ねえよ。アンタ程の英雄と戦ろうってんだ、余計な事にかまけられてれちやあ困る」

イリヤが離れるのを見送った2人は互いの獲物を構え、臨戦態勢へと移行する。

ああ、始まるのだ。

今よりも神秘が濃く、強大な生命体が跋扈していた世界に於いてすら輝かしいまでの功績を残した英雄達の戦闘……いや「戦争」が始まるのだ！

「フツ、では尋常に……」

「へっ、いくぜっ!!」

「射殺す百頭!」
ナインライプズ

「ぐわああああああああ!!」

ヘラクレスの持つ最強技が炸裂した!

超高速の九連撃は、最速のサーヴァントであるランサーの能力を以てしても回避する事が叶わなかったのだ!!

敗れたランサーは霊核を完全に破壊され、この世から消滅した。

「ふう……危なかった。貴方が能力を抑えられてさえないなければ、どちらが勝ってもおかしくない素晴らしい勝負になったでしょう。次に全力で闘う機会があれば敗れるのは私かも知れませんね」

勝って兜の緒を締めよ。

勝利した後も油断するなと言う故事に倣ったわけでは無いだろうが、ヘラクレスは勝利を誇るでなく謙虚に敗れていったサーヴァントへの賞賛を口にした。

名も知らぬままに消えていったサーヴァントだが、その力は決してヘラクレスに劣るものでは無かった。

それは相對したヘラクレスこそが誰よりも理解している、紛れも無く先程の闘いは十二の試練と比べても遜色ないものだった。

「さあ、行きましようお嬢様。掴まっついて下さい」

「……ええ、セイバー」

予期せぬ戦闘にも関わらず勝利を勝ち取った己がサーヴァントに對しイリヤは内心で惜しめない賞賛を贈っていた。

呆気なく決着がついた様にイリヤには見えただが、彼が言うのだから先程の戦闘は正に紙一重の勝利だったのだろう。

そして同時に――

“最強のサーヴァントを召喚したのだから勝てるに決まっている”

そんなウツカリ染みた、もしくは最強厨ア○ト翁の様な愚かしい思考をしていた事をイリヤは恥じた。

ヘラクレスと言えども絶対の存在では無いのだ。

彼をも上回る英雄が居ないわけではない………まあ過去未来含めても多くて3・4人居るか居ないかぐらいだろうが。

安易に聖杯戦争を早期終結させようと考えて柳洞寺に向かっている現状を冷静に見つめ直す。

引き返すべきなのかも知れない。

今の戦闘を他の陣営が監視していた可能性もある、下手をすれば対ヘラクレスに特化したサーヴァントが召喚されている可能性もある。

「セイバー、あの……「ご心配には及びません」えっ?」

「私は貴女が喚び出したサーヴァントです。それが最強で無い理屈などありません（ニコツ）」

そうだった。

またしてもイリヤは勘違いしていた。

確かにどんな強敵が待ち構えているか分からない、けれど彼はヘラクレスだ。

かの大英雄ヘラクレスなのだ。

未だ見ぬサーヴァント、そのどれもが油断ならない強敵。

それが何だと言うのか。

こちらはヘラクレスなのだ。

バーサーカーとかいうハンドも背負っていないヘラクレスが負けるはずが無い!

「ええ、そうよねセイバー。勝つわよ」

事ここに至ってイリヤに出来る事は、ただ己のサーヴァントを信じるのみ。

ならば問題ない、だってヘラクレスだもん。
黙ってその分厚い胸板に頬を預ける、そこから感じられる温もりに
身を委ねた。

「ヘラクレスのつよきのひみつ・そのいち」

ヘラクレスはとつてもつよいサーヴァントなんだ。

かれは十二のしれんをのりこえたことで、十一このいのちのストツクをもっているぞ！

だからぶつちやけ、ランサーのこうげきがあたつても十二かいころされなかつたらたいしてもんだいじゃなかつたんだ！

すごいぞヘラクレス!!

・ 柳洞寺 対キャスター&アサシン

「あ、終わったわ」

イリヤが危惧していた通り先程の激闘を覗き見していた陣営があつた。

柳洞寺を居城にしているキャスター陣営である。

そして決定的な事実にはキャスターは気付いてしまったのである。

ああ……この闘い、我々の敗北だ！ と。

残念ながら生存フラグには転じない、これはもはや決定事項だ。

「なんでヘラクレス!? よびにもよつてヘラクレス?!? どうして、どうしてヘラクレスなのおつ?!?! も!?と他に居るでしょ、セイバークラスに召喚される英雄なんてツツツ?!?!? さもありなん。?!?!?!」

キャスターはセイバーの正体であるヘラクレスを良く知っていた、それこそ自分がどう足掻いたところで敗北してしまうだろう事まで。恐怖と困惑と絶望のあまり錯乱する程度には。

何故キャスターがこれ程までにヘラクレスを恐れるのか、その理由を簡潔に説明しよう。

“ヘラクレスだから”

うむ、この一言に尽きる。

理不尽と書いてヘラクレスと読むのは当たり前、最強無敵と書いてヘラクレスと読み、絶対勝利と書いてヘラクレスとも読む。

ついでに、紳士と書いてヘラクレスとも読む。これは常識だったかな？ ハハハ。

ヘラクレスはヘラクレスだからヘラクレスなのであって、そこに余計な言葉は必要無い。

ましてやキャスターは生前、そのチートを超越したチートぶりを見せる生のヘラクレスを観賞してしまったのだ。

そこらの英雄を弱者に変えてしまう程の圧倒的な大英雄、それこそがヘラクレス！

今やサーヴァントとして劣化した状態とは言っても、それがヘラクレスにとつてどれほどの意味があるだろうか？ いや無い。

例え全盛期の英雄や世界からバックアップを受けた守護者だろうが真祖の吸血鬼だろうがアルティミットワンだろうが。

ヘラクレスの前では霞んで見える事だろう。

せめてヘラクレスがセイバーではなくバーサーカー（失笑）クラスで召喚されていたら、理性を奪われ卓越した戦術や戦略を失いキャスターにも倒せる可能性が、コインを投げて百回連続なんの仕掛けも無く表を出し続ける事と同じ程度には可能性があった。

しかしヘラクレスのクラスはセイバーだ。

これなんてムリゲー？

セイバー。

聖杯戦争でも最優と評され、必ず終盤まで生き残った実績もあるセイバーのクラス。

ヘラクレスの能力が最も発揮できるアーチャーとして喚ばれるよりはマシかも知れないが、こちらが10の力しか無いのに150の力が130になっても大差は無いのである。

(詰んだわ。ああ、宗一郎様……申し訳ありません、メディアは此処で死にます)

そんな風に茫然自失している間に事態は取り返しの付かない所まで進んでしまった。

まあキャスターがヘラクレスを見付けた時点で手遅れだったのは今更言うまでもない。

ドン!

山門の方で派手な音がした。

慌てて飛び出したキャスターは、ひゆるひゆると音を立てながら一人の男が空を舞い、その身体を構成しているエーテルを花火の如く散らしている様を見付ける。

一切の描写すらくなく山門で待ち構えていたアサシンが消えていく、その光景は決して他人事では無かった。

門番が門を護れないなど死んで当然、敗北したアサシンが消えていく事に、本来ならば役立たずめ! と詰るぐらいはキャスターもしていた。

しかし今回ばかりは話が違う。

だってヘラクレスだぜ?

寧ろキャスターは消えていくアサシンに対し、召喚してから初めて真摯に謝罪の念を送っていた。

「ふう……多次元屈折現象、かの第二魔法の一端と剣を交える事が出来ようとは。アサシンのサーヴァント佐々木小次郎殿、貴方に勝利できた事は私にとって最大の誉れとなりましょう。

おや、貴女は……?」

また1人、辛くも強敵を下したセイバー。

ランサー戦と同じく、どちらが勝ってもおかしくない名勝負だったんじゃないかな。

たった一合での決着だったが、それは結果論だ。

命のストックは1つも減っていないが、それはそれだ。

そもそも当たっても問題なかった気もするが、多分アサシンの一撃なら通じたんじゃないかな? (名推理)

「おお、これはメディア嬢。このような場で再会するとは何という奇縁。本来ならば旧交を――」

「あ、ああ……あああ………！」
戦意喪失。

ヘラクレスは直ぐにキャスターの正体を思い出しにこやかに語り掛けて来るが、当のキャスターは言葉が耳に届かない程に錯乱している。

錯乱のあまり魔術を乱発する、そんな状態でも極めて美しい魔術がヘラクレスへと――いや、その背後で「やっちやえセイバー！」と何時の間にかチアガール姿になって応援しているイリヤへと迫っていた。

「危ないお嬢さま！^{ナインライブズ} 射殺す百頭!!」
「きやああああああああ!!」

何か凄い神秘を感じさせる長剣（凄い剣の宝具）でキャスターの創り出した魔弾を切り払い、渾身の一撃（九連撃）がキャスターへと炸裂した。

霊核まで到達したダメージにより、キャスターは己がマスターへ最後の言葉を遺す事無く消えて行った。

「ふう、危なかった。貴女の戦い方を知らなければ苦戦は免れなかったでしょう、相変わらずの魔術の冴え。言葉ありません。流石はキャスターのサーヴァント、これが魔術戦ならばキャスタークラスへ適性の無い私では手も足も出なかったでしょう……」

セイバーはキャスターへ惜しみない賛辞を口にする。

生前、死後も合わせてこれ程の魔術師はない。魔術に関しては門外漢であるセイバーをして、彼女の能力の高さは異常の一言に尽きる。

数々の難行苦行を乗り越えたセイバーをして、魔術の極みとは想像すら叶わない至高の領域であった。

故に、キャスターのクラスとして喚び出されたメディアを心底から尊敬していた。

「手強い者達でした、ですがこれでお嬢様の目的への障害は無くなりました（ニコッ）」

「うん、かつこよかったわセイバー！ 素敵！ 筋肉サイコー！」
「おっと、喜ぶのはまだ早いぞー」

突如として響いたその声の主は、黄金の鎧に身を包んだ謎の男であった。

「ヘラクレスのつよさのひみつ・そのに」

サーヴァントは七つのクラスがあるぞ！

そのなかで、ヘラクレスはキャスターいがいの六つのクラスにてきせいがあるんだ！

ふつうのえいゆうでは、おおくても三つぐらいなのにね！

すごいぞヘラクレス！

・ 柳洞寺 対金ピカ

「ムッ！ お下がりでくださいお嬢様、今までのサーヴァントとは桁が違います!!」

柳洞寺の上から見下ろす様な視線を向ける全身黄金色の男が手を振りあげると、空間が波打つ様に揺れて古今東西ありとあらゆる神話や英雄譚で語られた武器が出現した。

それを見て、あまりの規格外さに驚くイリヤ。

彼の存在は “知ってはいたが” ここまでとは想像すらしていなかった、普段はそれこそーいや、これ以上は本編のネタバレになるので止めておこう。

「我は海外でとある事をしていたが、何故だか知らんが唐突に気が変わった冬木へと戻って来た。そして貴様を見付けたのだ、半神の英雄よ！（最古の説明台詞）

我が名はギルガメッシュ、古代ウルクを治めた原初にしてこの世界、唯一無二の王である。

さあ、そなたも名乗りを上げるがよい。大英雄よ！」

この男を知っている者がいれば驚くだろう、他者を全て取るに足ら

ない雑種であると見下すだけの男がある程度の礼儀を払っている事に。

「問われたならば答えぬ訳にはいかないでしょう。

セイバーのクラスで現界しました、名をヘラクレスと申します。

御尊顔を拝謁賜り、光栄の極みでございます。英雄王殿」

「そう畏まらずともよい、この我が赦そう。

そなたは手ずから打倒するに値する相手だ、しかし履き違えるなよ？ 例え大英雄ヘラクレスとも言えど、この我と同格ではない」

ギルガメツシュ。

最古の英雄王。

またしてもイリヤが危惧していた通りの相手がヘラクレスの前に立ち塞がった。

その財は世界の全てを手にしたときれ、それを納めた蔵の中には正にありとあらゆる物が存在する。

もはや本人にすら全容を把握しきれていない程の大量の財を武器と成し、湯水のように使い潰す。

基本的に一つの武器しか持たない英雄には、決して出来ない次元違いの戦闘法。

「さあ、ここに神話の再現というのか！ 出し惜しみはせぬ、我の全力を以てそなたを葬り去ろう!!」

天を覆い尽くす程に展開された蔵の中から手元に向かって光が収束する、その手に収まったソレを見てイリヤの背筋に悪寒が走る。

何だあれは。

あんなものが存在するのか。

凡そこの世に存在する全てを超越しているであろうソレがゆっくりと回転を始める、雄大なセイバーの背中が見えていなければきつとイリヤは気絶していただろう。

「お嬢さま……」

一度だけ、振り返ったセイバーと視線が合わさり……それだけで全てが通じた。

彼を信じる。

そう、かの英雄王と言えども目の前にいるのは大英雄ヘラクレス。ヘラクレスが負けるはずが無い、ならばイリヤに出来ることは信じる事だけ！

「勝って、セイバー!!」

パキイイイイン!

「うおおおおお! 射殺す百頭ナインライブズツツツ!!」

「おのれええええええええええ!!!」

彼我の戦力差は、残念ながら総力でギルガメツシュが上回っていた。

だから1つ目の令呪で攻撃速度を上げ、2つ目の令呪でギルガメツシュの目の前に空間転移させた。

財宝も切り札も間に合わず、一瞬よりもなお刹那に神速の一撃（九連撃）で滅多打ちにされたギルガメツシュは、黄金の鎧ごと吹き飛ばされこの世から消滅した。

「貴方は間違いなく最強の相手でした、私1人では敵わなかったでしょう。しかし私は1人ではなく、勝利の女神が傍にいたのです。

くっ、膝に矢を受けてしまっていたか……」

「セイバー!」

倒れ込むセイバーの前に慌てて駆け寄るイリヤ、何とか倒す事が出来たが英雄王は間違いなく最強の敵だった。

本当ならば辛い、ゆつくりと休ませる必要があるのだが……どうやら事はそう簡単にはいかないらしい。

イリヤを抱え込んでその場から飛び上がるセイバー、そこに鎖の付いた杭のような短剣が突き刺さる。

「くっ、まだ居たのねサーヴァントが!」

【ヘラクレスのつよさのひみつ・そのさん】

一どうけたこうげきにたいせいをもつぞ!

おなじこうげきはつうようしないといてもかごんではないんだ

!

こうそくではうごけないけどね！
すごいぞヘラクレス！

・柳洞寺（負傷） 対ライダー

「流石に避けますか……」

むっちやエロい服装のサーヴァント、ライダーが現れた。

その後ろでワカメがうねうねしている、勿論ワカメが喋る筈がないのでワカメに台詞はない。いいね？

「ご無事ですかお嬢様！」

「ええ、ありがとうございます」

『ワカメ言語（訳：私は見つけました。隙を。だから攻撃しました、彼女が。結果にがっかりです）』

「申し訳ありませんシンジ、どうやら釣られてしまったようです」

ワカメがうねうねと動いた中で何かしらの意図を悟ったライダーが謝罪を述べる。

そう、膝に矢を受けてしまった……と言うのはサーヴァントが潜んでいる気配を察したセイバーが行なった欺瞞だったのである。

「むむっ！ 貴女のように見目麗しい方が、その様な破廉恥な格好をするものではありませんよ！」

「お気遣いありがとうございます、どうやら見た目にそぐわない紳士なようですな」

『ワカメ言語（訳：戦いましょう。それを望んでいます。私が。私。手負いですよ）』

「ええ、シンジ。宝具の使用許可を」

ライダーとワカメはセイバーが疲労している今がチャンスであると、宝具を使って一気にカタを付けようと画策した。

その狙いは正しい。

英雄王を倒す為に全精力を注いだセイバーの消耗は、規格外の魔力量を誇るイリヤを以てしても直ぐには賄い切れないものであった。

あと5分あれば……いや、それは今更だ。

既に美しい天馬を召喚したライダーはめがっさ速く天から流星のように降り注いでくる。

「セイバー……勝って！」

もう令呪は易々とは使えない、残りの1つは大聖杯を破壊する為に使わなくてはならない。

だから信じる。

かの英雄王を打倒するという新たな神話を創り出した大英雄ヘラ

クレスを！

「騎兵の手綱！」

「射殺す百頭！」

ガツン

ボカン

流星の降り注いだ柳洞寺の境内は、気の毒なくらいボロボロに破壊されていた。この修理費は半端な額じゃないだろう、監視している教会関係者もコレには苦笑い。

もうもうと立ち込める土煙の中で、イリヤはサーヴァントが消失していく気配を感じた。

しかし心配はしていない。

それは令呪による繋がりだとか、ラインの有無とか、そんなチャチな理由ではない。

「……………ふう、危なかった」

立ち込めていた土煙を振り払うように剣を一振り、生み出された風によって砂が吹き飛ばされ残されたサーヴァントの姿が顕となる。

巨体。↑ん、誰かな？

まだ分からない（首傾げ）

筋肉。↑ん、誰だろう？

まだ分かんねえなあ（疑問符）

紳士。↑ヘラクレス！

分かった、勝者は彼だ（納得）

そう、一瞬先にライダーの駆る天馬へと一撃（九連撃）を当て生き残ったのはヘラクレスだった。

「互いに消耗していた身。もしも貴女の魔力量が少なくなければ、負けていたのは私だったでしょう。」

今回の勝利の理由。私が貴女に勝ったのではない、私の主人の力が貴女の主を上回っていたのです」

そう、イリヤは確信していた。

ヘラクレスが負けるわけないんだから！ と。

謎のワカメは奇妙な音を発生させながら（おそらく地球外生命体）うねうねと逃げ出していった。

今度こそ終わった、などと油断するようなイリヤでは無い。

見知った魔力が、その存在を誇示するように此方を見つめていた。

キツ、と山門を見やる。

「流石ね衛宮さん、それ程の大英雄を従えた上で一夜にして5体ものサーヴァントを打倒するなんて。」

やっぱり貴女は、私が超えるべき壁の様ね！」

今宵、最後となる強敵が姿を見せた。

【ヘラクレスのつよさのひみつ・そのよん】

もうね、とにかくヘラクレスはつよいの！

ヘラクレスはさいきょうなんだ！（かりやかん）

すごいぞヘラクレス！

・柳洞寺（崩壊） 対アーチャー

「やれやれ、これはとんでもないサーヴァントと闘う事になりそうだな」

誰かの為に生きて。

この一瞬が全てでいいと駆け抜けた英雄が居た。

神秘が薄れ、個としての力よりも普遍的な力による闘争の様相を呈する現代に於いて、独力で英雄となった存在。

「その出で立ち、佇まい。並の戦士ではありませんね、相手にとって不

足はないでしょう」

「かの大英雄ヘラクレスにそこまで言つて貰えるとはな、いや……この身も捨てたものでは無いらしい」

対峙する英雄2人。

本来ならばアーチャーは遠距離から弓で闘うサーヴァントであるが、こと聖杯戦争に限つては『弓が宝具なんて(ドン引き)アーチャーの面汚しっ!』とまで言われる程に弓が主体では無い。

剣の英霊であるセイバーに対して、アーチャーも陰陽の双剣を携える。

ハツタリではない。

どれほどの腕かは分からないが、アーチャーの持つ剣技は油断していいものではない……とセイバーの戦士としての勘が告げている。

さらに、そこに加えて――

「凜――」

「ええ、我がサーヴァントに命ずる！ 汝が宝具を此処に示せ！」

事前の取り決め通り令呪によつてアーチャーが持つ宝具が強制発動され――世界が変革する。

地面を這うように吹き上がった炎が柳洞寺を包み込み、次の瞬間には空に巨大な歯車が浮き大地には無数の宝剣が無造作に突き刺さっている。

一面の荒野、急に自分達の周囲が “入れ替わった事に” イリヤは心底から驚愕した。

「そんな、固有結界だなんて!?!」

固有結界・無限の剣製。

世界を、己の心象世界で上書きして創り変える魔術の禁忌にして究極の奥義。

その難易度たるや、キャスタークラスでも最高レベルの能力を持つメディアにすら不可能と言えば理解出来るだろうか？

「すごい、本当に固有結界なんだアンタの宝具……」

「疑つていたのかね？」

「まあね、見直したわアーチャー。確かにこれなら、あのヘラクレスに

も渡り合えるかも知れない」

ヘラクレスの能力の要は、その圧倒的な肉體能力である。

加えて凜は知らない事であるが、12回死ななければ倒せずAランク以下の攻撃は無効にし、更に1度受けた攻撃に対して耐性を持ち、戦術眼や戦略眼も高いレベルで備えている。

そんなヘラクレスに対して、無限に剣を内包しているこの固有結界の中には英雄王と比べれば見劣りするが様々な聖剣・魔剣の類が幾つも存在している。

奇しくも英雄王が行おうとして失敗した（令呪ブーストによる瞬殺）対ヘラクレスに特化した、物量による殲滅戦をアーチャーは行えるのである。

加えて固有結界の中ではイリヤが身を隠せる所は存在せず、ヘラクレスは防戦を強いられる事となる。

「さあ、いくぞ大英雄ヘラクレス。躲してもいいが、その場合―――背後の少女の命は諦めろ」

この世界の支配者、アーチャーが手を翳しただけで30以上にも及ぶ宝剣がセイバーへと襲い掛かる。

危うしセイバー！

「おおおおおおおおお!!」

四方八方から襲って来る剣の群れをセイバーは難なく打ち払い、じりじりと進む。

その動きに合わせるようにイリヤもセイバーの後ろに追随する。

実をいえばアーチャーは個人的な事情でイリヤを狙う気は無いのだが、それを知る由も無いセイバーは僅かにでもイリヤに当たる可能性がある以上下手に動く事は出来ない。

一発だったら誤射かも知れない（売国感）なんて理屈は通用しないのが現実だ。

「衛宮さん！ 貴女は私が相手よっ!!」

「くっ、お嬢さまー!」

「させると思つかねッ!」

「セイバー!」

セイバー対アーチャー。
イリヤ対凜。

単純な能力差で言えば、どちらもセイバー陣営の方が2つも3つも上回っている。

互いに格上の相手と闘うアーチャー陣営だが、意外にも押しているのは彼らの方であった。

「そら、私ばかりにかまけていても良いのかね？ 掃射！」

「させないっ、射殺す百頭!!」

無限の剣製内でアーチャーに把握出来ない事は無い、彼は凜をサポートするようにイリヤへと剣を向け、セイバーはそれを防ぐ為に気を回さざるを得ず、凜に対して攻撃をしようとすればその隙をアーチャーは逃さず大威力の宝具を叩き込んでくる。

普段のイリヤならぶつちやけ凜は楽勝なのだが、アーチャーの無駄に正確な射撃により行動を著しく制限されており、おまけに魔力がものっそい減っておりセイバーの維持にも少なからず魔力を割かなければならない。

大英雄であるが故の弱点が露呈した形だ。

「いけるわっ、今日こそ貴女に勝つつー！」

「リンのくせに生意気なのよっ！」

「おや、我々の決着よりも彼女達の方が先につきそうだな」

「っ!! ぬうう……うおおおおおおおおおあああ!!!」

しかし、まだ彼ら「3人」は理解し切れていなかった。

「アーチャー殿、貴方との戦闘は心躍る。このまま何時までも闘っていたい程に……しかし」

「っ?!」

「これ以上お嬢さまを、危険に晒させる訳にはいかないっつつつ!!」

大英雄ヘラクレス。

彼がイリヤからの召喚を受けた本当の理由。

それは彼の本体が存在する英霊の座にて、一つの「記録」に過ぎないある次元での出来事が切っ掛けだった。

『バーサーカーは強いね』

冬の城で出会った1人の少女。

狂化によって理性を失っていても尚、護ると決めた1人の少女を――護り抜けなかった記録。

並行世界の何処かに喚び出されたヘラクレスの分霊が経験した苦い思い出、数ある記録の中に埋没する記録。

当然だ。

英霊の座に存在する者は、もはや時間の流れから切り離されており成長も劣化もする事なく存在し続けている。

そう。

だがそれは、一般的な英霊の話だ。

彼は誰だ？

ヘラクレスだ。

只の記録に過ぎなかったソレは、本体であるヘラクレスの魂に深く刻まれた。

だから応えたのだ。

何もヘラクレスも、自分が救えなかった少女の元にもう一度喚び出される事を願ってなどいない。

ただ、誓ったのだ。

この身の全てを、死力を尽くしてでも、あの少女と限りなく同一で限りなく別人に喚びだされようとも！

「ナインライプス射殺す百頭×千ツツツ!!」

必ず。

「なんでさああああああああ!!」

護り抜くと。

「アーチャー、この闘いだけは勝たねばならなかった。今回は私の勝ちですが、貴方の剣の冴え……恐ろしいモノでした。この闘いを忘れる事は無いでしょう」

それだけを誓い、召喚に答えた。

「っ、アーチャー?! うっ……」

「残念ねリン……私達の勝利よ」

一瞬、凜はアーチャーの敗北に気を取られ……その一瞬で背後にまわりこまれ昏倒させられ敗北した。

【ヘラクレスのつよさのひみつ・さいご】

だってヘラクレスだから！

・円蔵山内 対大聖杯

「これでお別れねセイバー」

「ええ、お嬢さま」

小聖杯の不在により緊急措置として大聖杯に溜まっている英霊の魂により、大聖杯は何時暴走してもおかしくは無かった。

此処まで来るのに時間は大して掛からなかったが、濃密な半日を過ごした。

もう直ぐ陽が明けるだろう、教会関係者の尽力によって柳洞寺内に居た人間は全て運び出されている。

これで何が起こっても、円蔵山がブツ飛んでも誰も被害を被らない。

「ねえ、セイバー……」

じつと見上げてくるイリヤの視線と合わせて見つめ合う、若干だが潤んだ瞳と頬に熱を帯びているイリヤは恥ずかしさや悲しさを堪えて、精一杯の賛辞を告げた。

「セイバーは、強いね」

そう言つてニッコリと笑ったイリヤの小さな体を脳裏に焼き付けて、セイバーは大聖杯へ向かつて歩み出した。

何と勿体無い言葉か。

様々な美辞麗句を並べ立て褒めそやすよりも、飾らない一言がセイバーの……ヘラクレスの胸を震わせる。

「お別れです、お嬢さま。どうか御家族と元氣にお過ごし下さいませ。

貴女が笑っている姿が、私にとって何よりも褒賞なのですから」
「うん……分かったわ。第三の令呪によつてヘラクレス、貴方にお願
いするわ。」

大聖杯を、壊して！」
キーン。

最後の令呪が発動し、ヘラクレスの剣に大聖杯を確実に吹き飛ばす
能力を与えた。

外に向かつて走つて行くイリヤの足音を限界まで聴き続け、やがて
被害範囲から完全に離れた事を感じ取つたヘラクレスは己が最強宝
具を解き放つた。

「射殺す……ライプス
百頭！」

ズガガガガン…。

円蔵山をくり抜く様に吹き上がった魔力の柱は、一足早い陽光と
なつて冬木の街を明々と照らした。

イリヤの中に僅かに残っていた聖杯としての機能が告げてい
る——大聖杯の崩壊を。

「ありがとう、ヘラクレス」

もはや彼とのラインは繋がっていない、けれど別の繋がりはきちん
と残っている。

それは絆。

半日にも満たない関係だけれども。

確かな主従の絆が、しっかりと心に残っている。

それはとても暖かくて、大きすぎて、だからだろうか。

「さようなら、ヘラクレス……」

笑っているのに、溢れ続ける涙を止める事が出来なかった。

「イリヤ、行ってきます」

「うん。行ってらっしゃいシロウ」

何事も無く朝を迎えた衛宮邸。

普段と変わりなく出掛けて行った弟を笑顔で見送り、何時もの様に
アニメ鑑賞に精を出す——事をせず、無意識にヘラクレスを喚び出

した中庭へと向かっていた。

聖遺物を取り寄せたのは万が一の為だった。

サーヴァントに対して戦力以上の期待はしていなかった。

全てが終われば達成感に包まれるものだと思っていた。

「……ヘラクレス」

彼を喚び出した触媒を握り締めて、胸へと抱き寄せる。

こうしていれば彼の胸に抱かれているような暖かな気持ちでいられる、目を閉じれば短くも確かに心の通じ合った彼との思い出が蘇る。

殆どが戦いの中だったけれど、そんな中で2人は形だけの主従から本当の主従へとなれた。

無意識にニヤけてしまう、あんなにも凄い英雄を従者にしたのだという誇らしさで胸が一杯だ。

「……っ！」

だから、こんな無様な真似は今日限りだ。

ポタ、ポタと涙が頬を伝い膝へと落ちていく。

あんなにも泣いたというのに、1人切りになると……涙を堪える事が出来なくなった。

(お母様……切嗣……ヘラクレス……会いたいよう)

かつて。

まだ冬の城で母の死と父の裏切りを告げられた時は、悲しくもあつたがアインツベルンと言う地獄では、その感情だけに身を浸す事は叶わなかった。

だから無理矢理にでも、少なくとも表向きには感情をコントロールする事が出来た。

父に地獄から救われ、新しい家族が増えて母の喪失という悲しみを意識しなくなった頃……父が目の前で死んだ。

その悲しみは。アインツベルンで結果だけを聴かされた時とは段違いの衝撃をイリヤに与え、心の中に今も残る大きな傷を残した。

それでも立ち上がったのは、まだイリヤには家族が居たから。

大切な弟。

強くあらねばと思った。

イリヤに残された最後の家族。

弟を護るのは、姉である自分の役目なのだからと。

そんな弟が魔術の鍛錬で失敗し、身体の内部分から剣を生やして、生死の境をさ迷った時、イリヤの心に刻まれた傷は更に広がり深く抉り込んだ。

何とか一命を取り留めた弟を叱る事無く、ただただ三日三晩無様に泣き続けた。

それからだ。

大切なモノを失う悲しみに、己が耐える事が出来ない事を悟った。だから弟以外を心の中から追い出し、大河や雷画、桜など周囲の者達と一歩だけ線を引いて付き合い始めた。

他者との深い関係を拒絶し、イリヤは生きて来たのだ。

『貴女の笑顔を、褒賞として頂きたい』

それだと言うのに。

ヘラクレスという英雄は、イリヤが作った心の壁を容易く打ち破って入って来た。

不快感は無かった。

気付きもしなかった。

だって心から、好きになったから。

気付いた時には。

イリヤの中からヘラクレスという存在は決して消える事なく刻まれている。

その喪失で、また大きくイリヤの心は深く抉られた。

「っ……う……っー」

堰を切ったかの如く溢れ出してくる悲しみは、せめて彼との約束である笑顔でいようとする気持ちをも濁流の如く呑み込んでいく。

鏡が無くて良かったと思う、きつと自分の表情を認識してしまつては。

理解してしまつたら。

心が折れてしまつたらだろうから。

ザツ……

笑わなくてはいけないのに、どうしてこんなにも身体は言う事をきいてくれないのか。

ボヤけた視界に映るものをなんとは無しに見る。

涙で濡れた自分の膝と、庭の土色と……太陽光を遮る大きな影と、差し出されたハンカチ。

ハツとして顔を上げ……。

「何か悲しい事がありましたか……？」

「……ううん、そうじゃないの」

ああ、そもそもどうして自分は彼を喚び出したのだったか？

唐突に胸に湧いた疑問に対して、その答えもまたフツ……と胸に湧いた。

そうだった、これは聖杯戦争。

7人の魔術師と7体のサーヴァントが争う戦争に参加する為だった。

最後の1組は、どんな願いも叶う聖杯を手にする事が可能となる戦争に。

(……こういうの、日本語で何て言うんだったかしら)

ああ、そうか。

どんな願いも叶うというのが真実ならば。

第五次聖杯戦争の実質的な勝利者であるイリヤの、その願いが叶わない道理は無かったのだ。

そう、主であるイリヤの願いが叶った。

ならばその従者の願いも叶わないなんて道理は無い。

「では、どうされましたか？」

心配そうに訊ねる男の、その巨体からは想像もできない優しい瞳を見つめる。

まだまだ涙は止まらないが、胸を引き裂くような激情は感じない。と、こんな風に自分1人で納得していても仕方がない事にやっと思

に至った。

未だに困惑気味の男は頬を掻きながら、黙ってハンカチを差し出し続けている。

そんな、肝心なところで察しの悪い男からハンカチを奪い取って今日一番の飛び切りの笑顔で答えた。

「これはね、嬉し泣きって言うのよーヘラクレス」

この日、衛宮家に新しい「家族」が増えた。

【Ending of S】

エンディングNo.0

難易度：スーパーイージー

士郎生存度：120(100)

・ルート突入条件 イリヤの頼んだ触媒が1日早く届く

特徴 突入した時点で士郎の生存と聖杯戦争終結が確

定する特殊ルート

ヒロイン 無し

・備考

本編とは別の番外編、設定等は共通。

ギャグ8割、シリアス2割。

バーサーカー、実は一切の描写もなく巻き込まれて消滅している。哀れ。

その正体はアル……いや、よそう。

俺の勝手な想像で皆を混乱させたくはない(棒読み)

溢れ出した聖杯の魔力を浴びて受肉、呪いは圧倒的な紳士力によって無効化した。

謎の居候クレスさんとして衛宮邸に居候、士郎の卒業と同時にイリ

ヤと共に世界を回る旅に出る。

イリヤとの関係は主従と言うよりは親子の関係に近い、恋愛感情は互いに存在しない。

その圧倒的な紳士力によって幾つもの紛争を紳士的に解決し、名実共に「現代の英雄」として名を残す。

オリンピックに新種目『紳士道』が誕生した。